（財）八尾市文化財調査研究会報告19

亀　井　遺　跡

—南亀井町４丁目41－１の調査—

1989.4

（財）八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は河内平野の中心部に位置し、古代より難波と大和を結ぶ交通の要地であります。従って、市域には多数の遺跡が存在し、これらは古代史を解明する上で貴重な手がかりを我々に与えてくれます。

しかし、近年の社会経済的変動による大阪都市圏への人口集中は、耕地の宅地化を促がし、各種の土木建築工事になってあらわれており、その為、土中に埋もれている先人の残していった貴重な遺産の破壊散逸を招くことになりました。

その様な状況に対し、これら先人の足跡である貴重な文化遺産を後世にながく伝えるため、開発申請者のご理解の上、調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握と保存に努めている次第であります。

今回、南亀井町4丁目に位置する工場兼倉庫建設にともなう亀井遺跡の調査が完了し、報告書を刊行する運びとなりました。本書が今後、学問の発展と一般の方々への啓発に寄与できるならば、甚だ幸せに存じます。

最後にこの調査にご協力していただきました大昌印刷株式会社の関係各位、更には現地調査及び本書作成にご協力いただいた調査補助員諸氏に厚く感謝の意を表します。

平成元年4月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　福島　孝

例　　言

1．本書は、八尾市南亀井町４丁目41－１に所存する大昌印刷株式会社・工場兼倉庫建設に伴う発掘調査の報告書である。

2．本調査は、（財）八尾市文化財調査研究会が大昌印刷株式会社の委託を受けて実施したものである。

3．発掘調査は、（財）八尾市文化財調査研究会高萩千秋、八尾市教育委員会文化財室近江俊秀（現橿原考古学研究所）を担当者として昭和63年11月７日に着手し、同年11月24日に終了した。

4．本調査に際し、岡田清一、岡田聖一、高井裕之、利倉秀樹、並河聡也、横山妙子の参加を得た。

5．土器のネーミング・接合は、横山妙子、宮崎寛子、中谷聖子、土器の実測は、近江、徳谷尚子、岡田清一が行い、トレース、レイアウトは近江が行った。また清書は松浦明美が行った。

6．本書の執筆は近江、岡田、並河が分担し行い、担当は目次に記した。また、石材の鑑定は八尾市立刑部小学校教諭　奥田尚氏に依頼し、玉稿を寄せていただいた。編集は、近江が行った。

7．本調査にあたっては以下の諸氏の御教示を得た。記して感謝の意を表する。（敬称略）

福田英人、森井貞雄（大阪府教育委員会）　柴田昌児（徳島県埋文センター）　島田栄治（近江八幡市教育委員会）　米田敏幸（八尾市教育委員会）　原田昌則（㈶八尾市文化財調査研究会）

目　　次

序文、例言
第１章　調査に至る経緯 …… 1（近江）
第２章　亀井遺跡の環境
　第１節　地理的環境 …… 1（岡田）
　第２節　歴史的環境 …… 2（岡田）
第３章　調査の方法とその経過
　第１節　調査方法 …… 6（近江）
　第２節　調査日誌抄 …… 6（岡田）
第４章　調査の成果
　第１節　調査地の基本層序 …… 9（岡田）
　第２節　検出遺構
　　１．弥生後期の遺構
　　（１）ＳＫ－01 …… 11（近江）
　　（２）ＳＫ－02 …… 11（並河）
　　（３）ＳＫ－03 …… 14（並河）
　　（４）ＳＫ－04 …… 14（近江）
　　（５）ＳＫ－01 …… 14（近江）
　　（６）落込み状遺構 …… 17（近江）
　　（７）ＳＫ－01 …… 17（近江）
　　２．弥生中期の遺構
　　（１）土器棺 …… 19（近江）
　　（２）ＳＤ－02 …… 19（近江）
第５章　出土土器の型式分類 …… 21（近江）
第６章　出土遺物
　第１節　弥生土器の統計報告 …… 112（近江）
　第２節　弥生時代中期の土器 …… 123（岡田）
　第３節　石器 …… 127（岡田）
　　石材について …… 128（奥田　尚）
　第４節　亀井遺跡出土弥生後期の土器の検討 …… 129（近江）

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図…… 2（１／5000）
第２図　周辺の遺跡…… 4（１／50000）
第３図　調査区設定図…… 6（１／800）
第４図　土層断面図……10（１／120）
第５図　下層確認グリット断面図……10（１／40）
第６図　弥生後期平面図……12（１／200）
第７図　ＳＫ－01遺物出土状況図……13（１／20）
第８図　ＳＫ－02遺物出土状況図……14（１／20）
第９図　ＳＫ－04遺物出土状況図……14（１／20）
第10図　ＳＤ－01遺物出土状況図…… 15,16（１／20）
第11図　落込み状遺構遺物出土状況図……17（１／120）
第12図　弥生中期平面図……18（１／200）
第13図　土器棺出土状況……19（１／20）
第14図　ＳＤ－02土層断面図……20（１／20）
第15図　広口壷の分類……23
第16図　高杯脚部の分類……24
第17図　甕の分類……25
第18図　甕肩部の分類……26
第19図　口縁部による分類……27
第20図　底部形態……27
第21図　ＳＫ－01出土遺物（１）……29（１／３）
第22図　ＳＫ－01出土遺物（２）……30（１／３）
第23図　ＳＫ－01出土遺物（３）……31（１／３）
第24図　ＳＤ－01出土遺物（１）……32（１／３）
第25図　ＳＤ－01出土遺物（２）……33（１／３）
第26図　ＳＤ－01出土遺物（３）……34（１／３）

第27図　ＳＤ－01出土遺物（４）南側側溝内出土遺物（１）… 35（１／３）
第28図　南側側溝内出土遺物（２）…… 36（１／３）
第29図　落込み状遺構出土遺物（１）…… 37（１／３）
第30図　落込み状遺構出土遺物（２）…… 38（１／３）
第31図　落込み状遺構出土遺物（３）…… 39（１／３）
第32図　落込み状遺構出土遺物（４）…… 40（１／３）
第33図　落込み状遺構出土遺物（５）…… 41（１／３）
第34図　落込み状遺構出土遺物（６）…… 42（１／３）
第35図　落込み状遺構出土遺物（７）…… 43（１／３）
第36図　落込み状遺構出土遺物（８）…… 44（１／３）
第37図　落込み状遺構出土遺物（９）…… 45（１／３）
第38図　落込み状遺構出土遺物（10）…… 46（１／３）
第39図　落込み状遺構出土遺物（11）…… 47（１／３）
第40図　落込み状遺構出土遺物（12）…… 48（１／３）
第41図　落込み状遺構出土遺物（13）…… 49（１／３）
第42図　落込み状遺構出土遺物（14）…… 50（１／３）
第43図　落込み状遺構出土遺物（15）、ＳＸ－01 …… 51（１／３）
第44図　Ｏ－５Ｅ区土器集中部、ＳＫ－01北側…… 52（１／３）
第45図　弥生後期包含層出土遺物（１）…… 53（１／３）
第46図　弥生後期包含層出土遺物（２）…… 54（１／３）
第47図　弥生後期包含層出土遺物（３）…… 55（１／３）
第48図　土器棺（１）…… 56（１／３）
第49図　土器棺（２）　ＳＤ－02…… 57（１／３）
第50図　弥生中期包含層出土遺物…… 58（１／３）
第51図　出土石器…… 125（½、¼）
第52図　サヌカイト剥片…… 126（１／３）
第53図　弥生中期包含層出土砥石…… 127（１／３）

表　目　次

第１～53表　出土土器観察表…… 59～111
第54表　器種構成…… 113

第55表　壷の形式構成…… 114
第56表　広口壷の型式構成…… 114
第57表　高坏の杯部形態…… 116
第58表　高坏の脚部形態…… 118
第59表　甕の体部形態…… 117
第60表　甕の肩部形態…… 119
第61表　甕肩部と体部の関連…… 119
第62表　甕肩部と口縁部の関連…… 119
第63表　壷の口縁形態…… 120
第64表　甕の口縁形態…… 120
第65表　壷の底部形態…… 121
第66表　甕の底部形態…… 122

図　版　目　次

図版１　調査区全景（北から）、ＳＫ－01遺物出土状況
図版２　ＳＫ－02、ＳＫ－04遺物出土状況東から
図版３　ＳＤ－01遺物出土状況（東から）、落込み状遺構（西から）
図版４　落込み状遺構（南から）、落込み状遺構遺物出土状況
図版５　落込み状遺構遺物出土状況
図版６　ＳＤ－02　検出状況（北から）、土器棺検出状況（南から）
図版７　土器棺出土状況（南から）
図版８　下層確認グリット
図版９　出土遺物（約⅓）
図版10　出土遺物（約⅓）
図版11　出土遺物（約⅓）
図版12　出土遺物（約⅓）
図版13　出土遺物（約⅓）
図版14　出土遺物（約⅓）
図版15　出土遺物（約⅓）
図版16　出土遺物（約⅓）

図版17　出土遺物（約⅓）

図版18　出土遺物（約½）

図版19　出土遺物（約½）

図版20　出土遺物（約½）

図版21　出土遺物（約½）

第１章　調査に至る経緯

亀井遺跡は、八尾市南亀井町を中心に広がる弥生から古墳時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は大和川を本流とする長瀬川、玉串川、平野川をはじめとする数条の中小河川によって形成された沖積平野の南端部に位置しており、（財）大阪文化センターにより実施された近畿自動車道に伴う調査などによりその実態が明らかになりつつある。（文献１～９）

昭和63年10月７日、大昌印刷株式会社代表取締役社長太田昌雄氏により南亀井町１丁目41－１地内において工場建設を予定している旨の届出が八尾市教育委員会文化財室に提出された。当文化財室では申請地が亀井遺跡の中心部付近にあたり、また予定建物の基礎構造が埋蔵文化財を破壊する可能性があると判断し、同年10月20日、遺構及び遺物包含層の有無を確認する為試掘調査を実施した。その結果現地表下約2.5mに弥生時代後期の遺物包含層を認めたため、施行主と再三に渡り基礎構造の変更といった方向で協議を行ったが、建物の構造上不可能という結論に至り、発掘調査の実施を決定しその旨を（財）八尾市文化財調査研究会に指示した。発掘調査は、日程及び人員の都合上、文化財室と調査研究会との合同調査という形で行い、高萩千秋、近江俊秀を担当とし、昭和63年11月７日～24日のべ17日間に渡り実施した。

第２章　亀井遺跡の環境

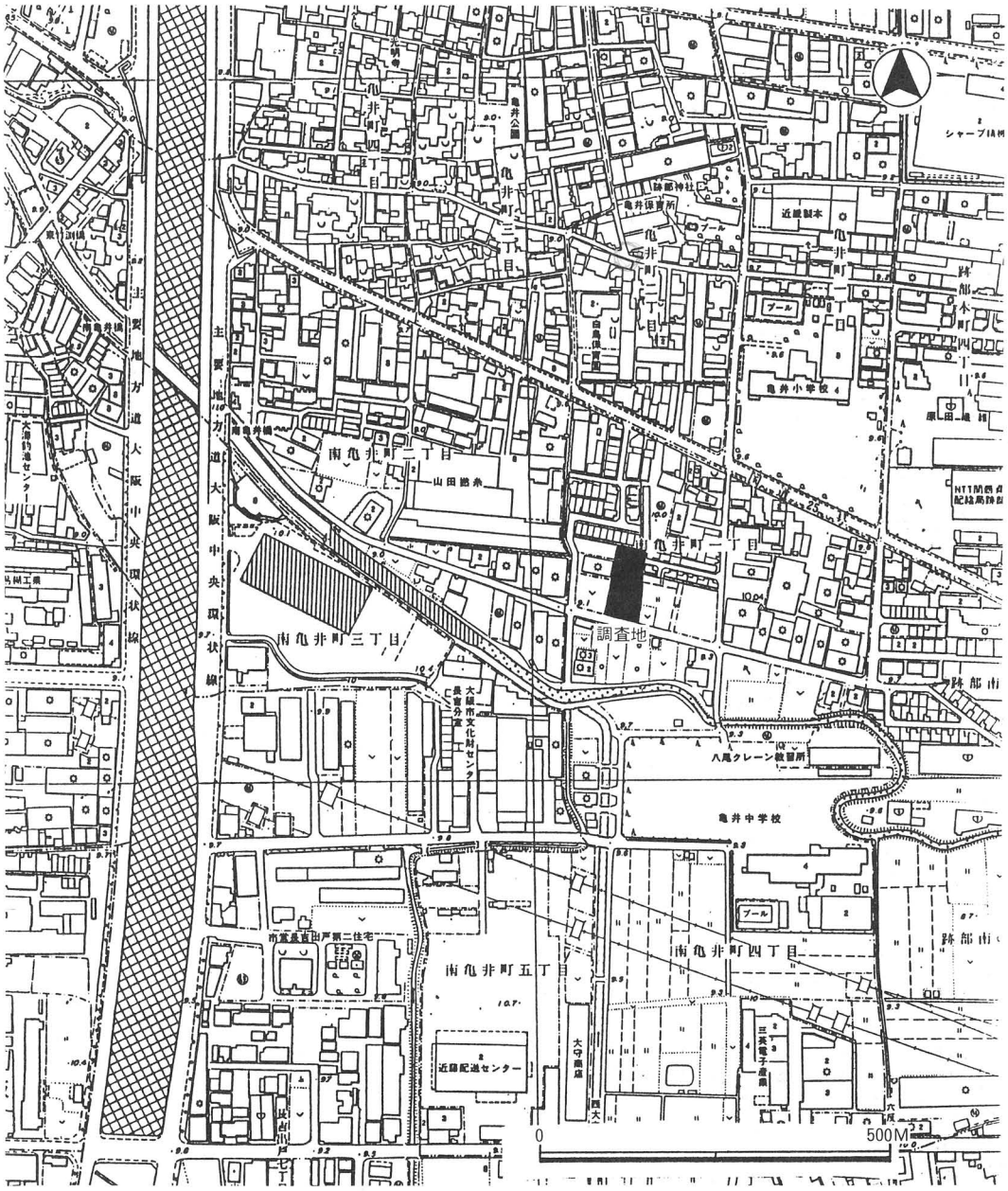
第１節　地理的環境

当遺跡は、東を生駒山地、北を淀川、南を大和川によって形成された河内平野の中央部南縁に立地する沖積低地である。当遺跡周辺は、旧河道である東除川・西除川と大和川のたび重なる堆積作用と海水面の昇降による浸食作用で扇状地性低地と自然堤防が形成されていった。

河内平野に人々が生活を営むようになるのは、海退現象以後の縄文時代晩期～弥生時代前期の頃である。しかし、弥生時代後期には、自然環境が不安定となり、地盤が安定するのは古墳時代初頭の時期になってからのことである。

当遺跡においては、現地表面下３m前後のところで、古墳時代、弥生時代の遺構面が埋積されており、1704年（宝永元年）の大和川付替工事以前から人々が住みつくようになる弥生時代

前期頃までの地盤の不安定性を物語るものである。



第１図　調査地周辺図（１／5000）

第２節　歴史的環境

亀井遺跡周辺には、旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が分布しており、最近の調

査結果から歴史的環境を各時代別にまとめたい。

〔旧石器時代〕

亀井遺跡の南東、羽曳野丘陵上に位置する国分遺跡からは、瀬戸内技法で有名な国分型ナイフ型石器が出土している。河内台地では、長原遺跡、八尾南遺跡、瓜破遺跡からそれぞれナイフ型石器・有舌尖頭器・石核・縦長剥片・横長剥片等の数多くの石器等が出土している。これらの石器群は、この地域の旧石器時代解明の資料となっている。

〔縄文時代〕

縄文時代では、当遺跡東部に恩智遺跡・馬場川遺跡が現われ、縄文時代前期からの遺物が出土している。また羽曳野丘陵縁辺部には、長原・八尾南遺跡があり、長原遺跡では縄文時代晩期の石器製作跡や自然流路が検出されている。八尾南遺跡でも縄文時代後・晩期の自然流路が検出されており、長原遺跡と同じく東除川に関わる遺跡として注目されている。長瀬川流域では、晩期の船橋式土器で有名な船橋遺跡、縄文～弥生時代の人骨が多数出土した国府遺跡がある。また、最近の調査では、当遺跡の北部約5㎞新家・山賀で縄文時代晩期の土器片が出土しており、集落の存在に重要な資料を与えている。

〔弥生時代〕

弥生時代に入って、農耕技術・金属器の導入は低湿地内の集落数を激増させる。瓜生堂・鬼虎川・恩智・山賀の集落はこれを物語る。瓜生堂遺跡からは、銅戈・銅鐸型土製品が出土し、巨摩廃寺遺跡からは、吉備系の土器・方形周溝墓・有鉤銅釧・貨泉・ガラス玉等の遺構・遺物が検出されている。

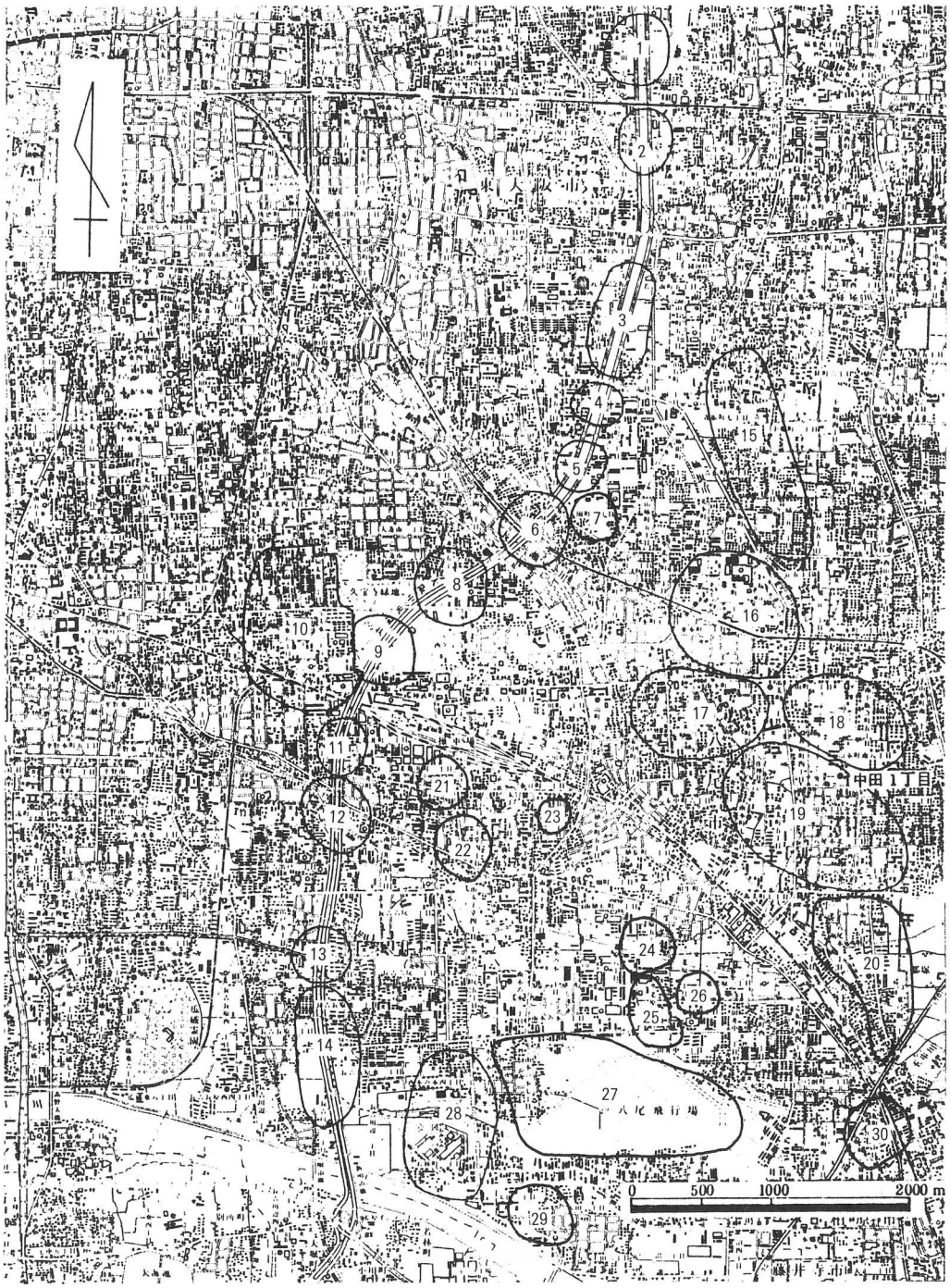
東除川・平野川流域では、長原遺跡・瓜破遺跡があり、長原遺跡では前期末頃の水田址を検出し、瓜破遺跡からは貨泉が出土している。また、上町台地東縁の桑津遺跡、大阪湾に面する遠里小野遺跡の両遺跡からも前器の土器が出土している。

中期に入ると、上記の遺跡も存続し、瓜生堂遺跡では、多数の方形周溝墓、住居跡が検出され、玉串川・長瀬川両河川の間には、小若江遺跡、長瀬川・平野川間には衣摺遺跡が現われる。長瀬・玉串の両河川の分流域では、中田、東弓削、小阪合遺跡が所存し、中期の方形周溝墓群、住居跡を検出している。

後期には、加美遺跡、友井東遺跡などが出現し、中でも特に加美遺跡は、方形周溝墓に副葬されていた破鏡の出土状況から、弥生・古墳両時代の要素をもつ遺跡として高い問題性をもっている。

〔古墳時代〕

古墳時代初頭では、西岩田・上田町・小若江遺跡をはじめとする多くの遺跡から古式土師器が出土している。なかでも瓜破北遺跡から出土した方格規矩鏡、内行花文鏡の鏡片や中田遺跡



1. 西岩田
2. 瓜生堂
3. 山　賀
4. 友井東
5. 美　園
6. 佐　堂
7. 宮　町
8. 九宝寺北
9. 九宝寺
10. 加　美
11. 亀井北
12. 亀　井
13. 城　山
14. 長　原
15. 萱　振
16. 東　郷
17. 成法寺
18. 小阪合
19. 中　田
20. 東弓削
21. 跡　部
22. 太子堂
23. 植　松
24. 老　原
25. 田井中
26. 志　紀
27. 木ノ本
28. 八尾南
29. 太　田
30. 弓　削

第2図　周辺の遺跡（1／50000）

で検出された「しがらみ」は注目されている。

前期古墳は、西ノ山、花岡山、向山の3前方後円墳が所在し、石川に面する玉手山丘陵上に玉手山古墳群が所在する。

中期になると誉田山古墳に代表される巨大古墳と多数の中小古墳から構成される古市古墳群がある。長原遺跡では塚の本古墳をはじめ5～6世紀の古墳が検出され、最近の調査で6世紀初頭頃の前方後円墳が発見されている。他に巨摩廃寺・美園遺跡からは円筒埴輪や形象埴輪が久宝寺遺跡からは、初期須恵器とともに韓式土器が出土している。生駒山西麓では、前方後円墳の心合寺山古墳、郡川西塚、東塚が所在している。

後期には、生駒山地西麓部に群集墳が出現する。亀井遺跡東部西麓域には山畑・高安古墳群が、山地南端山麓には、平野、太平寺、安堂、横尾、線刻面で有名な高井田横穴群がある。

古墳以外では、八尾南遺跡・木の本遺跡の掘立柱建物で構成される集落址、長原遺跡の後期水田跡、樋野ケ池の須恵器の窯跡がそれぞれ検出されている。

〔歴史時代〕

7世紀以降、この地域では大規模な耕地開発が行われる。亀井遺跡の南東、奈良県との県境に位置する高安山に、天智天皇6年（667）に高安城が築かれた。また、西側の上町台地上には大化元年（645）孝徳天皇の難波長柄豊崎宮、そして天平16年（774）聖武天皇の難波宮が築かれる。

亀井遺跡周辺では、巨摩廃寺（平安～室町）・若江寺址（飛鳥～鎌倉）・鞍作廃寺（奈良～平安）・瓜破廃寺（奈良）の多くの寺院が存在する。また、東の生駒山地南端の西麓には、北から教興寺、大県、太平寺、安堂、高井田の各寺院が所在し、いずれも奈良時代の創建である。

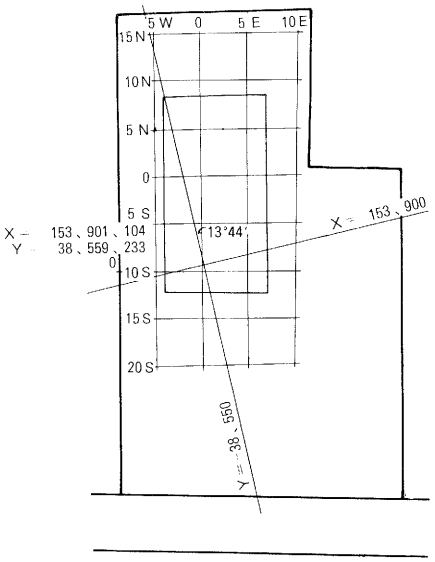
また、長原遺跡、八尾南遺跡では条理に規制された大溝を伴った平安～鎌倉にかけての集落跡が検出されている。

中世から近世初頭にかけて、当遺跡の北、久宝寺は一向宗西証寺を中心とした寺内町として発展し、また、現在八尾南遺跡の北西には式内社の志紀長吉神社、北東には式内社の楠本神社が所在している。

以上亀井遺跡の歴史的環境を概観してきたわけであるが、河内平野においては当遺跡は、瓜生堂遺跡・山賀遺跡などと共に弥生時代の大集落であり、数次にわたる調査で検出された膨大な遺構・遺物によって河内平野の中心的集落であることが明らかにされている。

第３章　調査の方法とその経過

第１節　調査方法



第３図　調査区設定図

調査地周辺は住宅が密集しており予定建物部分全てを調査するのは非常に困難であったため安全面を考慮して申請地中央の10×22mのトレンチ調査のみに留まらざるを得なかった。また調査期間が極めて短く、かつ多量の遺物の出土が予想されたために対象を弥生時代のみに限定し、機械掘削も包含層直上の地表下2.5mまで行い、その後人力にて遺構検出を行った。その結果、弥生後期の溝、土壙、落込み状遺構等を検出するとともに、多量の遺物の出土をみた。さらに、調査区内の側溝掘削の際に弥生中期の包含層の存在を確認したため、第１面の調査終了後、調査区内に２×３m前後のグリットを６ケ所設定し調査を行ったところ、弥生中期の溝一条を検出したため、調査対象面積を拡張し、さらに土器棺一基を検出した。以後、調査区中央に２×２mのグリットを設定し現地表下約６mまでの土層の堆積状況を確認した。

第２節　調査日誌抄

11月７日（月）

調査区全体を、試掘結果資料と土層の堆積確認を行いながら、表土下約2.5mの弥生時代後期包含層上面迄を機械により排除。壁面の崩壊を防ぐ為、表土下１mのところで幅約50cmの段を調査区の内側周囲につける。

11月８日（火）

調査区地区割後、包含層を人力掘削し、地区ごとに遺物を取り上げる。調査区南部壁付近で完形の広口壺出土。

11月９日（水）

昨日に引き続き、包含層を人力掘削。調査区西部で弥生後期土器を多量に包含する落込みを

確認する。

11月10日（木）

平面調査開始。調査区西側で、北から南に拡がる落込みを検出。南部壁面付近で、東西に伸びる溝を検出。人員を、落込みと溝の遺構掘りに投入。

11月11日（金）

引き続き遺構掘削。土壙を4基検出。

11月12日（土）

各遺構にセクションベルトを残し、土層の写真撮影及び土層図を作成。

11月14日（月）

調査区土層断面の分層作業。八尾市教育委員会文化財室――森田室長、米田主査視察。

11月15日（火）

調査区土層断面図作成。落ち込み状遺構の調査継続。予想をはるかに上回る多量の土器を検出した。大阪府教育委員会文化財保護課――福田技師来跡。

11月16日（水）

引き続き清掃作業。夕刻、調査区全景写真撮影。㈶八尾市文化財調査研究会調査員――原田、成海両技師来跡。

11月17日（木）

遺構の部分写真撮影。午後から実測作業。昼休みに、大阪府教育委員会文化財保護課の平野川改修に伴う発掘調査現場を見学。

11月18日（金）

昨日に引き続き実測作業。午後から遺物の取り上げ。遺物取り上げ後の遺構写真撮影。側溝掘り下げの際、弥生時代後期の遺構面より20cm～30cmのところで弥生中期の包含層を確認する。

11月19日（土）

調査区南北に幅50cm位の確認トレンチを掘り、弥生時代中期の遺構及び遺物を調査する。大阪府教育委員会文化財保護課――森井技師来跡。

11月20日（日）

当初の調査目的は、弥生時代後期の遺跡調査を行うことにあったが、その下層に弥生時代中期の包含層を確認した為、調査期間等の検討を行った結果、調査区に6ケ所のグリット（3m×3m）を設け、遺構の拡がりを調査することに決定し、掘削を行ったところ調査区北部に南西から北東に伸びる幅4mの溝を検出。

11月21日（月）

溝の掘削。出土遺物はなく、埋土は微砂で溝底全体に薄く植物遺体が堆積する。

11月22日（火）

溝の全体を把握する為、調査対象面積で拡張し掘削する。夕方写真撮影。

11月23日（水）

弥生中期遺構面の1/50の平面図及び調査地の土層断面図の作成。実測終了後、調査区北端で弥生中期の土器棺を検出。写真撮影、実測を行う。

11月24日（木）

昨日にひきつづき土器棺の写真撮影及び実測。土器棺取り上げ終了後、調査区中央にグリット（２ｍ×２ｍ）を設置し、下層確認を行う。本日をもって発掘調査を終了する。

第４章　調査の成果

第２節　調査地の基本層序

◦第１層

近年までの床土に相当する。層厚約20m。現地表面は、平坦でT.P.＋8.9m。

◦第２層

本層上位は黄茶褐色粘質土で、中世～近世の摩滅した遺物細片を少量含んでいる。下位は灰褐色粘質土で、部分的に酸化鉄を含む。層厚約1.0m。

◦第３層

自然河川の氾濫土層と思われる。部分的な堆積及び浸食作用で、地層の連続性は悪く、微砂・細砂・粗砂の複雑な互層である。上位は青灰色粘質微砂、中位は明灰色粘砂及び青灰色粘質微砂が主体となり、下位は暗灰色粘質微砂が堆積する。最大層厚は約1.0m。

◦第４層（弥生時代後期遺物包含層）

暗灰色粘土層と黒灰色粘土層で形成される。上面は、ほぼ水平でT.P.＋6.8m～6.5m、層厚0.5m～0.8mである。

◦第５層（淡緑灰色シルト層）

弥生時代後期遺構面のベースとなる層である。調査区全域にほぼ水平に堆積する。上面はT.P.＋6.1m～6.3m、層厚0.3m～0.5m。

◦第６層（弥生時代中期遺物包含層）

緑灰色粘土層と暗緑灰色粘土層で形成される。上面はほぼ水平でT.P.＋5.9m、層厚0.2m～0.6m。

◦第７層（緑灰色微砂層）

弥生時代中期の溝（ＳＤ－02）に堆積する砂層で、下部全体に薄く植物遺体が堆積する。上面はT.P.＋5.5m、最大層厚0.4m。

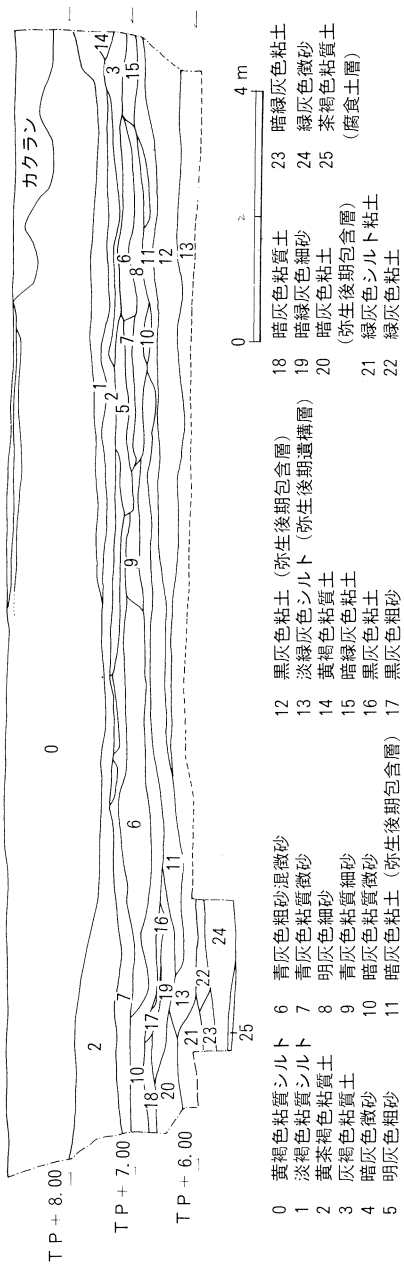
◦第８層（暗灰色礫混粘質土）

弥生時代中期遺構面のベースとなる層である。上面はT.P.＋5.1m～4.95m。

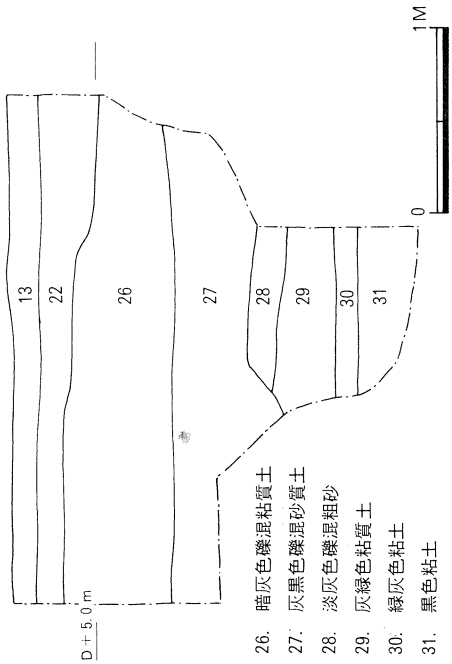
第８層以下の層序については、調査地中央に１ｍ×１ｍのグリットを設置して層位確認を行った。

◦第９層（灰黒色礫混砂質土）

比較的安定した土層で、わずかに酸化鉄を含む。層厚0.6m～0.7m。



第4図　土層断面図（1／180）



第5図　下層確認グリット断面図（1／40）

◦第10層（淡灰色礫混粗砂）

粒子の大きい粗砂で構成される堆積層である。層厚約20㎝。

◦第11層（灰緑色粘質土）

粘土及びシルト互層が確認された。層厚約40㎝。

◦第12層（緑灰色粘土）

わずかに有機物を含む。層厚約20㎝。

◦第13層（暗灰色粘土）

上位は安定した様相を呈するが、下位は多量の植物遺体が混在しており、しまりが悪い。なお最終土層底面は、T.P.＋4.2mである。

第２節　検出遺構

１．弥生時代後期の遺構

（１）　ＳＫ－01

位置と形状

調査区北側で検出した土壙で、ＳＸ－01と接しているが両者の切り合いは不明瞭である。平面の形状はほぼ円形を呈し、東西約2.3m、南北2.2m、深さ0.4～0.5mである。

層位と遺物出土状況

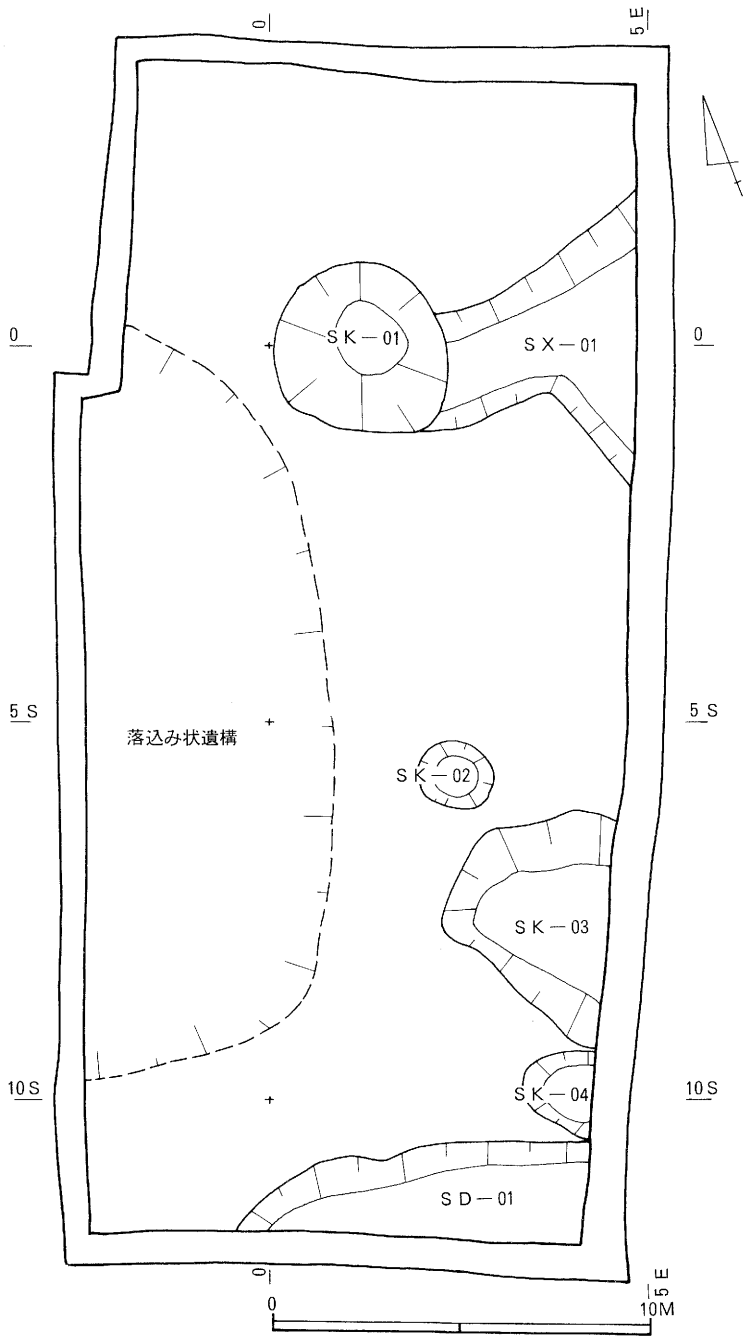
土壙内の堆積状況は、緑灰色シルトと炭化物を多量に含む灰黒色粘質土が交互に堆積しており、土壙壁面には部分的に厚さ５㎜程度の焼土が見られる。遺物は多量であり、また層位を越えて接合関係にある。

小結

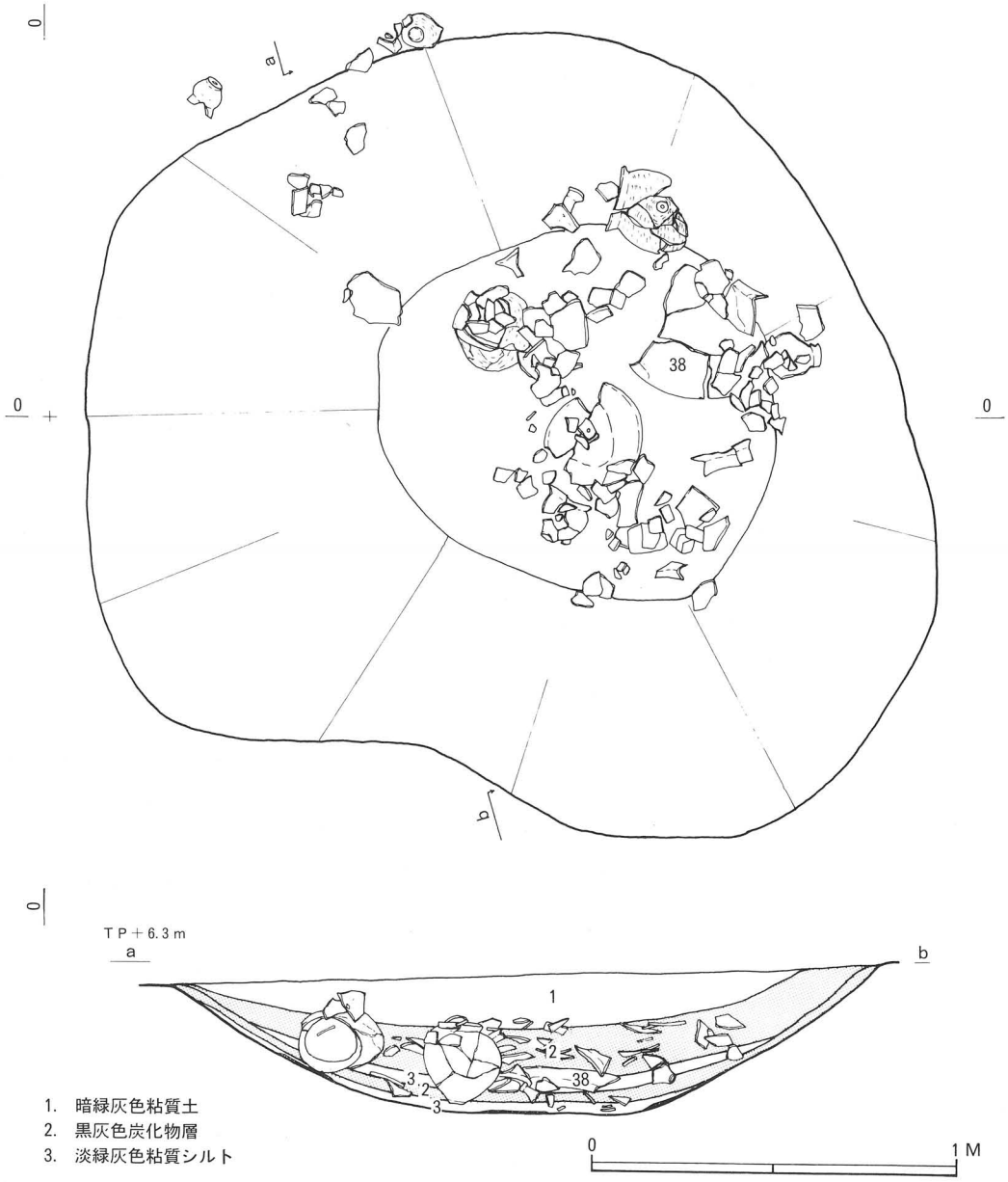
ＳＫ－01の性格、機能については遺物の出土状況、土層の堆積状況から見ても特異なものであるが、接合資料の少ない事や、焼土層が薄く部分的なものである事、さらに土器焼成土壙にみられる焼成不良の土器が見られない事などから土器焼成土壙とは考え難い。土層の堆積状況から考えると、この土壙は一度に埋められたものであり、遺物もその密度の濃さから灰黒色粘質土に伴っていたものと考えられ、焼土の存在も考慮にいれると、他の場所で焼いた有機物の中に破損した土器を入れ、この土壙内に投棄したものと思われ、その際、炎がくすぶっていたために、シルトで覆いさらに炭化物を入れたものと考えられる。また、その際、火を焼した場所は土壙周辺に焼土が見られなかった事から、やや離れた場所であったと考えられる事から、この土壙の性格をただ単にゴミ捨て場所的なものと考えるよりむしろ何らかの祭祀に伴うものと考えたい。

（２）　ＳＫ－02

調査区の中央やや東寄りにおいて検出した平面形は、南北1.0m、東西0.95m程の円形を呈し、深さ0.3mを測る。断面形態はなだらかな皿状を呈し、埋土は暗灰色微砂混シルトの単一



第6図　弥生後期平面図（1／100）



第７図　ＳＫ－01遺物出土状況図（１／20）

層で、土層の堆積状況からして、土壙の機能消失後に短日にして埋められたものではないかと思われる。出土遺物は体部下半を欠く甕が１個体のみ出土した。

（3）　ＳＫ－03

調査区の東端、ＳＫ－04の北側で検出した形状は東側が調査区外に及ぶため不明であるが、検出部で南北3.0m、深さ0.4mの断面形態は逆台形を呈する。土層の堆積は上層に灰黒色粘質土、下層に淡灰色シルトの２層に分層できる。出土遺物は壙底よりやや浮いた状態で、ごく少量の土器片が出土している。

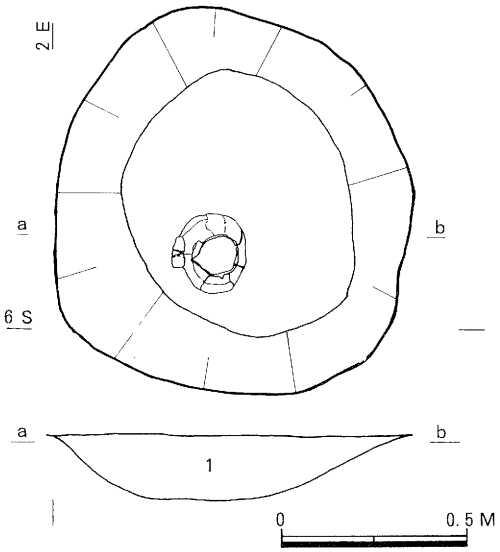
（4）　ＳＫ－04

位置と形状

ＳＫ－03とＳＤ－01にはさまれた状態で検出した。東側は調査区外に及ぶ為、全体は不明である。検出長、0.45m、深さ0.3mを測る。

層位と遺物出土状況

埋土は灰黒色粘質土で、遺物はほぼ完形の甕をはじめ壺、高坏などが出土した。それらの土器は遺物整理の段階でＳＫ－01出土の遺物との接合関係が認められ、その事から調査では確認できなかったが、ＳＫ－04とＳＤ－01が本来は同一の遺構であったか、もしくは意図的にＳＤ－01とＳＫ－04に同一の遺物を埋納、遺棄したものと思われる。



第８図　ＳＫ－02遺物出土状況図（１／20）

（5）　ＳＤ－01

位置と形状

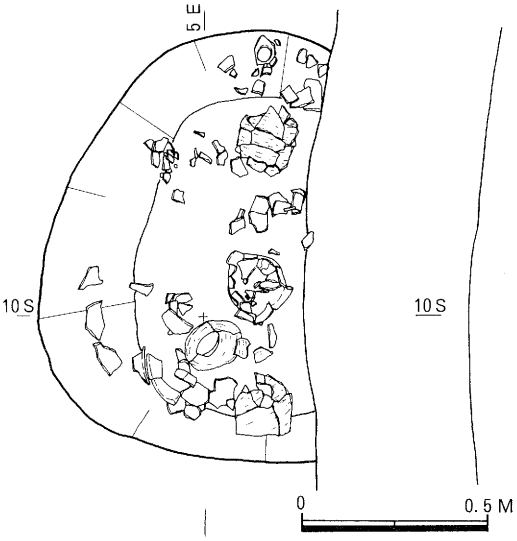
調査区南端で検出した北東から南東に伸びる溝と思われる。検出長4.5m、深さ0.2～0.3mを測る。

層位と遺物出土状況

埋土は２層に分層され、上層には灰黒色粘質土、下層には暗緑灰色砂混シルトが堆積する。下層よりほぼ完形の壺、甕、高坏などが多量に出土し、その出土状況は１ケ所に集中する傾向を示す。

小結

調査上の不備によりＳＤ－01とＳＤ－04との関係を明確にする事ができなかったが、ＳＤ－01の



第９図　ＳＫ－04遺物出土状況図（１／20）

第10図　ＳＤ－01遺物出土状況図

遺物出土状況が、方形周溝墓の周溝内供献土器の出土状況と類似しており、遺物にも二重口縁壺や装飾性の極めて強い壺などが出土している事から、この溝が調査区南側に広がる周溝墓である可能性も考えられ、ＳＫ－04もそれに伴う土壙であった可能性も考えられる。

（６）　落込み状遺構

位置と形状

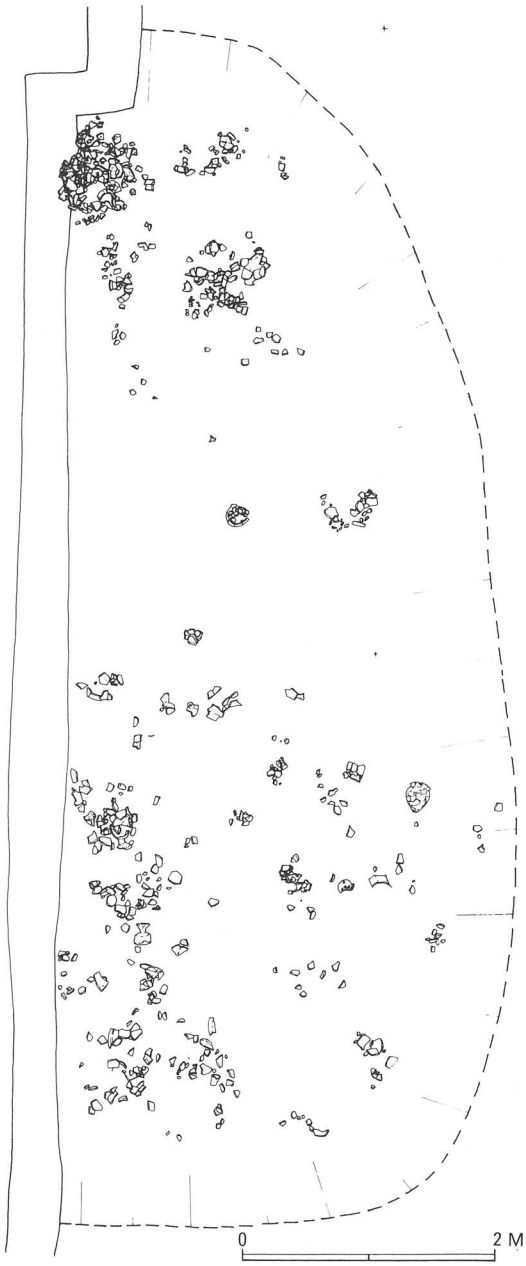
調査区西側で検出した検出南北径 9.5～10mで、調査区中央から西へ向けてゆるやかに落込み深さは0.2～0.3mを測る。明確な掘形を持たず自然地形であるとも考えられる。

層位と遺物出土状況

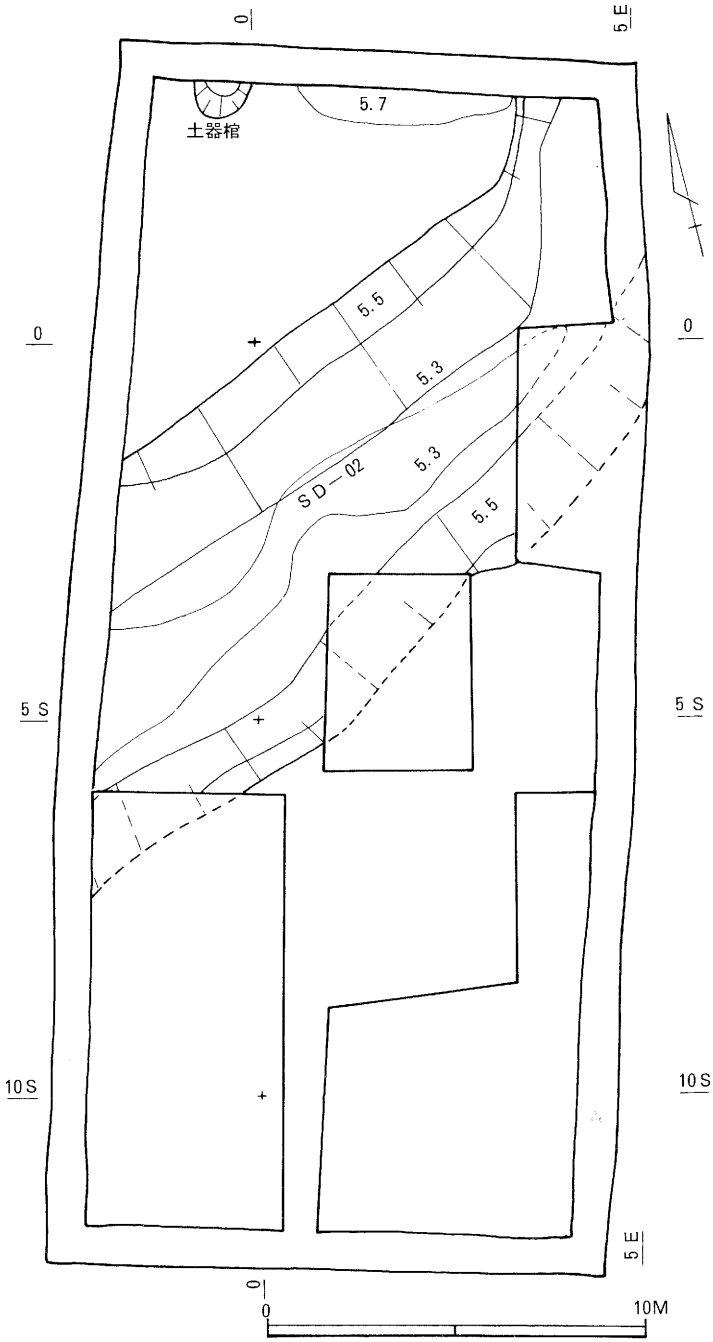
埋土は暗灰色粘質土である。遺物は多量でありその出土状況はいくつかの土器集積群として把える事ができ、意図的に投棄されたものと思われる。完形品はさほど多くはないが、各土器集積群を越えて接合関係があり、一度にまとめて投棄されたものと思われる。

（７）　ＳＸ－01

調査区北東部で検出した不定形の遺構である。検出南北径1.5～3.5m、深さ0.4mを計る。断面は逆台形を呈し埋土は２層に分層され、上層暗灰色粘質土、下層灰緑色シルトであり、遺物は下層より若干出土したのみである。



第11図　落込み状遺構遺物出土状況図（１／120）

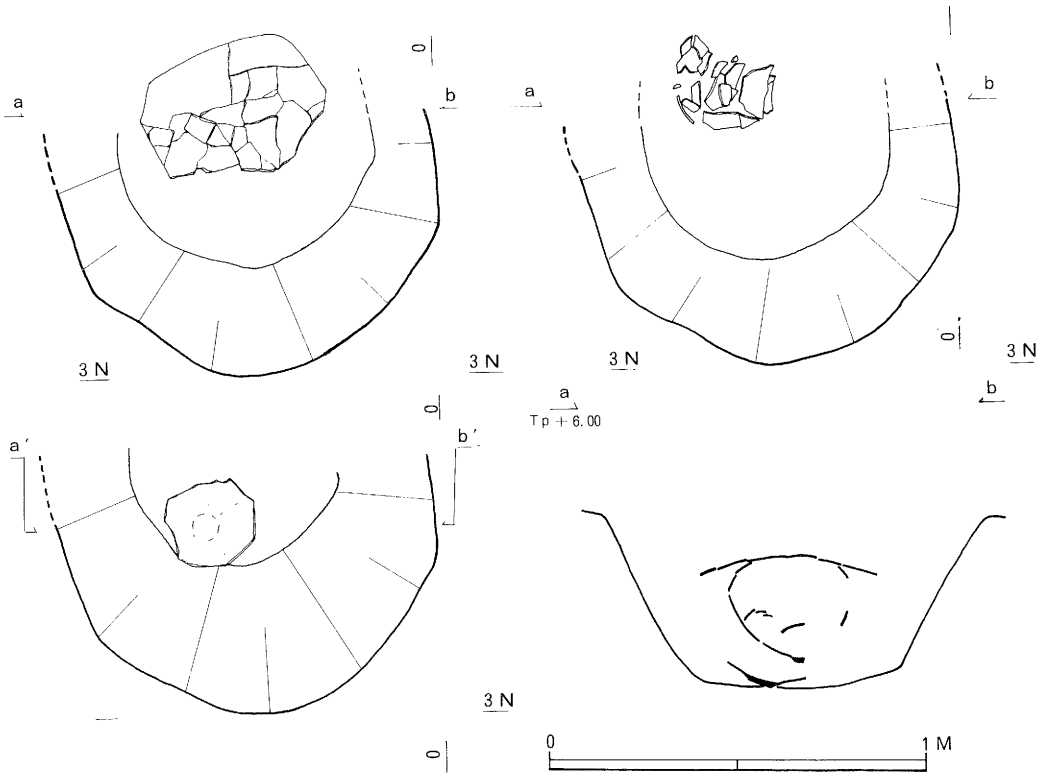


第12図　弥生中期平面図（1／200）

2．弥生中期の遺構

（1）　土器棺

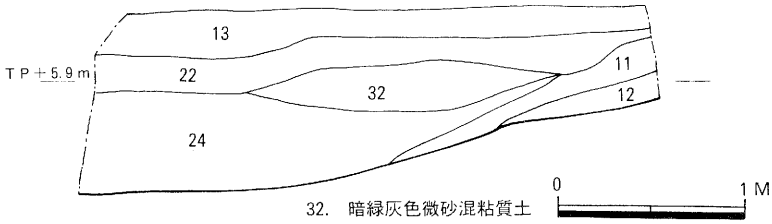
調査区北端で検出した中期中葉の土器棺である。北側は調査区外に及ぶ為全体の形状は不明である。検出径0.8m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒灰色粘質土である。土器棺の形状は極めて特異なものであり、大型の壺体部を蓋とし、その下に口縁部を破壊した広口壺を置き、さらに５～10cmの土層を挟んで甕の底部を平面上やや軸をずらして置いている。



第13図　土器棺出土状況（１／20）

（2）　ＳＤ－02

調査区北側で検出した南西から北東に伸びる溝で、調査区南側でほぼ直角に曲がる。検出長16m、幅４m、深さ0.6mを測る。埋土は淡灰色微砂で溝底全体に薄く植物遺体が堆積する。遺物は中期の甕片１点を出土したのみである。また、この溝はその形状と土器棺との位置関係から周溝墓であった可能性が強い。



第14図　ＳＤ－02土層断面図（１／20）

第５章　出土土器の型式分類

亀井遺跡より出土した土器は小面積にもかかわらず多量にして平箱で30箱ちかくに及んでいる。時期は弥生中期から後期後半から庄内への過渡期に相当し、なかでも第１面より出土した遺物は、弥生時代後期後半（いわゆる上六万寺式）に相当し、良好な一括資料であり河内地方における弥生後期後半の土器の様相を把える上でも貴重な資料であるといえよう。ここでは、それらの土器を資料化する為の型式分類について触れてみたい。

土器の持つ属性は、かつて寺沢薫氏がその報告書（文献10、11）で述べた様に、機能素（factemes）と、形態素（formemes）の２概念によって分解しうるものであり、一般には前者を形式（form）、後者を型式（tipe）としてそれぞれ次元の異なる概念として把握している。即ち、形式とは時間及び空間により限定されるものではなく、その土器がどの様な機能を有するか、または、製作の時点で「どの様な用途を目的として作られたか」を示すものである。これに対し型式とは、機能よりむしろ流行（時間）、規制（集団、空間）により限定されるもので、機能差、製作者個人のクセなどを除いた土器の形態的属性である。寺沢氏はこれらの概念に基づき（ただし氏は形態素を形式として示している）大和の弥生後期後半から古墳時代前期の土器を詳細に分析し編年研究を行っている。筆者も氏の方法は編年研究のみならず地域差を考える上でも極めて有効な手段として考え、以下に述べる分類方法も氏の方法論によるところが大きいが、河内地方の土器を考える上では若干補わねばならない点があった。その点については以下の各節で述べてゆくこととする。

第１節　分類上の基本理念

分類の方法は先にも述べた通り寺沢氏の方法を踏襲するが、氏の理念と私見との間に若干の相違がある為ここではそれについて述べてゆくこととする。

〔要素１＝機能素１〕　従来の器種分類に相当する。

〔要素２＝機能素２〕　従来の器種細分に相当する。

寺沢氏は、これらをそれぞれ１次的形式、２次的形式と呼称しているが、器種の分化の過程が必ずしも明らかにされていない現在においては、両者をまとめて形式といった概念で把握した方が無難である様に思える。以下、本文中に寺沢氏が１次的形式とした壺、甕などの言葉を用いてゆくが、これらは土器の呼称であって必ずしも、土器形式の分化、細分等を表すもので

はない事をことわっておく。

〔要素３＝形態素１〕　先に述べた型式に相当するものであり、２つ以上の部位、例えば口縁部と体部、高坏の坏部と脚部など土器の全体のプロポーションを把握できるものの分類にのみ用いる事とし、底部や脚部など土器の一部分の形態を示すのにはこの概念は用いない事とする。

〔要素４＝形態素２〕　寺沢氏は口縁部の造形をこれにあてているが、ここでは口縁部、底部、高坏坏部、脚部、または土器の成形技法、調整など１つの土器を構成する一部分、特に土器の時間性、空間性を表すであろう部分の型式として把え、主に細分の形態上、技法上の特徴を示す時に用いる。従って、これらは要素３と基本的には同じ概念ではあるが、分類の次元がさらに細かい事からあらたに「類」という概念でこの要素を把握する事とする。

以下、各器種毎にその概説を行う。

第２節　壺の分類

壺には、広口壺、長頸壺、広口長頸壺、二重口縁壺、細頸壺、短頸壺、短頸直口壺、無頸壺、台付壺、ミニチュア壺の10種類がある。ここでは主に出土した広口壺についてのみその分類基準について述べ、それ以外のものについては後章の統計処理の項で説明を行うこととする。

広口壺

球形、無花果形、扁球形などの体部に一定の口縁部を具備する土器である。器高25～30㎝のものが多く口縁部高は器高の¼よりはるかに小さいものを一般とする。分類方法は寺沢氏のものをそのまま用いることとする。

〔A〕口頸部が直線的に外傾するもので肩部と頸部には明瞭なくびれを持つ。調整は丁寧なものが多く広口壺の中では器高20㎝ほどの小形のものが多い。

〔B〕口頸部が強く外反するもので肩部と頸部には明瞭なくびれを持つ。調整のゆきとどいたものが多く、全面を丁寧なヘラミガキによって仕上げる。口唇部に刻目を施したり、くびれ部に凸帯を持つなど装飾に富んだ壺も見られる。

〔C〕やや外傾気味に直立する頸部に心もち外反する口縁部を持つが、頸部から口縁部への移行はスムースである。広口壺では極めて一般的な型式である。ｃ型式には口縁をｅ手法やｆ手法をとるものがまま見られ、これらの口縁は極めて装飾に富んでいる。

〔D〕体部上半から全体に緩やかなカーブをもって外傾する口頸部をもつ。従って口縁部と肩部とのくびれは不明瞭である。

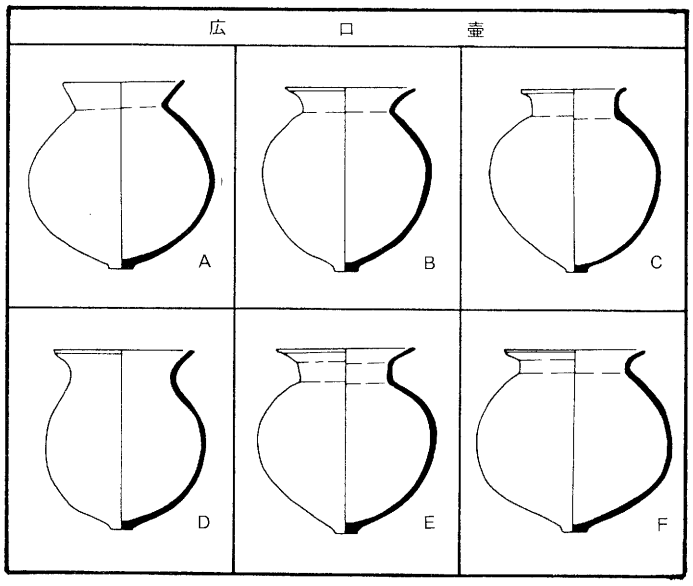
〔E〕短く直立する頸部に直線的に大きく外傾する口縁を具備する。それぞれ分割して成形

するためにくびれは明瞭である。口唇部に刻目をもつものや、口縁部e手法のものがままみられ、これらは装飾性に富んだものである。

〔F〕球形ないし無花果形の体部に外反ないし巻き込むように外反する極めて短い口頸部を持つものである。

第3節　高坏

高坏は完形品が少なく、形態が把握できるものはごくわずかであった。その為、ここでは考えうる全ての形態を表現する為に、まず大まかに口径と器高が判明する分についてはその比により分類し、さらに坏部と脚部をそれぞれ分けて分類を行った後に両者の組み合わせにより型式を表現する事とする。その為、型式の乱立をまねく結果となったが、今後より多くの土器に検討を加える事により整理してゆきたいと思う。



第15図　広口壺の分類（矢部遺跡より引用）

◦口縁部高、体部高による分類

〔Ⅰ〕口縁部高が体部高を凌駕するもの

〔Ⅱ〕口縁部高と体部高がほぼ等しいもの

〔Ⅲ〕口縁部高が体部高より小さいもの

◦坏部による分類

〔A〕斜上方にほぼまっすぐ伸びる体部と屈曲し直立、もしくは外傾する口縁部を有するもの

〔B〕斜上方にほぼまっすぐ伸びる体部と屈曲し外反する口縁部を有するもの

〔C〕やや丸みを帯びた体部に屈曲し直立、もしくは外傾する口縁部を有するもの

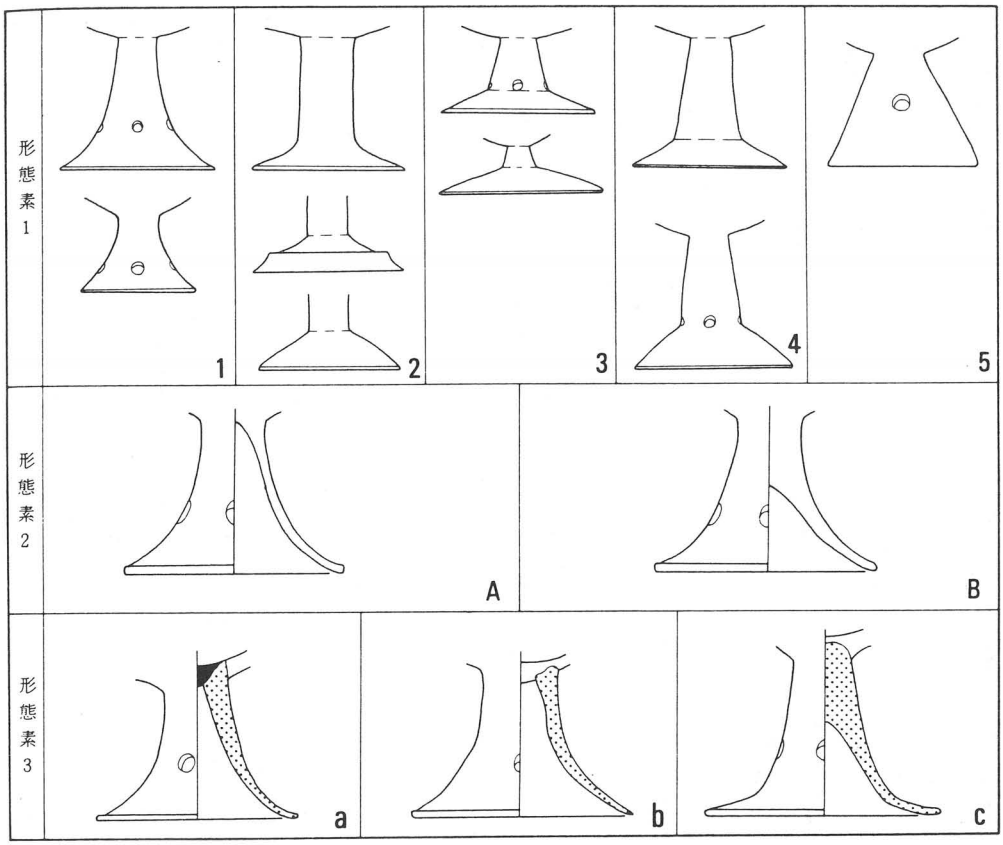
〔D〕やや丸みを帯びた体部に屈曲し外反する口縁部を有するもので、体部と口縁部の稜が明瞭なものD_1とそうでないものD_2とがある。

〔E〕半球形状のもの

〔F〕浅い盤状のもの

〔G〕ほぼ真横に広がる体部と直立する口縁部を有するもの

〔H〕ほぼ真横に広がる体部と直立し外反する口縁部を有するもの



第16図　高坏脚部の分類（矢部遺跡より引用）

◦脚部による分類

脚部の分類については寺沢氏の方法を踏襲する。

全体的な形状から５類を抽出する。

〔１〕スムースに広がる円錐状の脚部を持つもの

〔２〕円筒状の長い脚部を持つもの

〔３〕ごく短い脚部に大きく開いた裾部を具備したもの

〔４〕直線的に広がりながら移行する脚部に屈曲して開いた裾部を有するもの

〔５〕円錐状の脚台部全搬を総括する

脚部の造作によって２分類する。

＜A＞　中空のもの

＜B＞　中実のもの

脚部と脚台部の接合手法によって３分類する。

＜a＞　時間的なプレスは当然考慮するとしても、脚部から坏部にかけては継続的に成形を行い、粘土を埋めこむことによって坏底を形成していくもの（充填法）

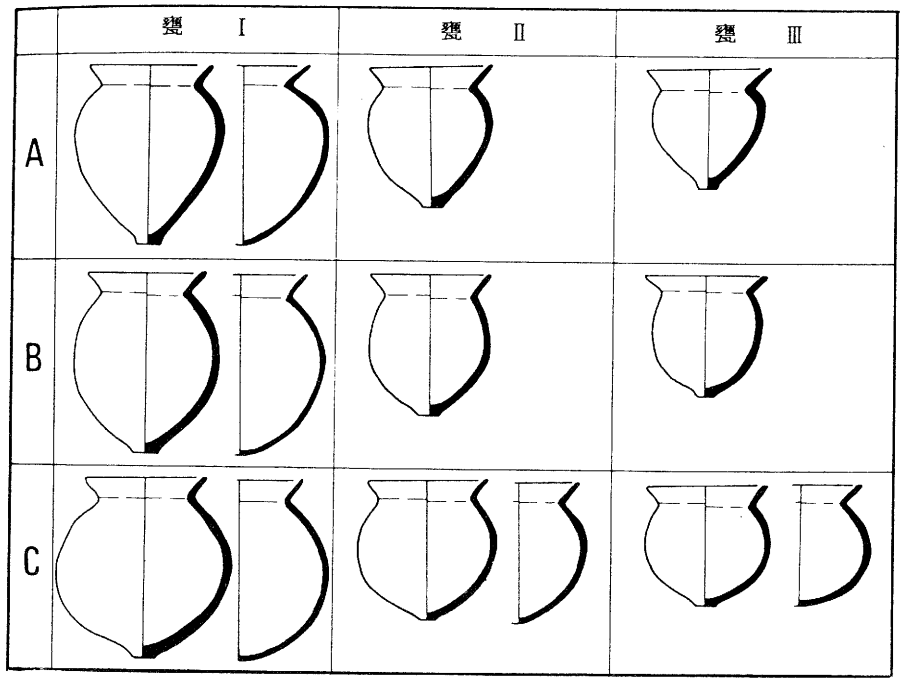
＜b＞　完成した坏部をすでに一定時間をへた完成脚台上に載せるように接合したもの（接合法）

＜c＞　完成され、一定時間をへた脚台部に坏部を付加する形で成形したもので、脚頂が坏部底に接近したもの（挿入付加法）

高坏の型式の表現は１D_1－１Abのように、口縁部高、体部高―坏部―脚部形態素の順で表現する。

第４節　甕

甕は、寺沢氏の分類基準に基づいて行うが、肩部から口縁部の移行が氏の分類基準では表現しきれなかった為、新たにそれをつけ加える事とする。



第17図　甕の分類（矢部遺跡より引用）

◦口径：胴部最大径による分類（C：W）

〔Ⅰ〕体部径が口縁部径を凌駕するもの

〔Ⅱ〕体部径と口縁部径がほぼ等しいもの

〔Ⅲ〕体部径が口縁部径より小さいもの

◦器高と最大径による分類

〔A〕最大径が体部上半にあり、肩のはった長胴形のもので、口縁部高は低く、シャープで強い外傾をしめすもの

〔B〕最大径を体部中位にもつ長胴形のもの

〔C〕最大形は体部中位か下半にある。体部は球形呈するもの

◦肩部から口縁部の移行による分類

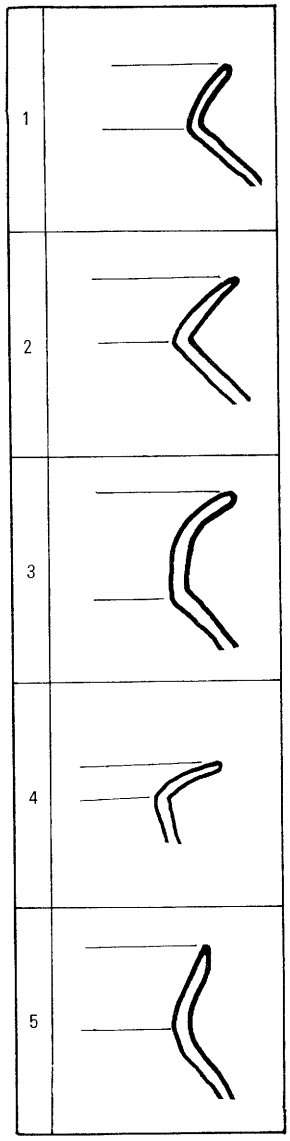
〔1〕肩部から口縁部にかけてややシャープに移行するもの

〔2〕「く」の字に外折する短い口縁部を有するもの

〔3〕直立し外反する口縁部を有するもので肩部と口縁部の境は明瞭で、広口壷Cを祠形とすると考えられる。

〔4〕肩部からほぼ直角に口縁部が屈曲するもの

〔5〕肩部から口縁部にかけての明瞭な接線を持たないもの



第18図　甕肩部の分類

第5節　口縁形態

寺沢氏の分類法を用いる。

a手法　口縁部を尖らせるか丸くまとめるもので、断面形か尖頭、円頭状を呈するもの

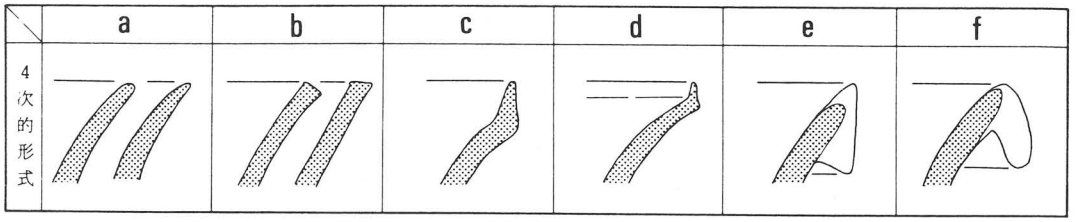
b手法　いわゆる口縁部の面取りを行っているもので、断面は角頭を呈する

c手法　口縁部の多くはa手法をとるか、口縁部全体を内彎させ受部を形成するもので、いわゆる受口状口縁と呼称されるもの

d手法　いわゆる「はねあげ口縁」と呼称されるもので、指頭によるつまみあげのヨコナデを行っているものである

e手法　付加状口縁（addiang rim）。a手法の擬口縁上に粘土紐をはりつけて口縁端部を広くもたせたもの

f手法　a手法ないし、b手法の擬口縁下に粘土帯をはりつけた垂下口縁をしめすもの



第19図　口縁部による分類（矢部遺跡より引用）

第６節　底部の分類

これも寺沢氏の分類を用いる。

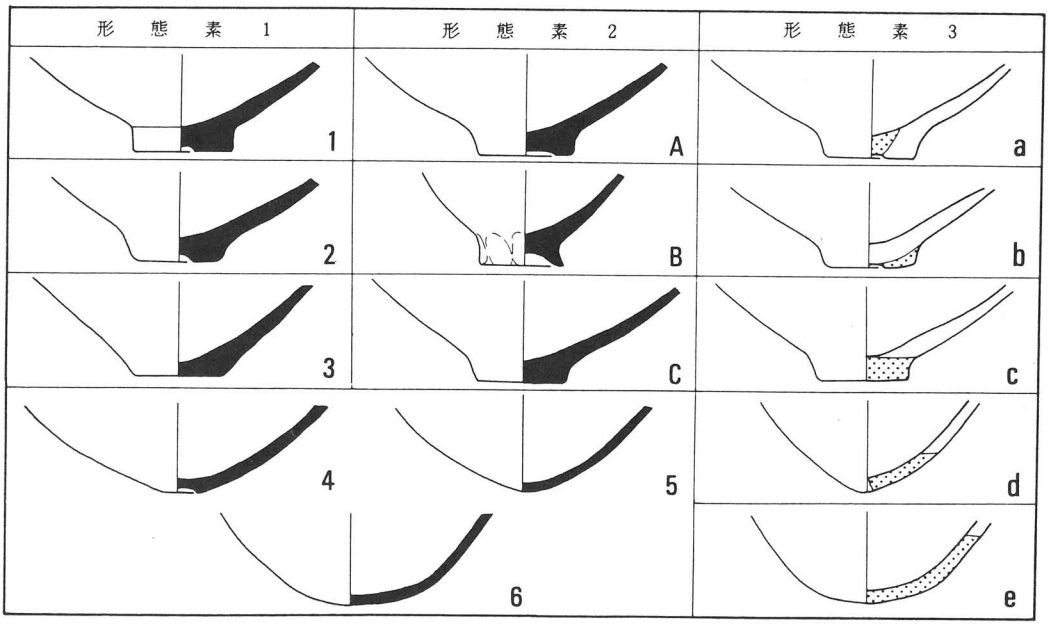
◦底部の突出具合によって、３類に分類する。

＜１＞　突出した底部で、高さ、周囲への膨張がめだつもの

＜２＞　やや突出した底部で、高さはもつが、周囲の膨張がきわだっていないもの

＜３＞　突出しない底部

◦底部の形状によって、A、ドーナツ底、B、あげ底、C、平底の３類に分類する。



第20図　底部形態（矢部遺跡より引用）

◦底部の成形技法によって次の３つに分類する。

（a）底部に穴を残したままの巻き上げ法によって成形した後に、粘土で穴を埋め込んだものであるが、再度裏面より調整を施す場合がほとんどである（円板充填法）。

（b）粘土紐を輪状にして裾え、これをベースとして上部の成形を行ったもの（底部輪台法）。

（c）粘土円板を作成しこれを底として器壁を巻きあげ成形したもので、裏面は平底に限られる（円板すえおき法）。

第７節　調整による分類

１．ナデ

◦器面調整の為に用いられたもので、条痕等を残さないものと呼称する。

ナデⅠ　板状の工具によるナデで、条痕を残さないものを呼称する。

ナデⅡ　指、布など原体の幅等が規定されないものを呼称する。

２．ハケ

◦先にあげたナデⅠのなかで条痕を有するものを呼称する。

３．ケズリ

◦粘土をかきとる行為を総称し、体部内外面に施される一般にケズリと呼ばれるものをケズリＡとし、従来、簾状ハケ、クモの巣状ハケと呼ばれ、底部付近の粘土をかき取ったものをケズリＢと呼称する。

観察表表現例

Ｃ：口径　　（Ｆ）：推定径

Ｈ：器高

Ｂ：底径

Ｗ：体部最大径

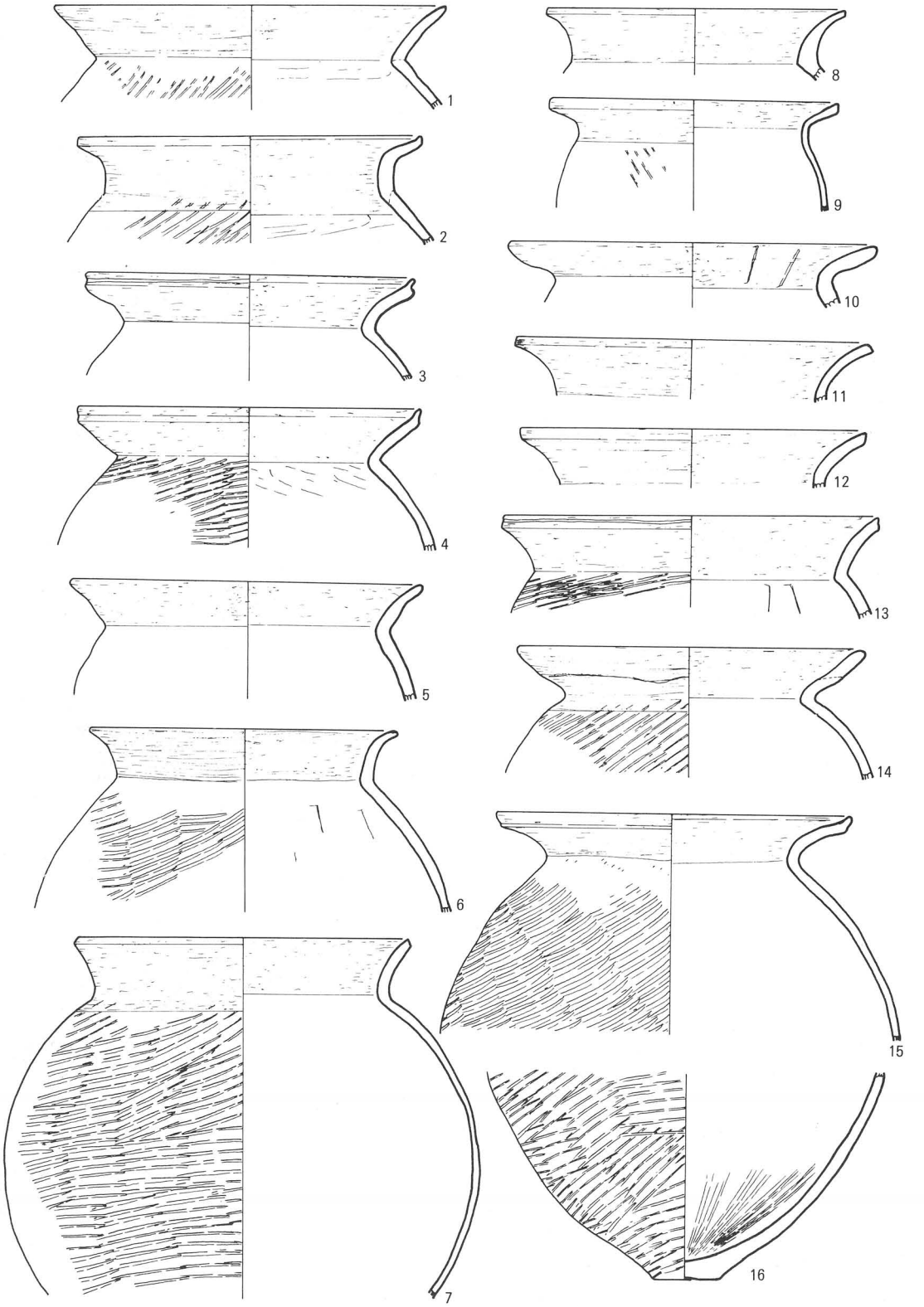
甕　（例）IA－１－ａ＝体部形態－肩部形態－口縁形態

１－Ｂ－ｃ＝底部形態

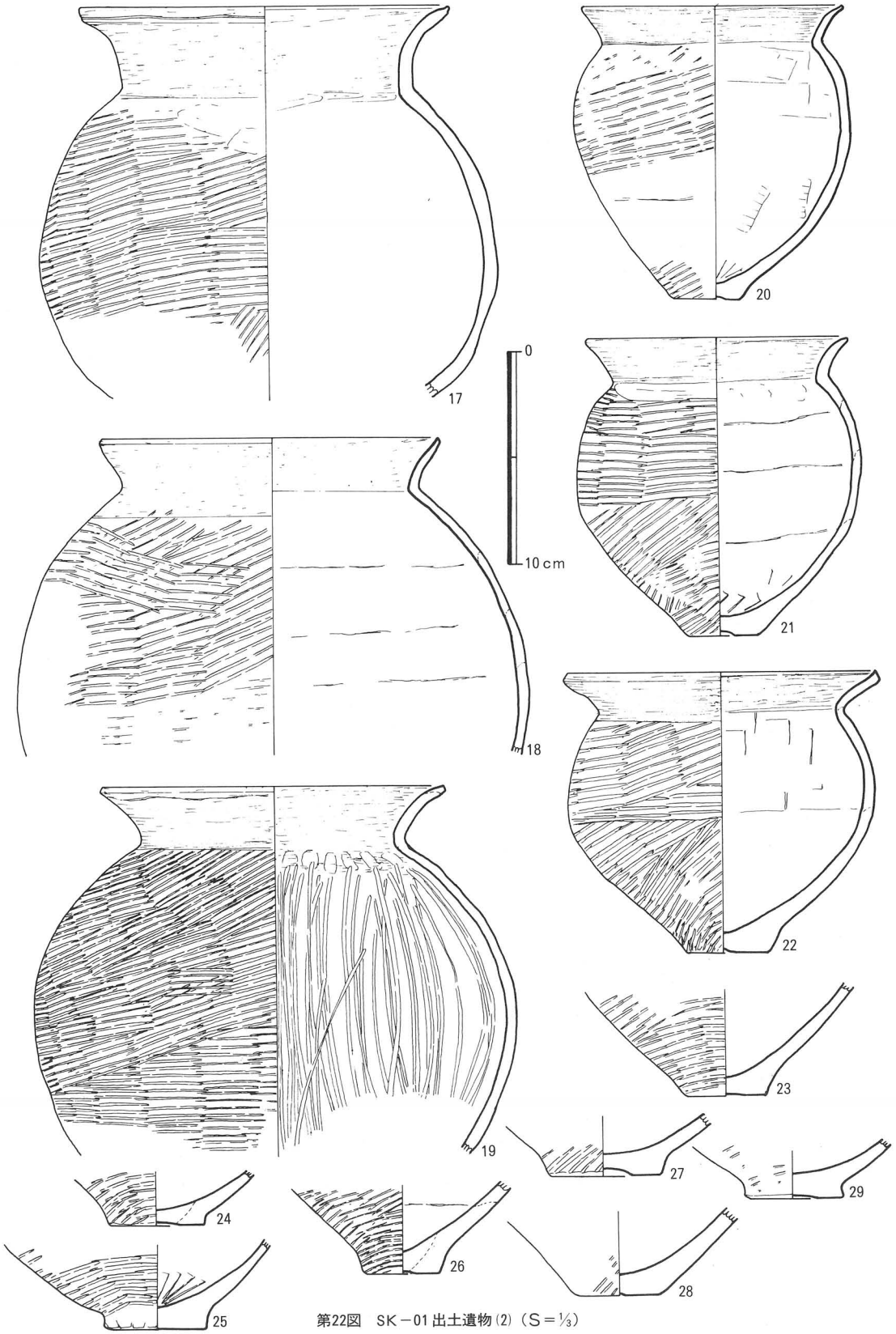
壷　（例）Ａ　＝体部形態

ａ　＝口縁部形態

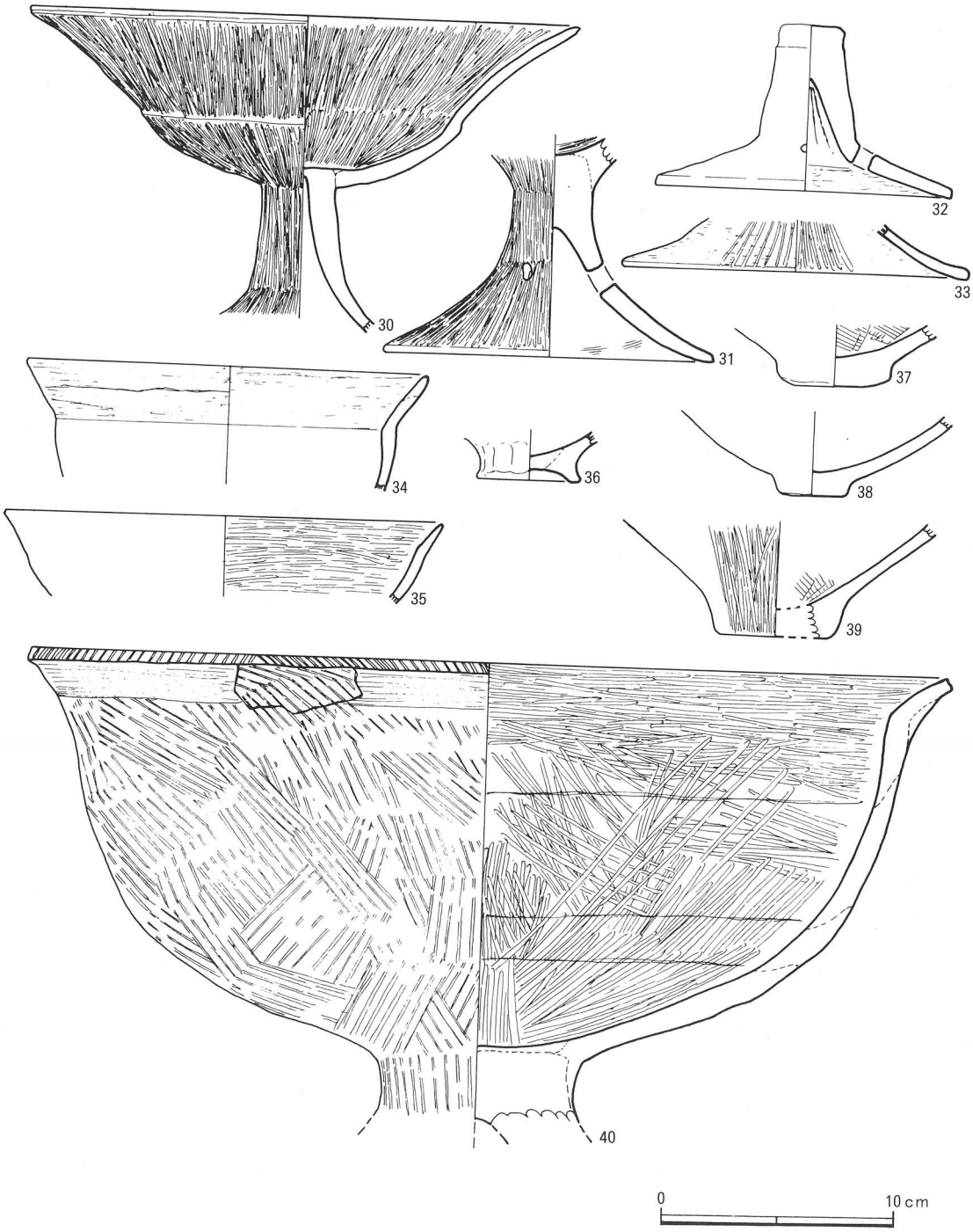
鉢の型式は底部形態のみ示した。



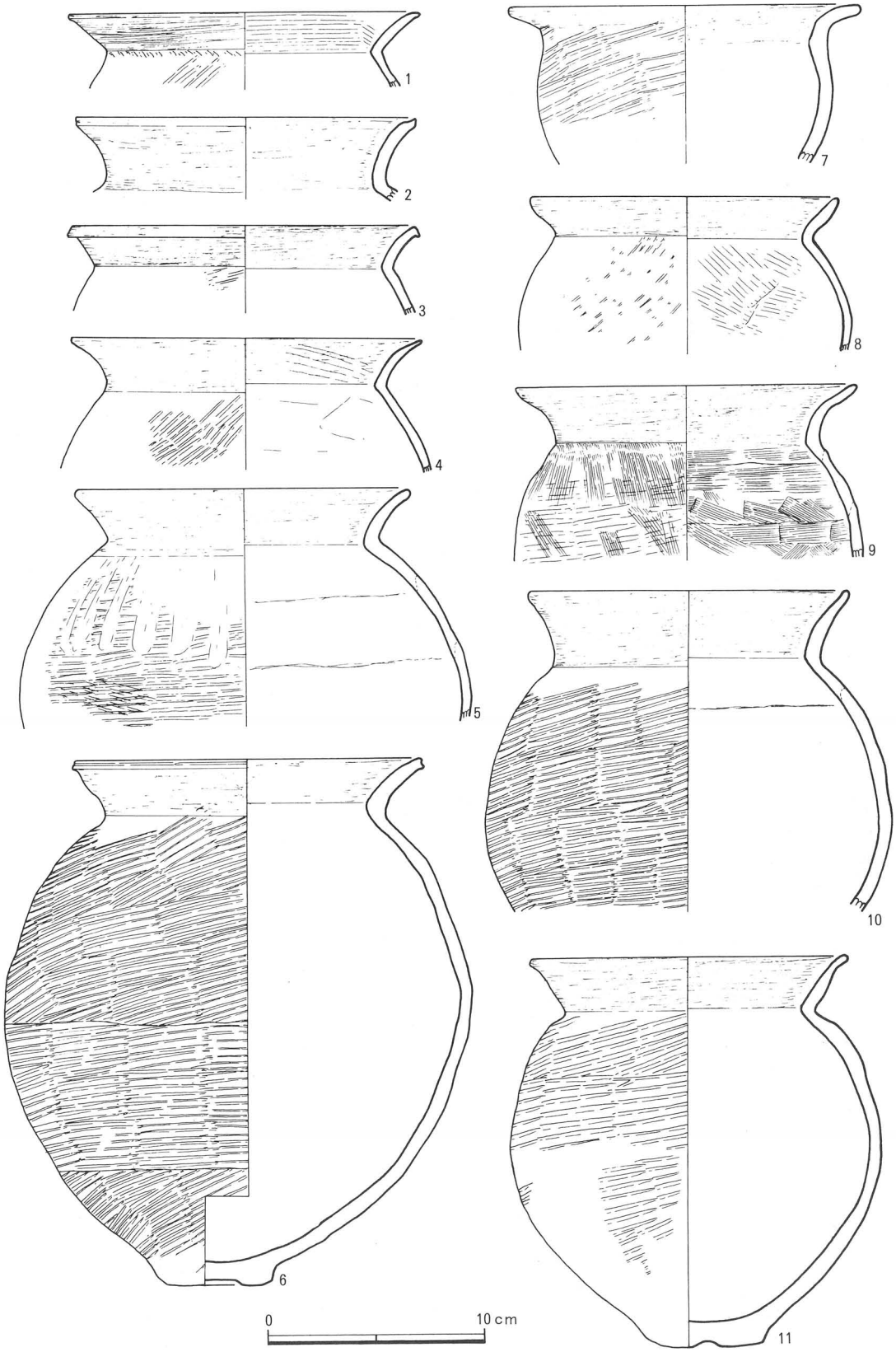
第21図　SK－01出土遺物(1)（S＝⅓）



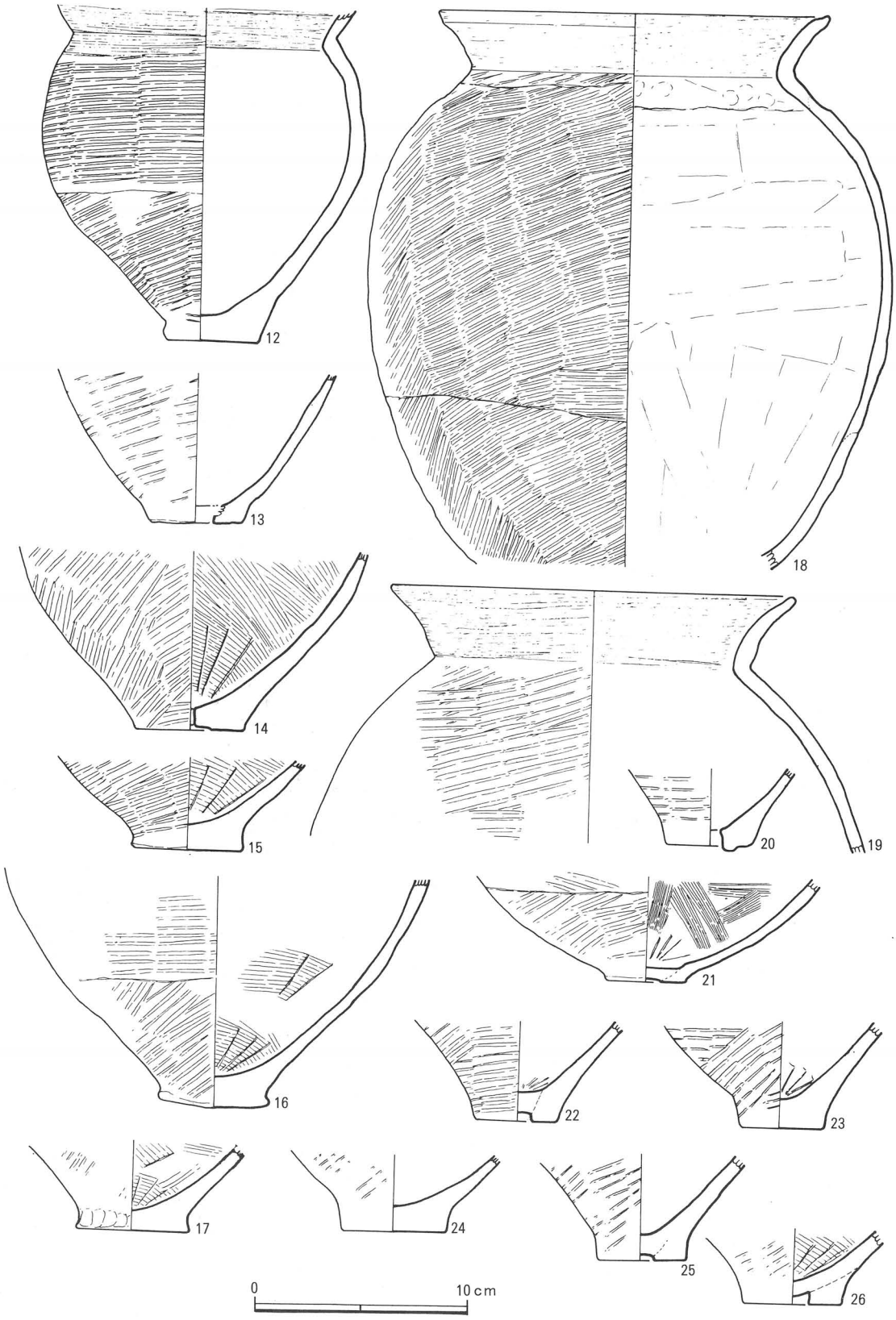
第22図　SK－01出土遺物(2)（S＝⅓）



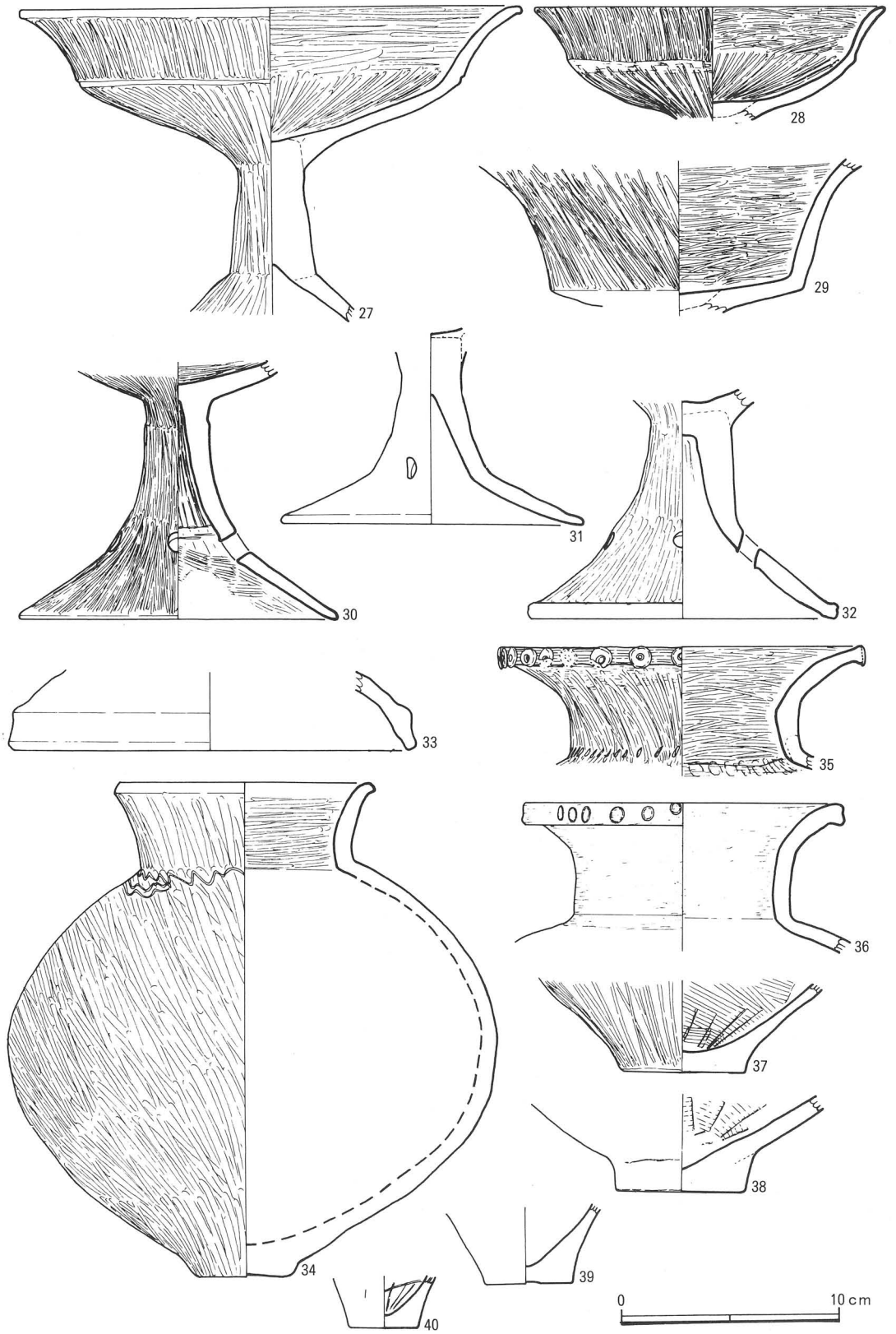
第23図　SK－01出土遺物(3)（S＝⅓）



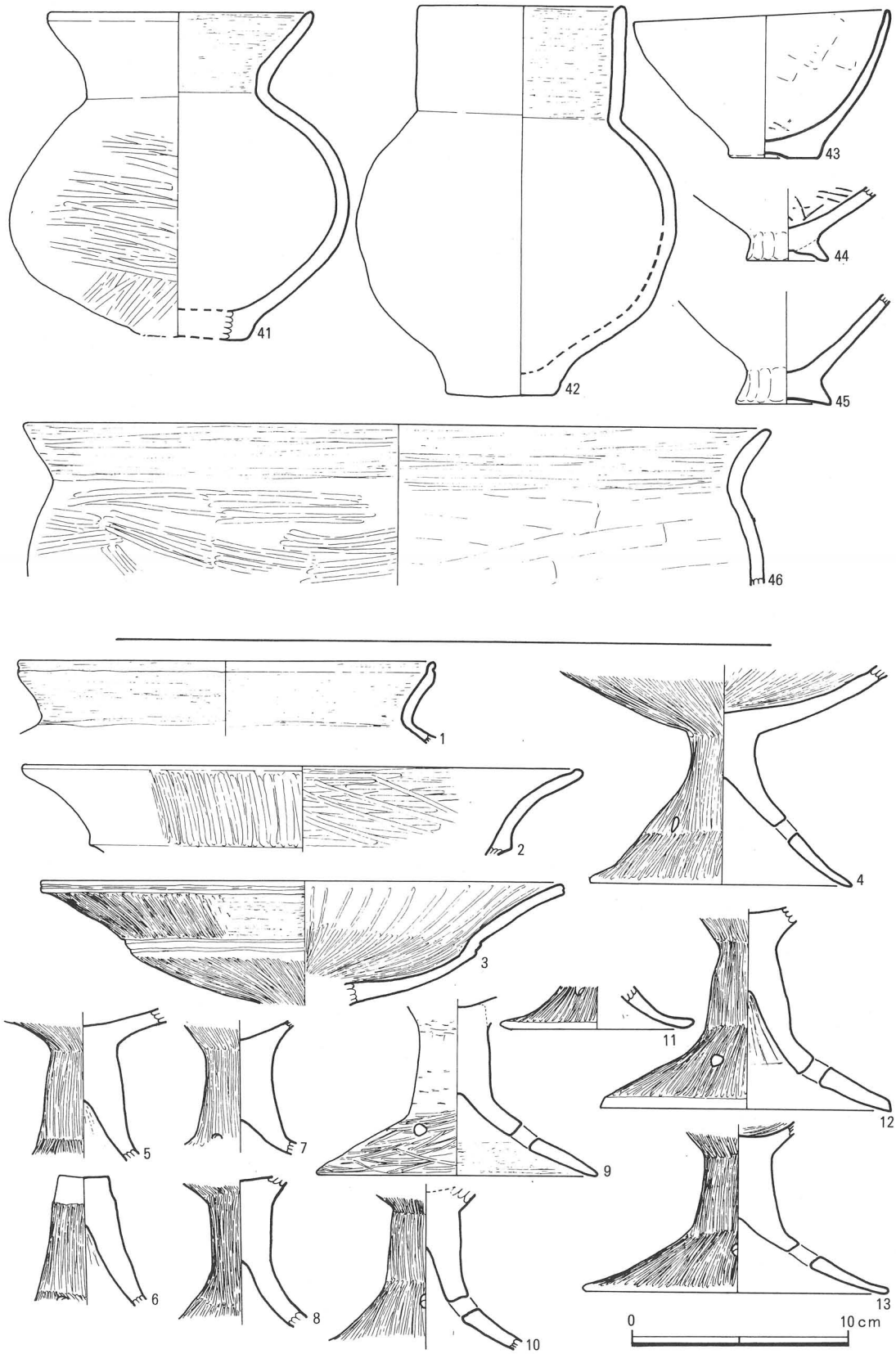
第24図　SD－01 出土遺物(1)（S＝⅓）



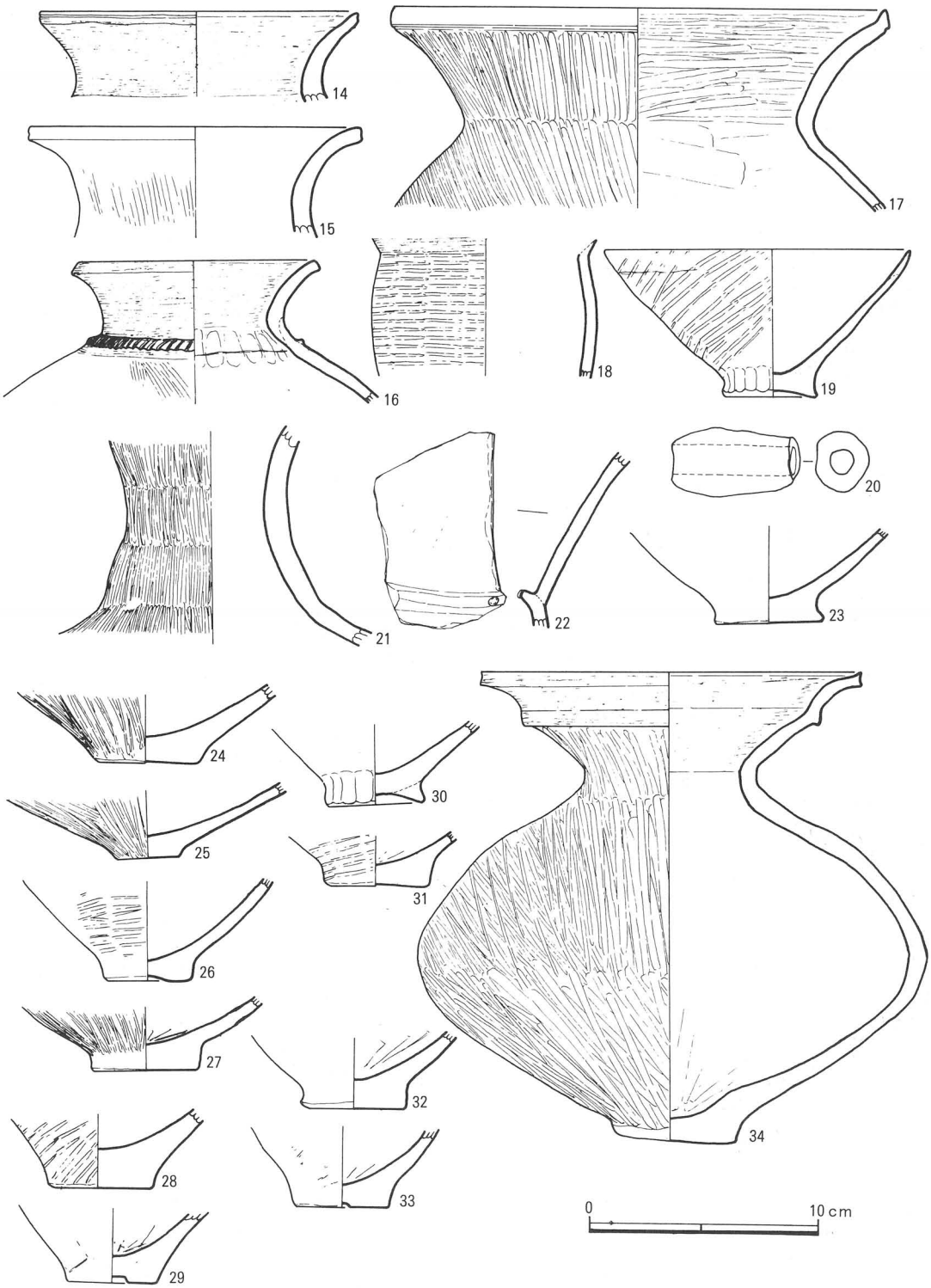
第25図　SD－01 出土遺物(2)（S＝¼）



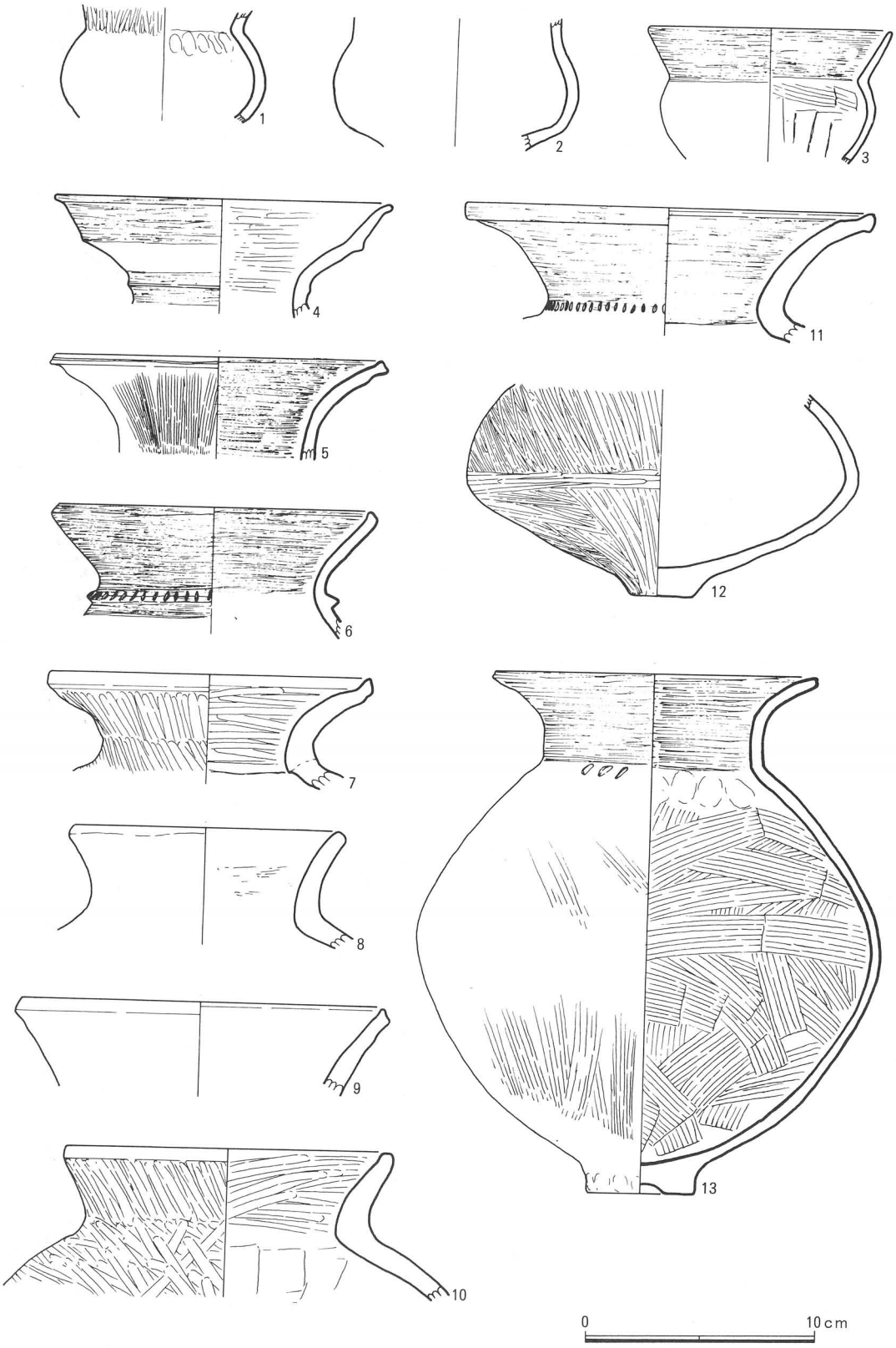
第26図　SD－01 出土遺物(3)（S＝⅓）



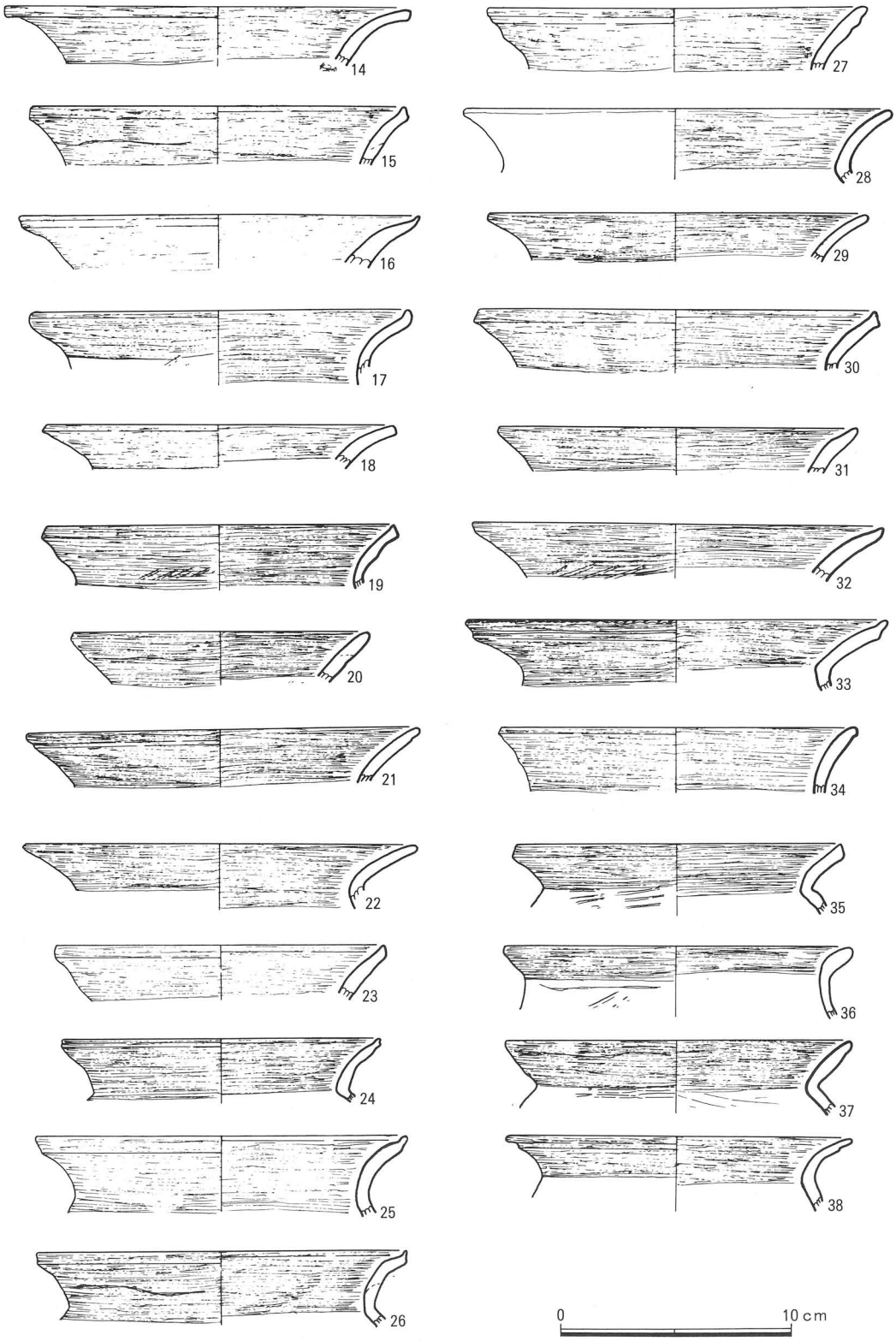
第27図　SD－01出土遺物(4)（S＝⅓）上段
南側側溝内出土遺物(1)　下段



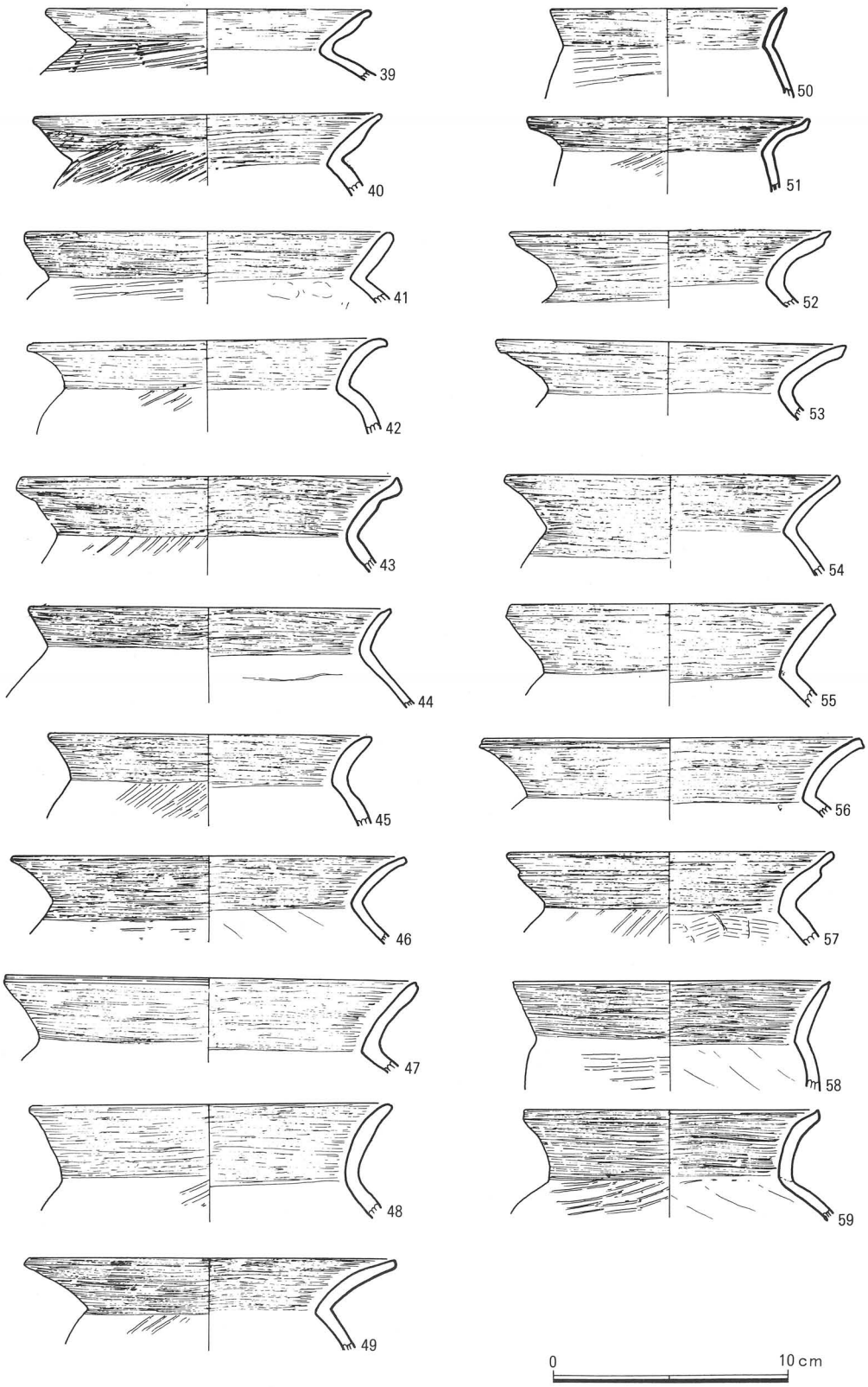
第28図　南側側溝内出土遺物(2)（S＝⅓）



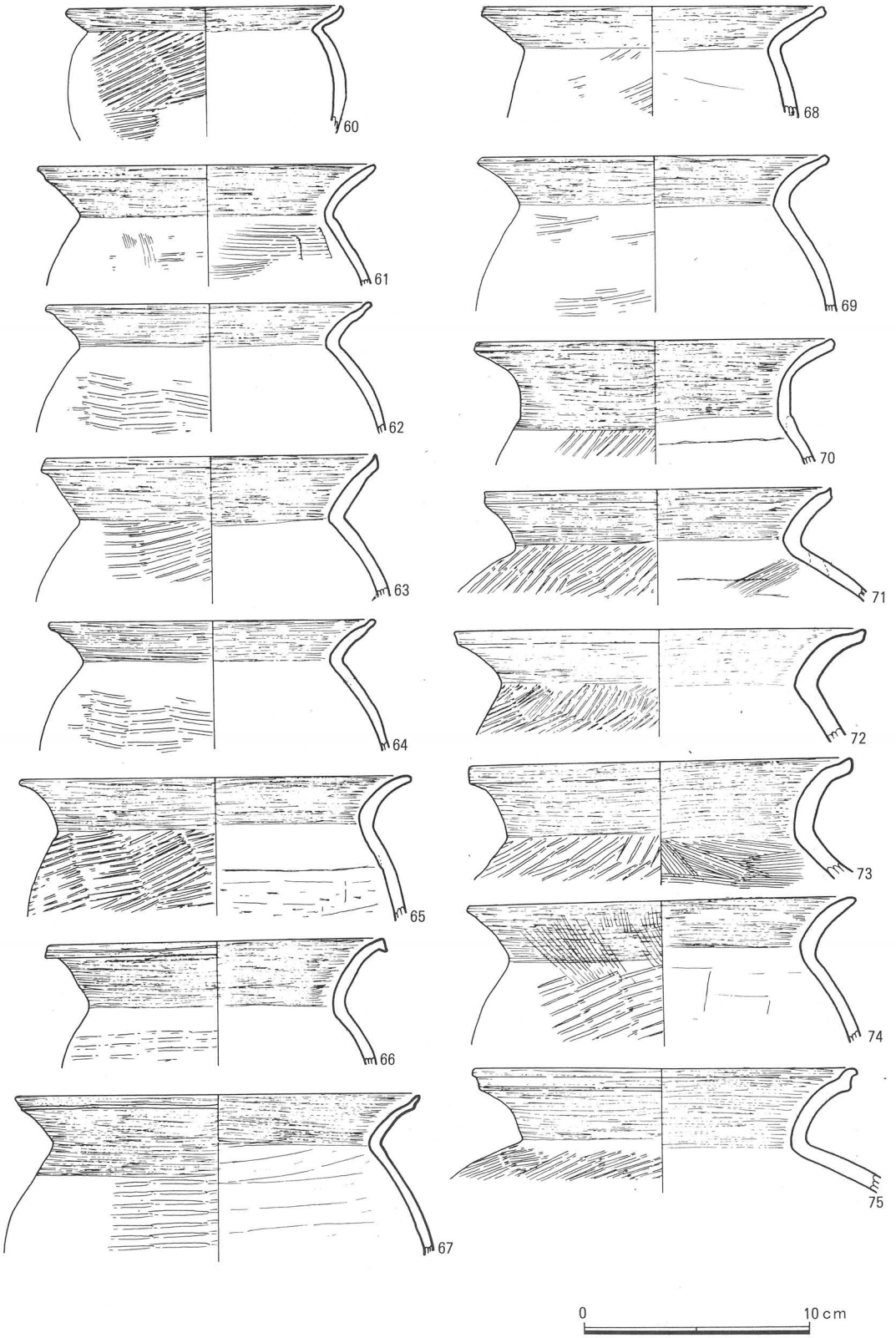
第29図　落込み状遺構出土遺物(1)（S＝⅓）



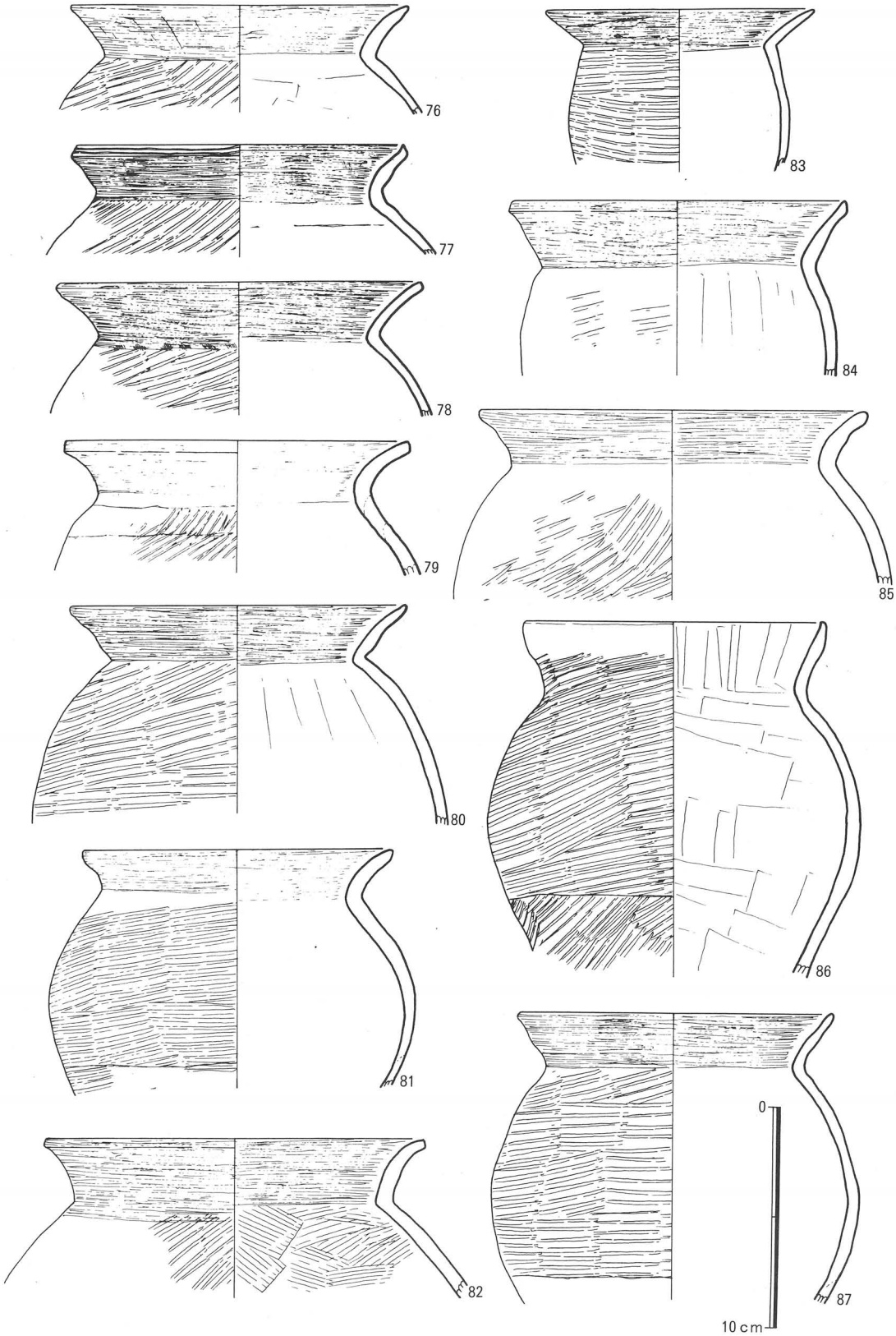
第30図　落込み状遺構出土遺物(2)（S＝⅓）



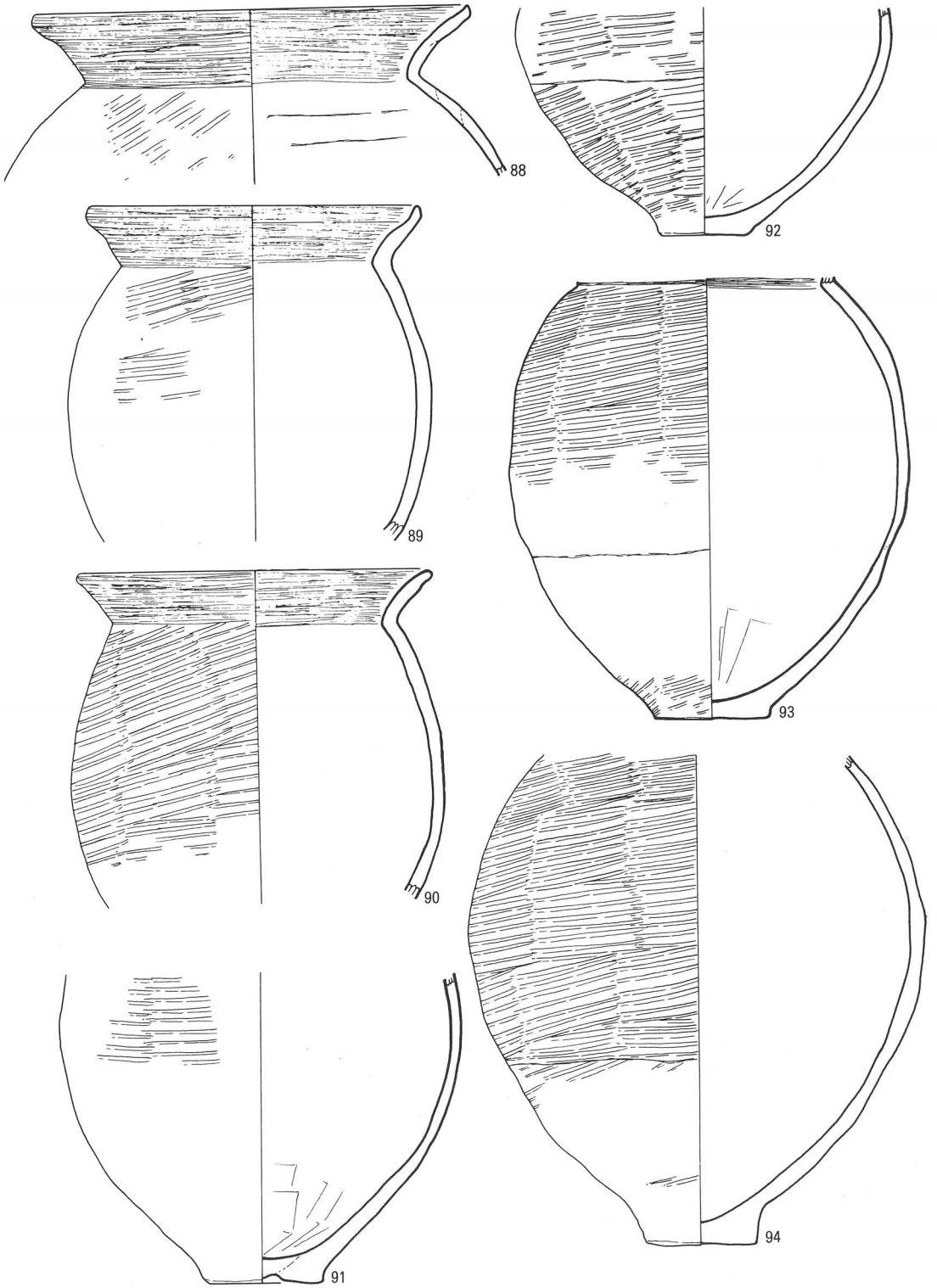
第31図　落込み状遺構出土遺物(3)（S＝⅓）



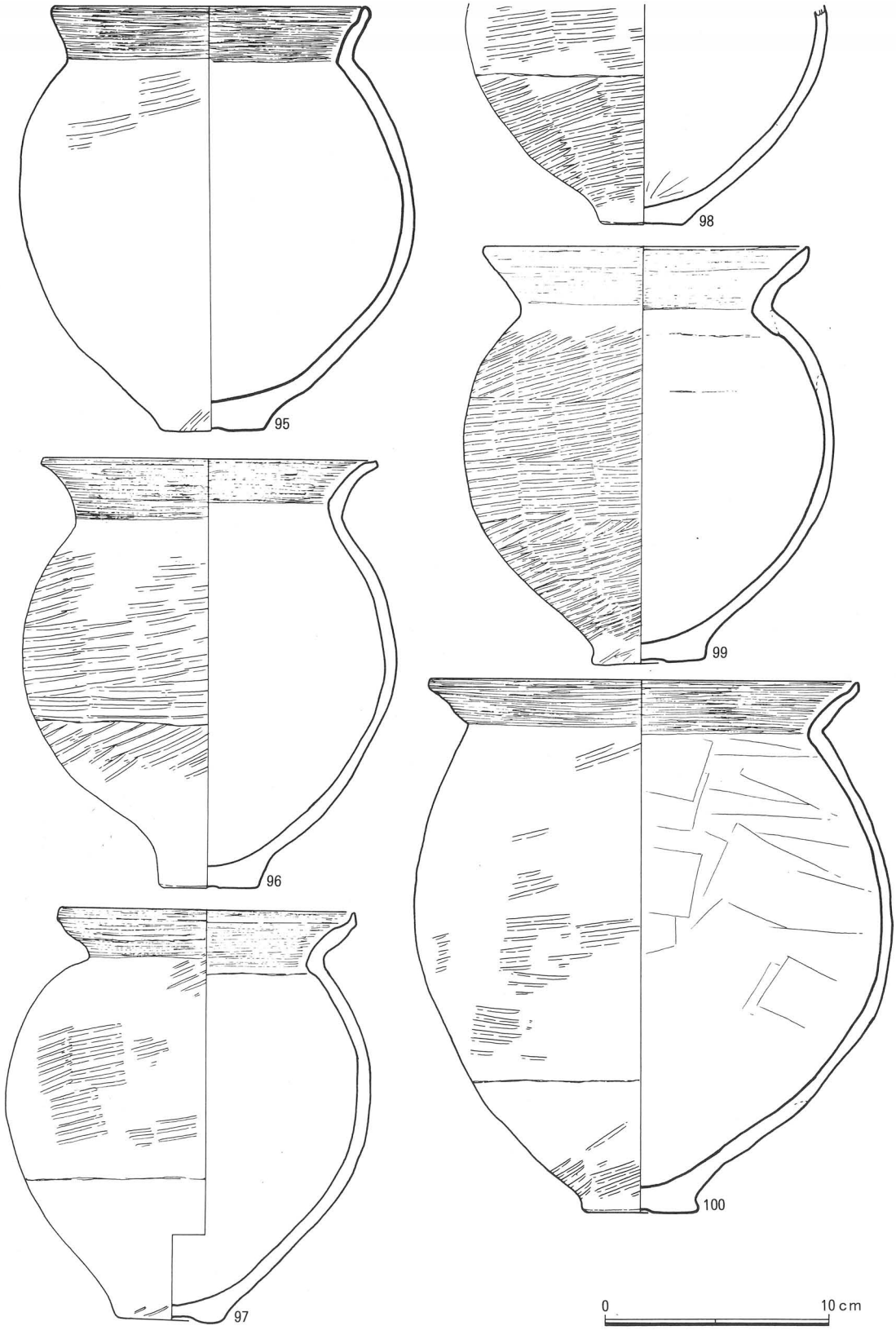
第32図　落込み状遺構出土遺物実測図(4)（S＝⅓）



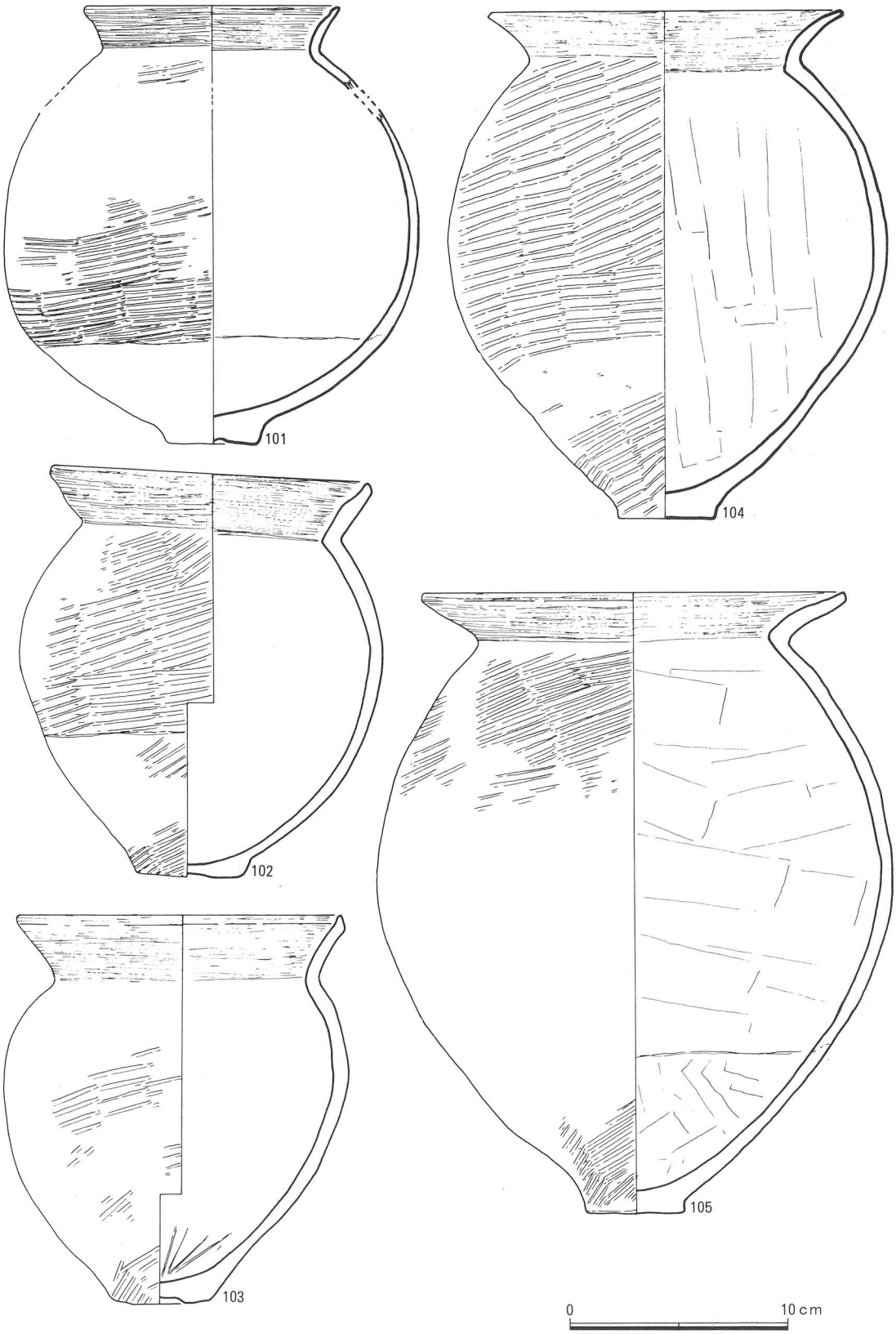
第33図　落込み状遺構出土遺物実測図(5)（S＝1/3）



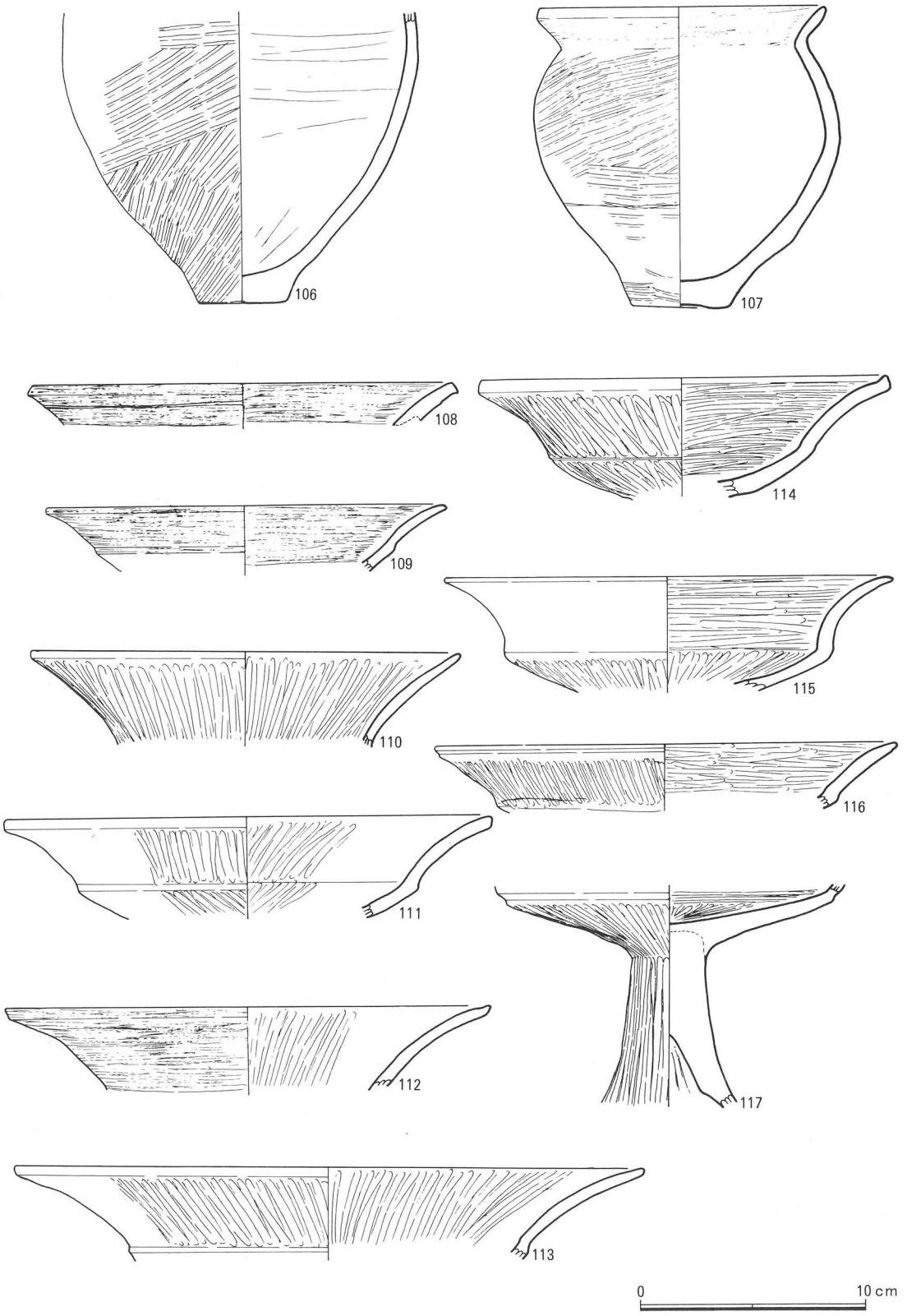
第34図　落込み状遺構出土遺物実測図(6)（S＝⅓）



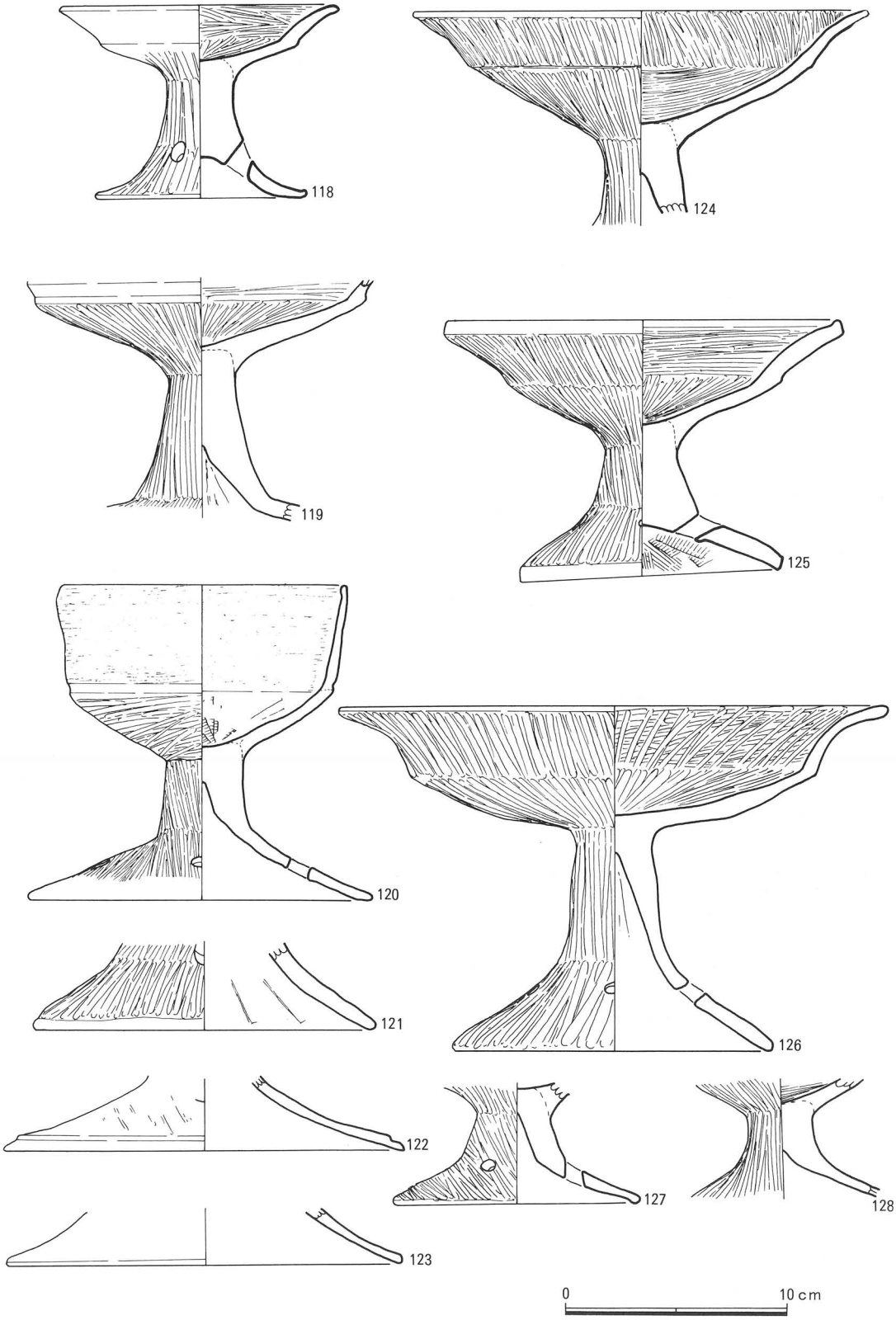
第35図　落込み状遺構出土遺物実測図(7)（S＝1/3）



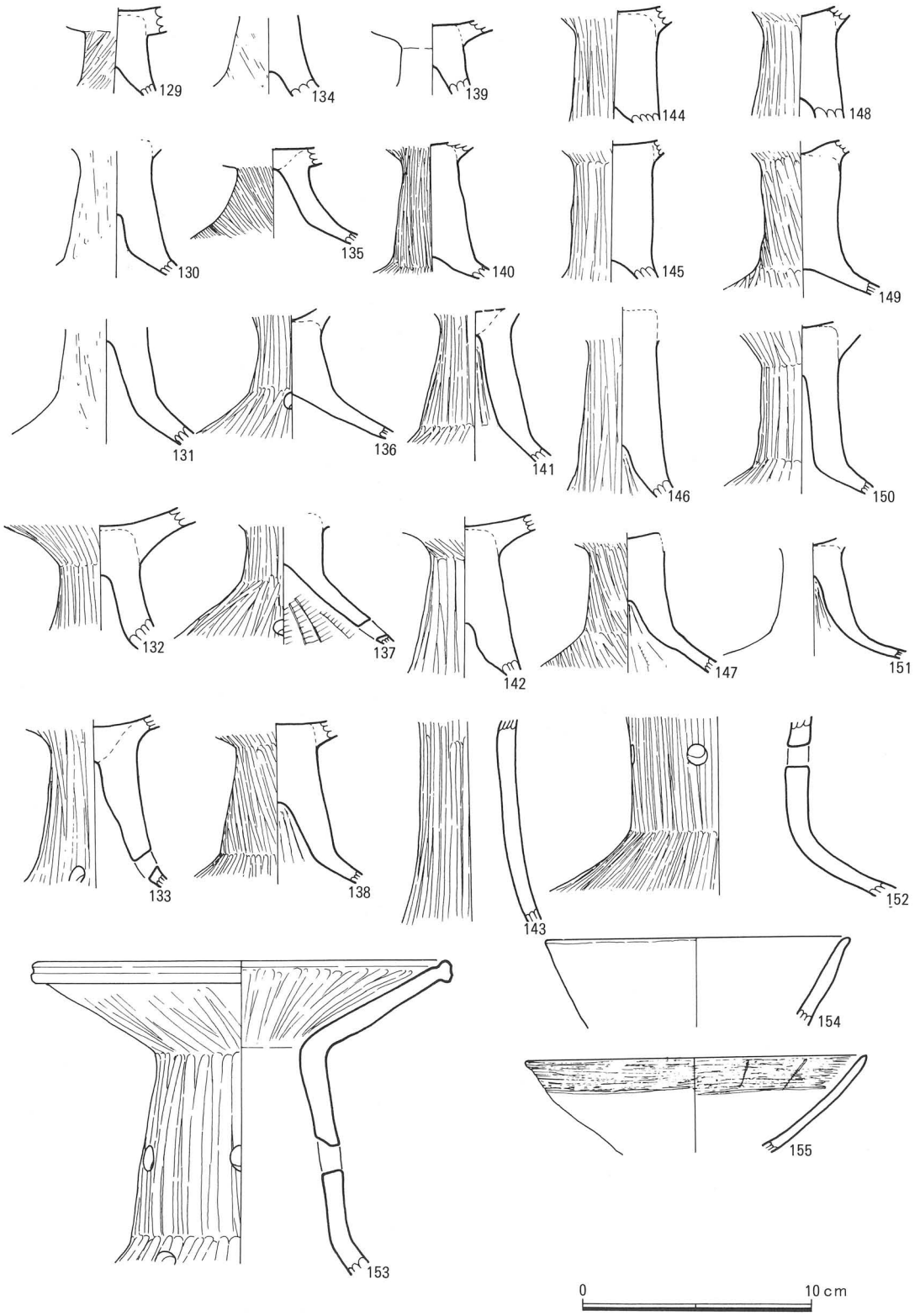
第36図　落込み状遺構出土遺物実測図(8)（S＝⅓）



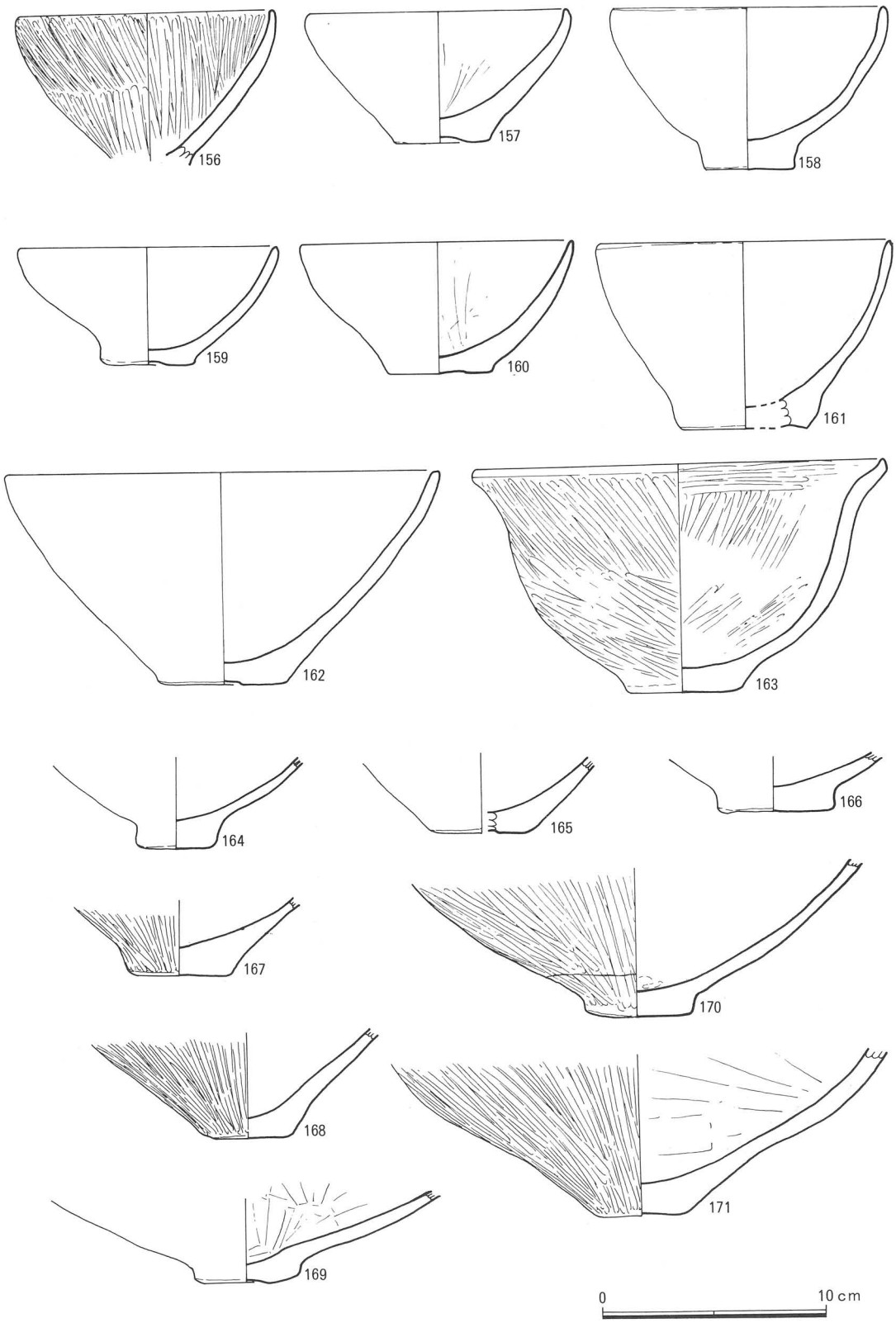
第37図　落込み状遺構出土遺物実測図(9)（S＝⅓）



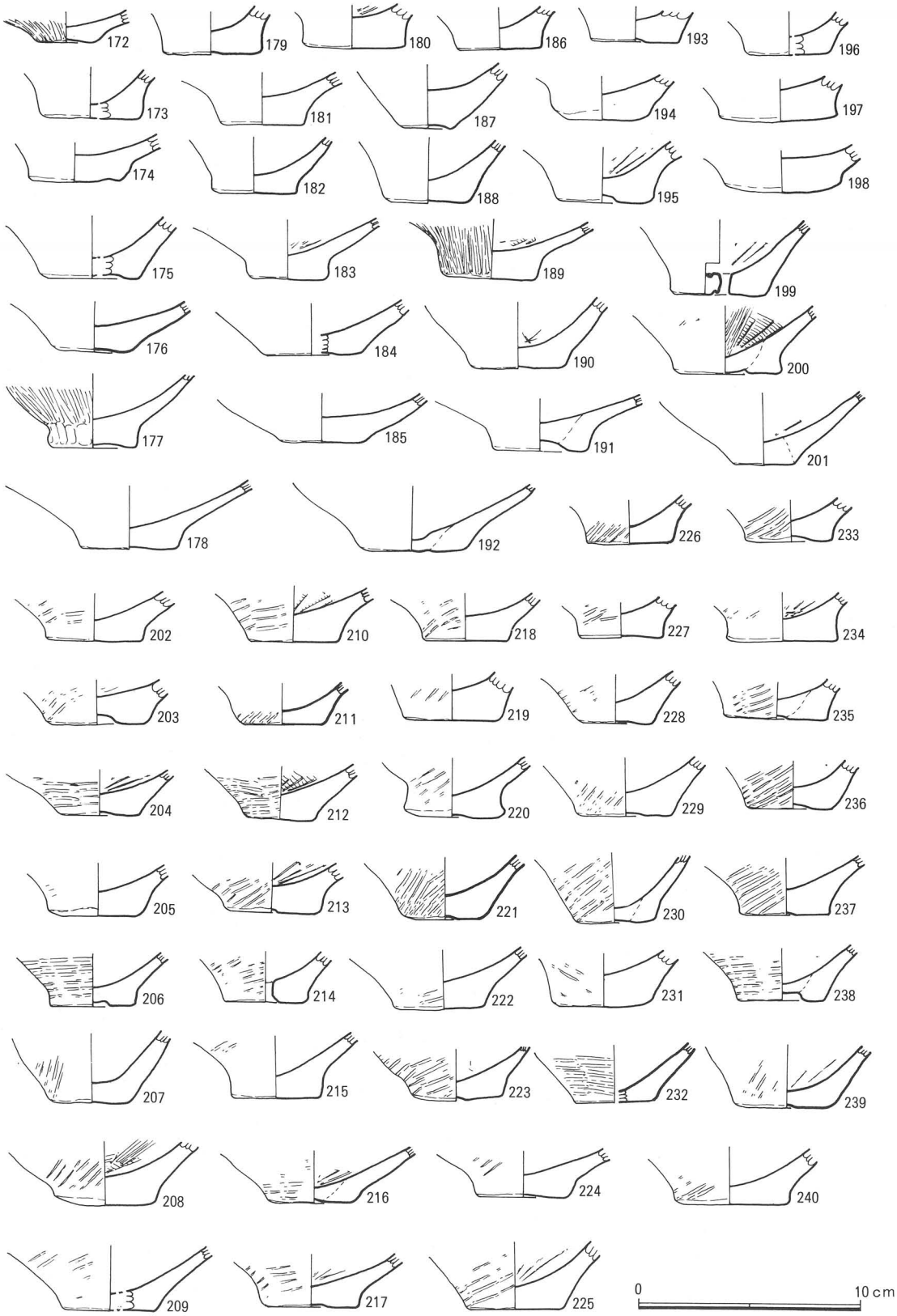
第38図　落込み状遺構出土遺物実測図⑽（S＝⅓）



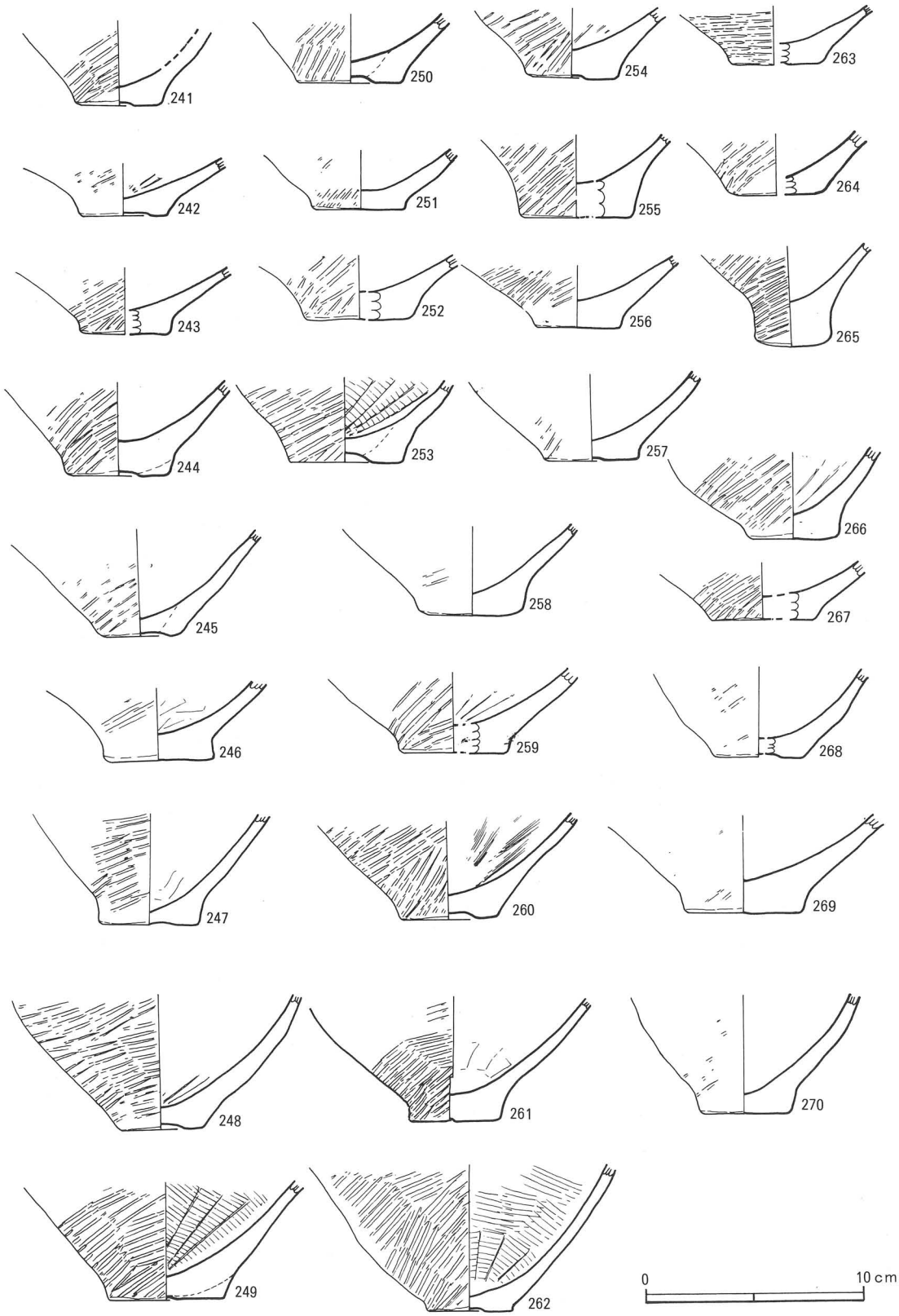
第39図　落込み状遺構出土遺物実測図(11)（S＝⅓）



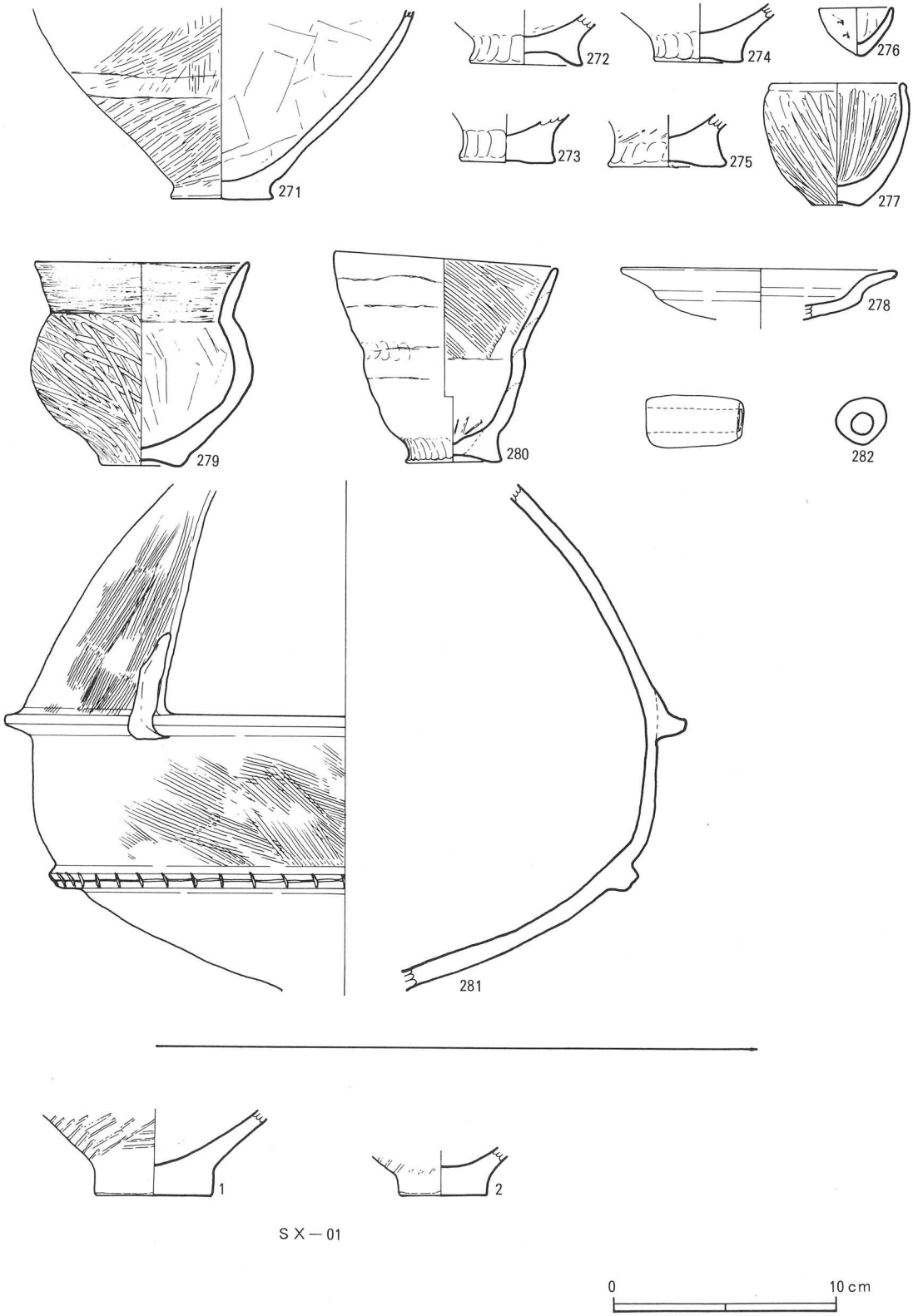
第40図　落込み状遺構出土遺物実測図⑫（S＝⅓）



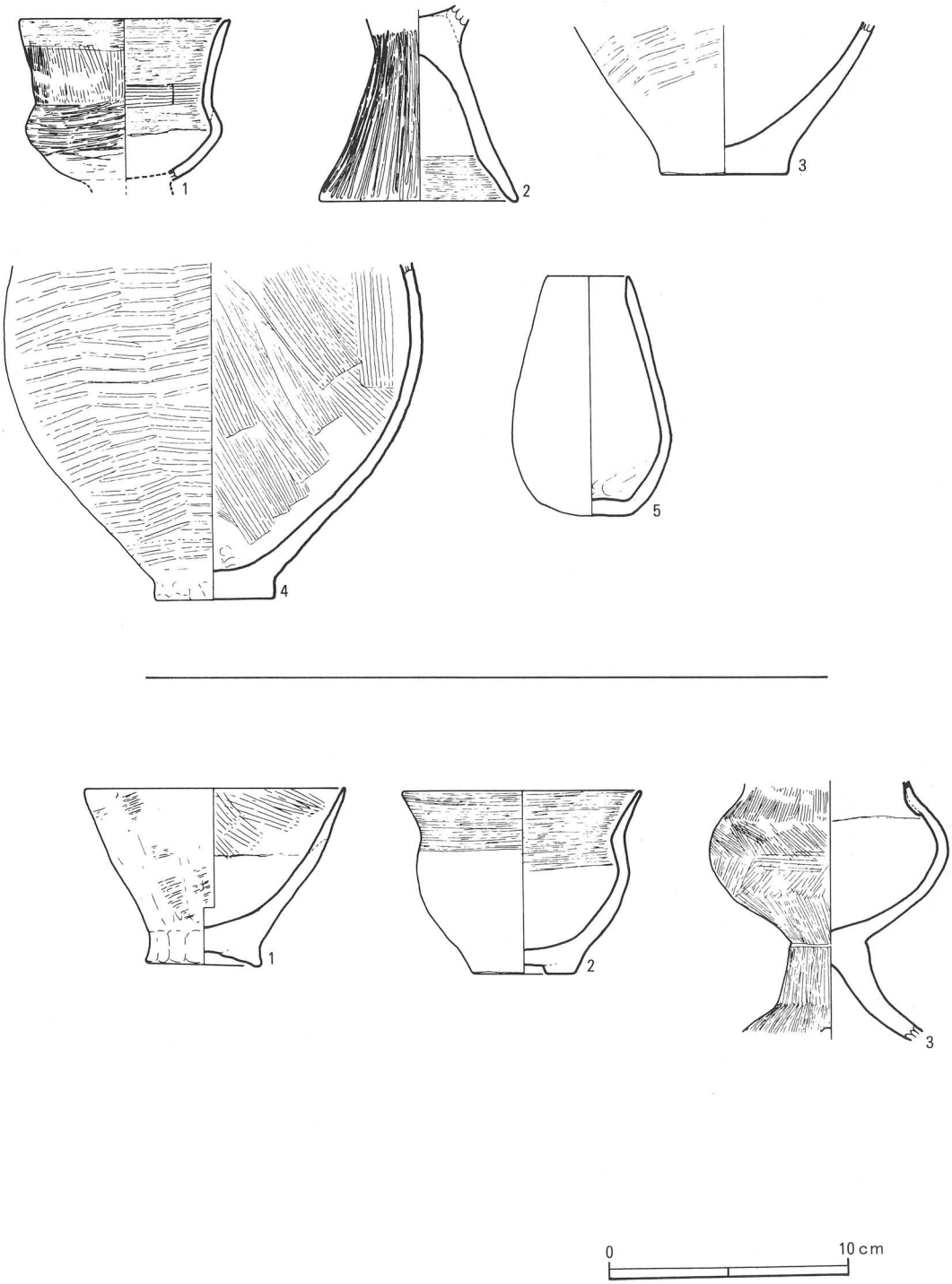
第41図　落込み状遺構出土遺物実測図⑫（S＝⅓）



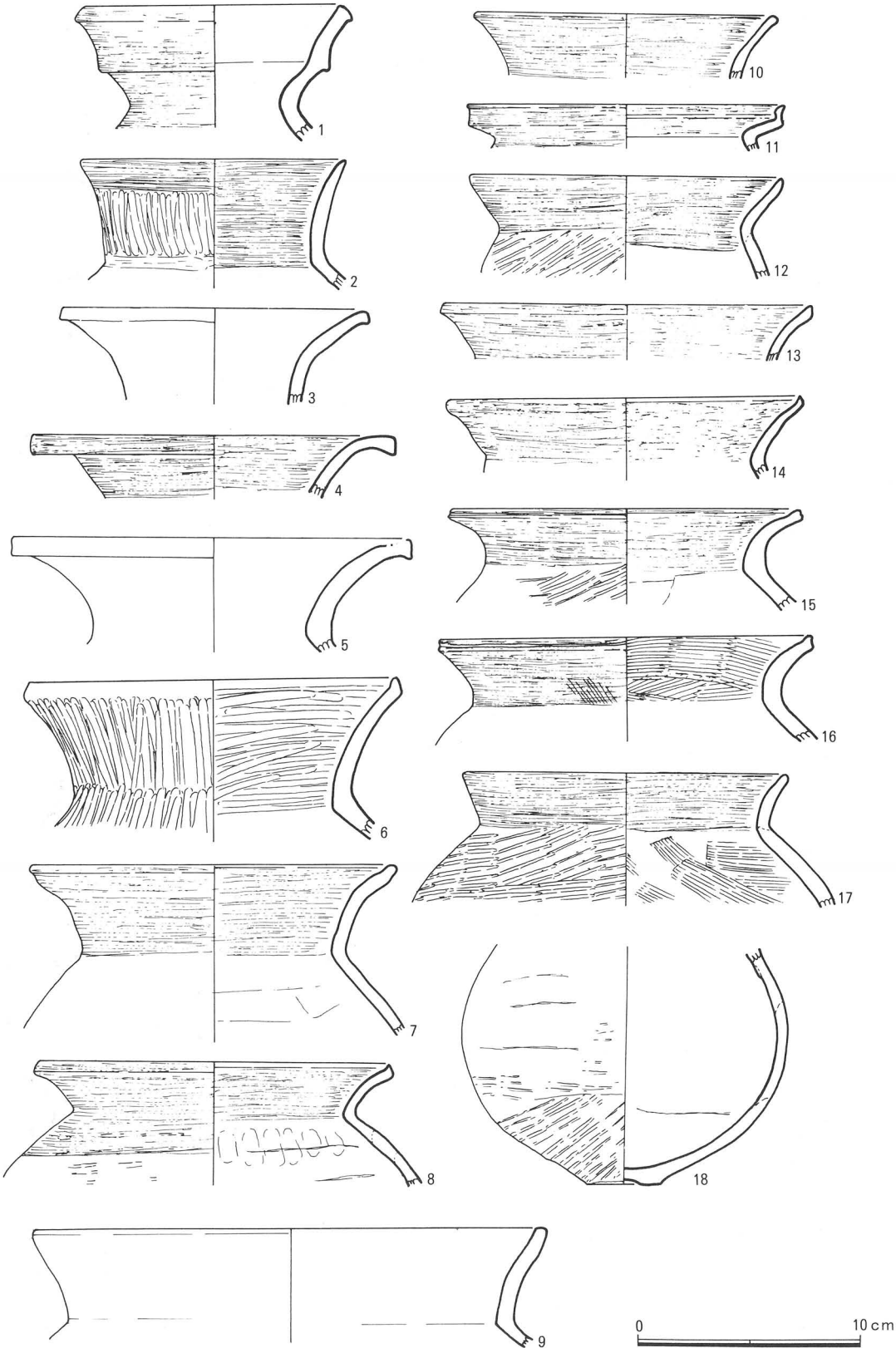
第42図　落込み状遺構出土遺物実測図⒀（S＝⅓）



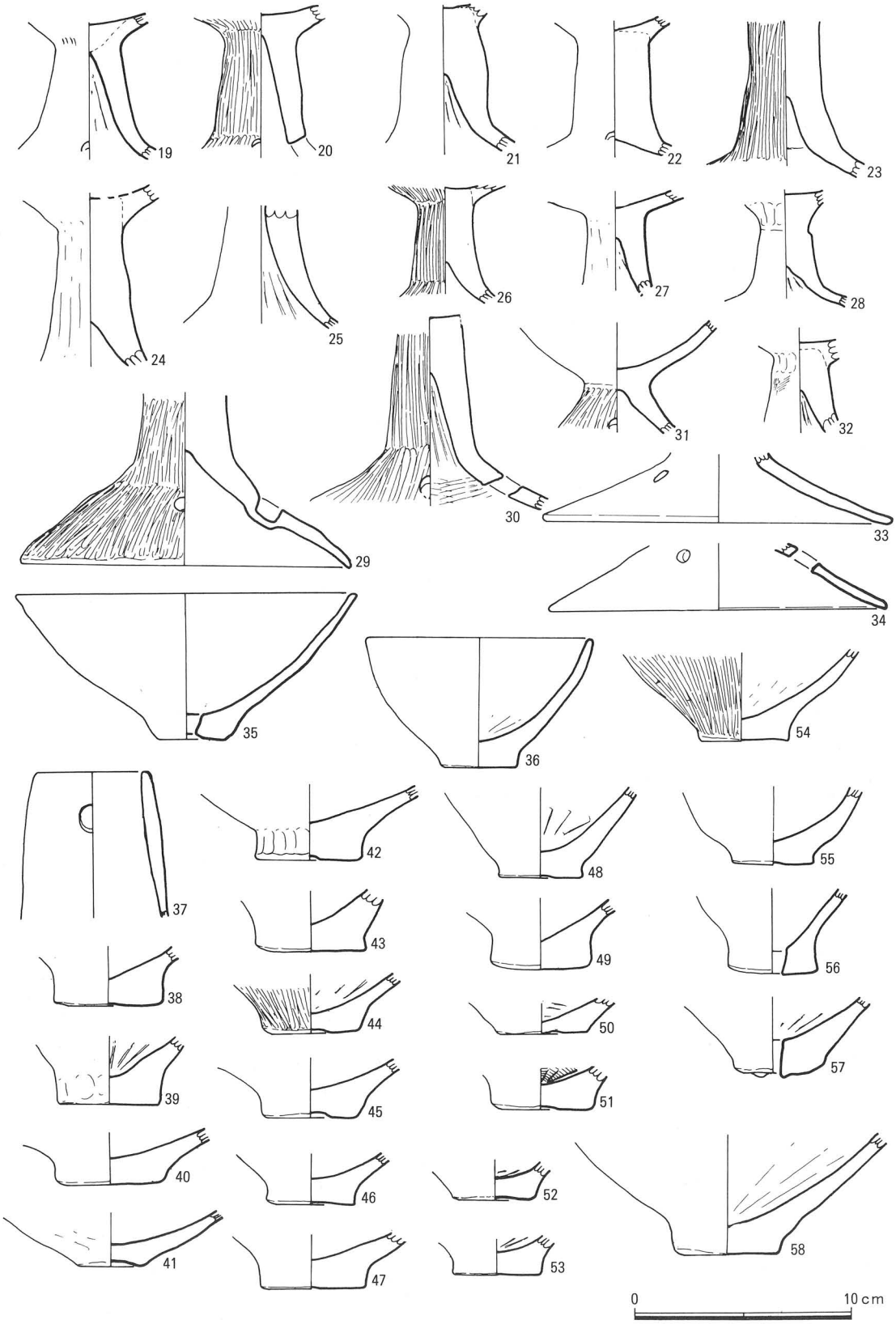
第43図　落込み状遺構⒁，SX－01出土遺物実測図（S＝⅓）



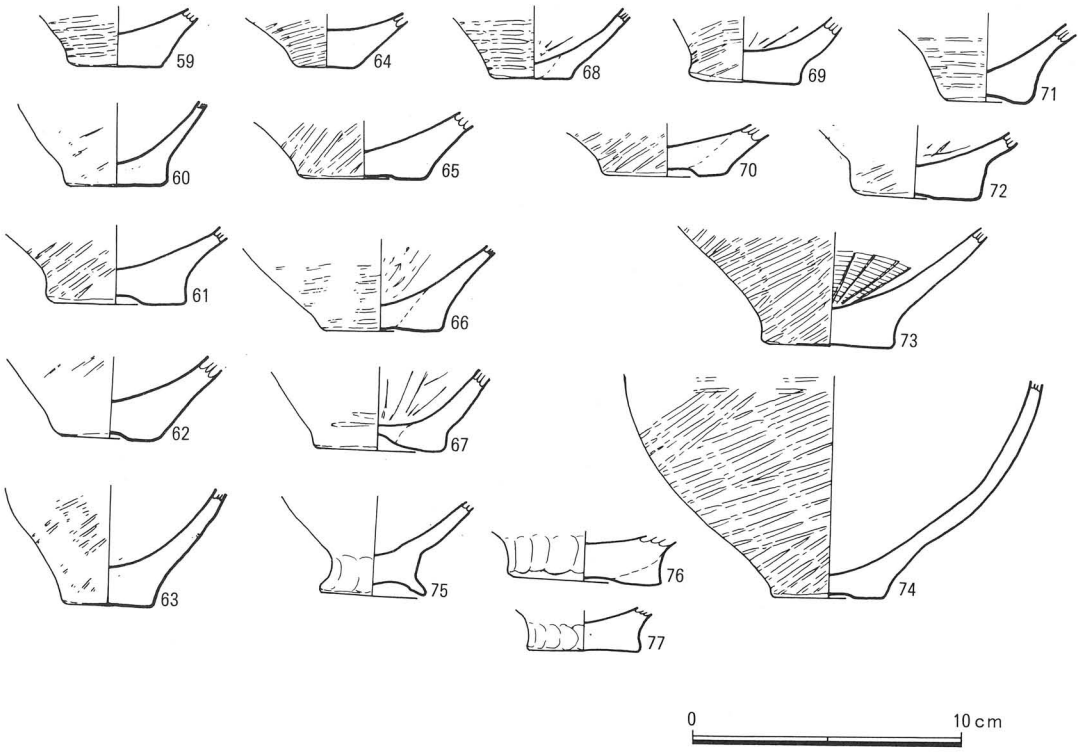
第44図　0－5E区土器集中部（上段）SK－01北側（下段）・出土遺物実測図（S＝⅓）



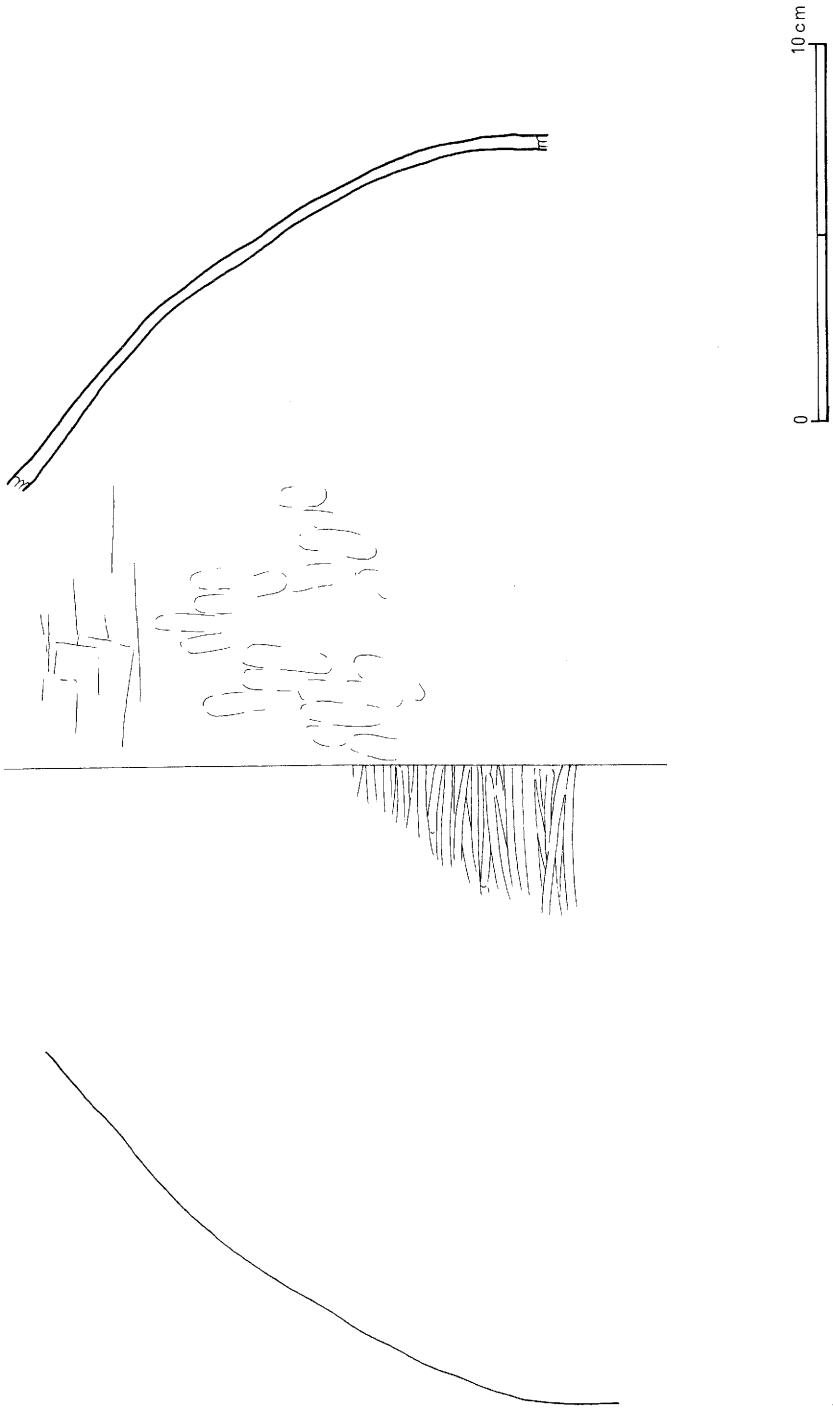
第45図　弥生後期包含層出土遺物(1)（S＝⅓）



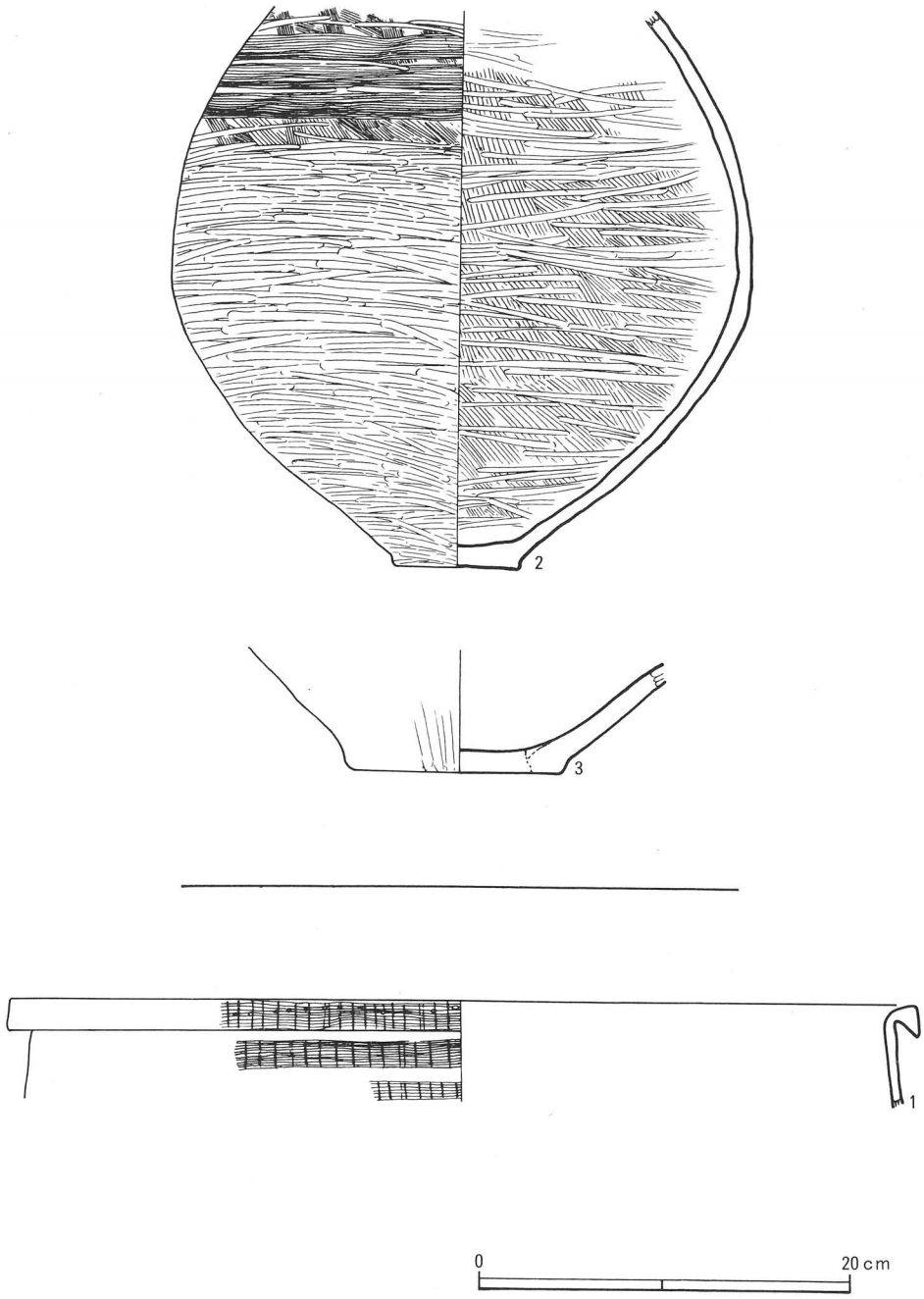
第46図　弥生後期包含層出土遺物実測図(2)（S＝⅓）



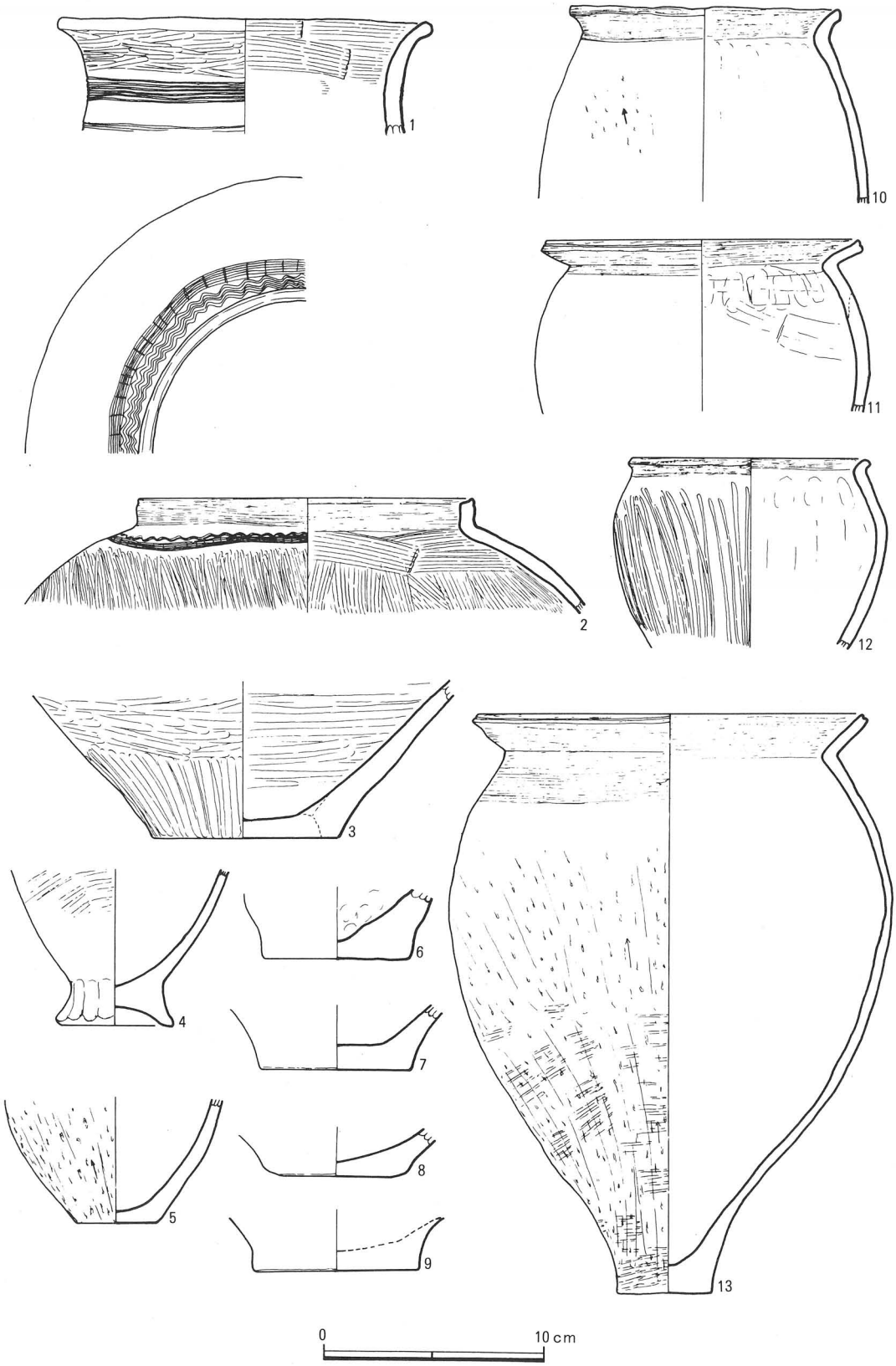
第47図　弥生後期包含層出土遺物実測図(3)（S＝⅓）



第48図　土器棺・蓋（S＝¼）



第49図　土器棺（2，3），SD－02(1)出土遺物（S＝¼）



第50図　弥生後期包含層出土遺物（S＝⅓）

SK－01 (1)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－21 / 1	甕	C 17.8 (F) H B W	Ⅰ－2－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－21 / 2	甕	C 15.4 (F) H B W	Ⅰ－3－d	タタキ(30／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－21 / 3	甕	C 15.0 (F) H B W	Ⅰ－1－c	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡赤褐色	
PL－21 / 4	甕	C 15.4 (F) H B W	Ⅰ－1－c	タタキ(45／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－21 / 5	甕	C 16.0 H B W	Ⅰ－2－a	—	—	o i 暗褐色	
PL－21 / 6	甕	C 14.0 (F) H B W	ⅠC－1－a	タタキ(30／10cm)	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL－21 / 7	甕	C 15.0 (F) H B W 21.4 (F)	ⅠC－1－d	タタキ(25／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－21 / 8	甕	C 13.4 (F) H B W	ⅠC－1－b	—	—	o i 淡褐色	
PL－21 / 9	甕	C 13.0 (F) H B W	ⅠB－1－b	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 赤褐色	
PL－21 / 10	甕	C 16.6 (F) H B W	Ⅲ－4－a	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	

第1表　出土土器観察表

SK－01 (2)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－21 11	甕	C 15.8 (F) H B W	b	—	—	o i 淡赤褐色	
PL－21 12	甕	C 15.6 (F) H B W	b	—	—	o i 明褐色	
PL－21 13	甕	C 16.8 (F) H B W	1－b	タタキ (40／10cm)	ナデ I	o i 淡褐色	
PL－21 14	甕	C 15.8 (F) H B W	I－1－a	タタキ(35／10cm)	ナデ II	o i 暗褐色	
PL－21 15	甕	C 16.0 (F) H B W	IC－1－c	タタキ (25／10cm)	—	o i 淡褐色	
PL－21 16	甕底	C H B 3.0 W	3－A	タタキ(20／10cm)	ハケ	o i 暗褐色	
PL－21 17	甕	C 17.2 (F) H B W 21.2 (F)	IC－3－d	タタキ(35／10cm)	ナデ II	o i 淡褐色	
PL－21 18	甕	C 15.6 (F) H B W 23.6 (F)	IC－1－b	タタキ (40／10cm)	ナデ II	o i 暗褐色	
PL－21 19	甕	C 15.8 (F) H B W 22.2 (F)	IC－1－b	タタキ (30／10cm)	ナデ II ミガキ	o i 淡赤褐色	
PL－21 20	甕	C 12.1 H 13.7 B 3.3 W 12.8	IIA－1－b 2－A	タタキ (24／10cm)	ナデ I ナデ II	o i 淡赤灰色	

第2表　出土土器観察表

SK－01 (3)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－21 21	甕	C 12.2 H 14.0 B 3.3 W 13.1	ⅡB－1－a 3－A	タタキ（22／10cm）	ナデ Ⅱ ケズリ B	o 暗赤褐色 i 黒灰色	
PL－21 22	甕	C 14.3 H 13.2 B 3.9 W 14.1	ⅡC－1－d 2－A	タタキ（24／10cm）	ナデ Ⅰ（2.5P） ナデ Ⅱ	o i 明灰色	
PL－21 23	甕底	C H B 3.8 W	3－A	タタキ	炭化物付着	o i 暗褐色	
PL－21 24	甕底	C H B 4.3 W	2－A－a	タタキ（20／10cm）	炭化物付着	o i 暗褐色	
PL－21 25	甕底	C H B 4.7 W	2－C	タタキ（30／10cm）	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－21 26	甕底	C H B 3.6 W	2－A－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－21 27	甕底	C H B 5.2 W	2－A	タタキ	—	o i 暗灰色	
PL－21 28	甕底	C H B 3.6 W	3－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡黄灰色	
PL－21 29	甕底	C H B 4.7 W	2－A	タタキ	炭化物付着	o i 暗灰色	
PL－21 30	高坏	C 23.4 H B W	D_2 4－A－c	ミガキ	ミガキ ナデ	o i 淡灰褐色	

第3表　出土土器観察表

SK－01 (4)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－21 / 31	高坏	C 13.9 H B W	1－A－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－21 / 32	高坏	C H B 12.8 W	4－A－c	ナデ Ⅱ	シボリ目	o i 暗褐色	
PL－21 / 33	高坏裾	C H B 15.0（F） W		ミガキ	ミガキ	o i 淡褐色	
PL－21 / 34	鉢	C 17.0（F） H B W		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－21 / 35	鉢	C 18.8（F） H B W		ナデ Ⅱ	ミガキ	o i 淡褐色	
PL－21 / 36	鉢底	C H B 4.4 W	1－B－a	指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－21 / 37	壺底	C H B 4.4 W	2－C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o i 明褐色	
PL－21 / 38	壺底	C H B 2.9 W	1－C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 明灰色	
PL－21 / 39	壺底	C H B 5.0（F） W	1	ミガキ	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－21 / 40	台付鉢	C 39.0（F） H B W		ハケ（5 cm）	ミガキ	o i 暗褐色	

第4表　出土土器観察表

SD－01 (1)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－24 / 1	甕	C 15.8 (F) H B W	Ⅱ－1－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 明灰色	
PL－24 / 2	甕	C 15.4 (F) H B W	3－d	—	—	o i 暗灰色	
PL－24 / 3	甕	C 15.6 (F) H B W	Ⅱ－1－b	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 黒灰色	
PL－24 / 4	甕	C 16.0 (F) H B W	Ⅰ－1－a	タタキ	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL－24 / 5	甕	C 15.2 (F) H B W 20.8 (F)	ⅠC－1－a	タタキ (30／10cm) ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－24 / 6	甕	C 15.7 H 24.1 B 3.6 W 21.3	ⅠC－1－b 2－A	タタキ(23／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡赤褐色	
PL－24 / 7	甕	C 15.8 (F) H B W 13.2 (F)	ⅢA－4－a	タタキ(20／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－24 / 8	甕	C 14.0 (F) H B W 15.0 (F)	ⅠC－1－a	タタキ	ハケ (6cm)	o i 淡赤褐色	
PL－24 / 9	甕	C 15.4 (F) H B W 16.0 (F)	ⅠB－3－a	タタキ ハケ Ⅱ	ハケ	o i 明灰色	
PL－24 / 10	甕	C 14.4 (F) H B W 18.4 (F)	ⅠC－1－a	タタキ (30／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	

第5表　出土土器観察表

SD－01 (2)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－24 / 11	甕	C 14.2（F） H 17.9 B 5.4 W 16.9	IC－1－a	タタキ（21／10cm）	ナデ II	o i 淡灰褐色	
PL－25 / 2－c 12	甕	C H B 4.2 W 15.0	IIB－1	タタキ(28／10cm)	ナデ II	o i 淡褐色	
PL－25 / 13	甕	C 18.8（F） H B W	2－	タタキ（23／10cm）	ナデ II	o i 淡褐色	
PL－25 / 14	甕底	C H B 4.9 W	2－A	タタキ	ケズリ B	o i 淡褐色	
PL－25 / 15	甕底	C H B 5.8 W	2－C	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o i 淡褐色	
PL－25 / 16	甕底	C H B 5.2 W	2－C	タタキ(30／10cm)	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－25 / 17	甕底	C H B 5.2 W	2－C	タタキ	ケズリ B	o i 明褐色	
PL－25 / 18	甕	C 18.0（F） H B W 24.2（F）	IB－1－d	タタキ（26／10cm）	ナデI（2～3cm）	o i 淡赤褐色	
PL－25 / 19	甕	C 18.8（F） H B W	IC－1－a	タタキ（23／10cm）	ナデ II	o i 淡褐色	
PL－25 / 20	甕	C H B 3.9 W	2－	タタキ（25／10cm）	ナデ II	o i 明褐色	

第6表　出土土器観察表

SD－01 (3)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－25 / 21	甕底	CHBW 3.6	3－A－a	タタキ	ハケ	o 暗灰色 i	
PL－25 / 22	甕底	CHBW 3.8	2－A－a	タタキ(25／10cm)	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	
PL－25 / 23	甕底	CHBW 4.0	1－A－c	タタキ (40／10cm)	ケズリ B	o 暗褐色 i	
PL－25 / 24	甕底	CHBW 5.0	1－C	タタキ	—	o 淡褐色 i	
PL－25 / 25	甕底	CHBW 4.2	1－A－a	タタキ (25／10cm)	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 暗灰色	
PL－25 / 26	甕底	CHBW 4.6 (F)	2－A－b	タタキ(20／10cm)	ケズリ B	o 明褐色 i 暗褐色	
PL－26 / 27	高坏	CHBW 22.8 (F)	B 2－b－c	ミガキ	ミガキ	o 淡赤褐色 i	
PL－26 / 28	高坏	CHBW 16.0 (F)	D_1 － －a	ミガキ	ミガキ	o 明褐色 i	
PL－26 / 29	高坏	CHBW —	H a	ミガキ	ミガキ	o 赤褐色 i	
PL－26 / 30	高坏	CHBW 14.6	1－A	ミガキ	シボリ目 ハケ (5 cm)	o 淡褐色 i	

第7表　出土土器観察表

SD－01 (4)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－26 / 31	高坏	C H B W 13.8（F）	4－A－c	—	—	o i 淡褐色	
PL－26 / 32	高坏	C H B W 14.0（F）	1－A－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－26 / 33	高坏	C H B W 18.0（F）		—	ナデ Ⅱ	o i 明灰色	
PL－26 / 34	広口壺	C 11.5 H 22.7 B 3.9 W 22.3	c b	ミガキ 波状文（2／3周のみ）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－26 / 35	広口壺	C 16.6 H B W	c b	ミガキ	ミガキ	o i 淡褐色	
PL－26 / 36	広口壺	C 14.4（F） H B W	c b	—	—	o i 淡赤褐色	
PL－26 / 37	壺底	C H B W 5.8	2－A－c	ミガキ	ケズリ B	o i 明褐色	
PL－26 / 38	壺底	C H B W 5.9	1－C－c	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 明褐色 i 黒灰色	
PL－26 / 39	壺底	C H B W 3.9	2－A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－26 / 40	壺底	C H B W 3.0	2－C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o i 明灰色	

第8表　出土土器観察表

SD－01 (5)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－27 41	広口壺	C 12.0 H 15.2 B W 15.6	A a	ミガキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒褐色	
PL－27 42	長頸壺	C 9.4 H 18.2 B 5.0 W 14.6	a	—	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－27 43	鉢	C 11.6 H 6.7 B 4.2 W		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ (3 cm)	o i 淡褐色	
PL－27 44	鉢底	C H B 3.8 W	1－B－c	指圧痕 ナデ Ⅱ	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL－27 45	鉢底	C H B 4.5 W	1－B	指圧痕 ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 明灰色	
PL－27 46	鉢	C 33.8 (F) H B W		ミガキ	ナデ Ⅰ	o i 暗灰色	

第9表　出土土器観察表

南側側溝内 (1)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−27 / 1	甕	C 19.0 H B W	I−c	—	—	o i 淡赤褐色	
PL−27 / 2	高坏	C 25.4 H B W		ミガキ	ミガキ	o i 淡赤褐色	
PL−27 / 3	高坏	C 24.0 (F) H B W	D_2 b	ミガキ	ミガキ	o i 淡赤褐色	
PL−27 / 4	高坏	C H B 12.0 (F) W	5−B	ミガキ	ミガキ ナデI	o i 淡赤褐色	
PL−27 / 5	高坏	C H B — W	4−B	ミガキ	ナデI	o i 暗褐色	
PL−27 / 6	高坏	C H B — W	4−A−c	ミガキ	ナデI	o i 淡褐色	
PL−27 / 7	高坏	C H B — W	4−B	ミガキ	ナデI	o i 淡褐色	
PL−27 / 8	高坏	C H B — W	4−B	ミガキ	ナデI	o i 淡褐色	
PL−27 / 9	高坏	C H B 13.0 W	4−B−c	ナデI ミガキ	ナデI	o i 淡褐色	
PL−27 / 10	高坏	C H B — W	1−A	ミガキ	ナデI	o i 淡褐色	

第10表 出土土器観察表

南側側溝内 (2)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－27 11	高坏裾	C H B W 9.0		ミガキ	ナデ I	o i 赤褐色	
PL－27 12	高坏	C H B W 13.2（F）	4－B	ミガキ	シボリ目 ナデ I	o i 淡褐色	
PL－27 13	高坏	C H B W 13.8（F）	4－B	ミガキ	ナデ I	o i 暗褐色	
PL－28 14	広口壺	C H B W 13.8	c b	—	—	o i 淡褐色	
PL－28 15	広口壺	C H B W 14.4	c b	ハケ	—	o i 淡褐色	
PL－28 16	広口壺	C H B W 10.2	c b	突帯＋キザシ ハケ	ナデ I	o i 淡赤褐色	
PL－28 17	広口壺	C H B W 21.2	B b	ミガキ	ミガキ ナデ II	o i 淡褐色	
PL－28 18	甕	C H B W —	Ⅲ－4	タタキ	ナデ I	o i 明褐色	
PL－28 19	鉢	C H B W 13.2 6.5 4.0	1－B	タタキ	ナデ I	o 明褐色 i 黄褐色	
PL－28 20	土錘	C H B W —	—	—	—	o i 明灰色	

第11表　出土土器観察表

南側側溝内 (3)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－28 / 21	器台	CHBW —		ミガキ	ナデ I	o 明灰色 i	
PL－28 / 22	手焙形土器	CHBW —		ナデ I	ナデ I	o 明褐色 i	
PL－28 / 23	壺底	CHBW 4.6	1－C	ナデ I	ナデ I	o スス付着 i 淡褐色	
PL－28 / 24	甕底	CHBW 4.4	3－C	ミガキ	ナデ I	o 明灰色 i	
PL－28 / 25	壺底	CHBW 2.8	3－C	ミガキ	ナデ I	o 黒灰色 i 淡褐色	
PL－28 / 26	甕底	CHBW 4.0（F）	2－A	タタキ	ナデ I	o 暗褐色 i 明褐色	
PL－28 / 27	壺底	CHBW 4.7	1－C	ミガキ	ケズリ B	o 淡褐色 i	
PL－28 / 28	甕底	CHBW 4.6	2－C	タタキ	ナデ I	o 明褐色 i 赤褐色	
PL－28 / 29	壺底	CHBW 4.0	2－A	ナデ II	ナデ I	o 淡黄褐色 i	
PL－28 / 30	鉢底	CHBW 4.4	1－B－c	指圧痕	ナデ I	o 淡褐色 i	

第12表　出土土器観察表

南側側溝内 (4)

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−28 / 31	甕底	C H B 4.5 W	2−B	タタキ	ケズリB	o 赤褐色 i 明褐色	
PL−28 / 32	甕底	C H B 4.6 W	1−C	ナデI	ナデI	o 淡褐色 i 明褐色	
PL−28 / 33	甕底	C H B 4.1 W	1−A	タタキ	ナデI	o 赤褐色 i 淡褐色	
PL−28 / 34	二重口縁壺	C 16.6 H 20.7 B 5.1 W 22.2		ミガキ	ナデI	o 淡褐色 i	

第13表　出土土器観察表

落込み状遺構

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−29 / 1	台付壺	CHBW —		ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−29 / 2	台付壺	CHBW —		不明	不明	o i 明褐色	
PL−29 / 3	台付壺	CHBW 10.8（F）		ナデ Ⅱ	ハケ ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL−29 / 4	二重口縁壺	CHBW 15.0（F）	a	ナデ Ⅱ	ミガキ	o i 淡褐色	
PL−29 / 5	広口壺	CHBW 14.6（F）	A b	ハケ	—	o i 淡褐色	
PL−29 / 6	広口壺	CHBW 13.8（F）	D c	—	—	o i 淡褐色	
PL−29 / 7	広口壺	CHBW 14.4（F）	F ? c	ミガキ	ミガキ	o i 明褐色	
PL−29 / 8	短頭壺	CHBW 11.6（F）	a	不明	ミガキ	o i 淡褐色	
PL−29 / 9	広口壺	CHBW 16.0（F）	A d	不明	不明	o i 淡褐色	
PL−29 / 10	短頭壺	CHBW 14.6（F）	b	ミガキ	ミガキ ナデ Ⅰ	o 明褐色 i 淡褐色	

第14表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－29 11	広口壺	C 18.2（F） H B W	B b	キザミ目	—	o 淡灰褐色 i	
PL－29 12	細頸壺？	C H B 2.8 W 17.6	2－C	ミガキ	ナデ Ⅱ	o 淡灰褐色 i 黒灰色	
PL－29 13	広口壺	C 14.4 H 23.5 B 4.8 W 20.8	C－6 1－A	ハケ（8㎝）	指圧痕 ハケ（10㎝）	o 明灰色 i	
PL－30 14	甕	C 18.4（F） H B W	b	—	—	o 淡灰色 i	
PL－30 15	甕	C 16.0（F） H B W	d	—	—	o 明褐色 i	
PL－30 16	甕	C 19.6（F） H B W	c	—	—	o 淡褐色 i	
PL－30 17	甕	C 16.4（F） H B W	c	—	—	o 淡褐色 i	
PL－30 18	甕	C 15.0（F） H B W	b	—	—	o 淡赤褐色 i	
PL－30 19	甕	C 16.5（F） H B W	d	—	—	o 淡褐色 i	
PL－30 20	甕	C 12.8（F） H B W	a	—	—	o 淡灰色 i	

第15表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−30 / 21	甕	C 11.0 (F) H B W	a	—	—	o 淡褐色 i	
PL−30 / 22	甕	C 17.0 (F) H B W	a	—	—	o 明褐色 i	
PL−30 / 23	甕	C 14.3 (F) H B W	d	—	—	o 暗褐色 i	
PL−30 / 24	甕	C 13.8 (F) H B W	d	—	—	o 淡灰褐色 i	
PL−30 / 25	甕	C 16.2 (F) H B W	c	—	—	o 淡灰褐色 i	
PL−30 / 26	甕	C 16.0 (F) H B W	c	—	—	o 淡赤褐色 i 淡灰褐色	
PL−30 / 27	甕	C 16.4 (F) H B W	a	—	—	o 淡褐色 i	
PL−30 / 28	甕	C 18.4 (F) H B W	a	不明	—	o 淡褐色 i	
PL−30 / 29	甕	C 16.4 (F) H B W	a	—	—	o 明褐色 i	
PL−30 / 30	甕	C 17.0 (F) H B W	d	—	—	o 淡褐色 i	

第16表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－30 / 31	甕	C 15.4（F） H B W	a	—	—	o 暗灰色 i 淡灰色	
PL－30 / 32	甕	C 17.6（F） H B W	a	—	—	o 暗灰色 i 淡赤褐色	
PL－30 / 33	甕	C 18.0（F） H B W	d	キザミ目	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－30 / 34	甕	C 15.2（F） H B W	b	—	—	o i 淡褐色	
PL－30 / 35	甕	C 19.0（F） H B W	1－b	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－30 / 36	甕	C 14.8（F） H B W	1－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－30 / 37	甕	C 15.0（F） H B W	1－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－30 / 38	甕	C 15.0（F） H B W	1－a	—	—	o i 淡褐色	
PL－31 / 39	甕	C 13.8 H B W	Ⅰ－2－a	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－31 / 40	甕	C 15.0（F） H B W	1－a	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	

第17表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−31 / 41	甕	C 15.6 (F) H B W	Ⅰ−1−a	タタキ	指圧痕	o 淡褐色 i 淡灰色	
PL−31 / 42	甕	C 15.0 (F) H B W	Ⅱ−1−a	タタキ	ナデⅡ	o i 淡灰褐色	
PL−31 / 43	甕	C 16.0 (F) H B W	1−d	タタキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL−31 / 44	甕	C 15.4 (F) H B W	Ⅰ−1−a	ナデⅡ	ナデⅡ	o i 淡灰色	
PL−31 / 45	甕	C 14.0 (F) H B W	Ⅱ−1−a	タタキ	ナデⅡ	o 淡褐色 i 明褐色	
PL−31 / 46	甕	C 16.6 (F) H B W	Ⅰ−1−b	タタキ	ナデⅠ	o i 淡灰褐色	
PL−31 / 47	甕	C 19.2 (F) H B W	1−b	—	—	o i 淡褐色	
PL−31 / 48	甕	C 15.6 (F) H B W	Ⅱ−1−a	タタキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL−31 / 49	甕	C 16.0 (F) H B W	Ⅲ−1−b	タタキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL−31 / 50	甕	C 10.0 (F) H B W	Ⅰ−1−a	タタキ	ナデⅡ	o i 淡灰褐色	

第18表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－31 / 51	甕	C 13.0 H B W	Ⅲ－4－c	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL－31 / 52	甕	C 15.0（F） H B W	1－c	—	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL－31 / 53	甕	C 15.0（F） H B W	1－b	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL－31 / 54	甕	C 14.4（F） H B W	1－b	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL－31 / 55	甕	C 13.6（F） H B W	1－b	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL－31 / 56	甕	C 16.0（F） H B W	1－b	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL－31 / 57	甕	C 13.8（F） H B W	1－b	タタキ	ハケ	o 淡灰色 i	
PL－31 / 58	甕	C 13.6（F） H B W	Ⅲ－1－a	タタキ	ナデ Ⅰ	o 淡灰色 i 淡褐色	
PL－31 / 59	甕	C 12.6（F） H B W	Ⅰ－3－d	タタキ	ナデ Ⅰ	o 淡灰色 i	
PL－32 / 60	甕	C 12.0（F） H B W	ⅡC－2－c	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	

第19表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−32 / 61	甕	C 15.0 (F) H B W	ⅠB−1−a	ハケ	ハケ	o スス付着 i 淡灰褐色	
PL−32 / 62	甕	C 14.6 (F) H B W	ⅠC−1−a	タタキ (30／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−32 / 63	甕	C 15.0 (F) H B W	ⅠC−1−d	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL−32 / 64	甕	C 14.6 (F) H B W	ⅠC−1−a	タタキ (30／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡赤褐色	
PL−32 / 65	甕	C 17.2 H B W	ⅡB−1−b	タタキ (33本／10cm)	ケズリ A	o i 暗褐色	
PL−32 / 66	甕	C 14.8 (F) H B W	ⅡB−1−b	タタキ (28本／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−32 / 67	甕	C 18.0 (F) H B W	ⅠC−1−c	タタキ	ナデ Ⅰ	o i 淡灰褐色	
PL−32 / 68	甕	C 15.0 (F) H B W	ⅢB−1−b	タタキ (20／10cm)	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL−32 / 69	甕	C 15.2 (F) H B W	ⅡB−1−b	タタキ (30／10cm)	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−32 / 70	甕	C 15.8 (F) H B W	ⅡB−3−b	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 淡褐色	

第20表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－32 / 71	甕	C 15.4（F） H B W	ＩC－1－d	タタキ（25／10cm）	ナデ ハケ	o 淡茶灰色 i 淡灰褐色	
PL－32 / 72	甕	C 18.2（F） H B W	ⅡB－1－d	タタキ（30／10cm）	ナデ	o i 淡灰褐色	
PL－32 / 73	甕	C 17.2（F） H B W	ＩB－3－d	タタキ（18／10cm）	ハケ	o i 淡灰褐色	
PL－32 / 74	甕	C 17.0（F） H B W	ⅡB－1－a	タタキ（30／10cm）	ナデ	o i 淡褐色	
PL－32 / 75	甕	C 17.0（F） H B W	ＩC－3－c	タタキ（26／10cm）	ナデ	o i 明褐色	
PL－33 / 76	甕	C 15.2（F） H B W	ＩC－1－a	タタキ（30／10cm）	ナデ	o i 灰褐色	
PL－33 / 77	甕	C 14.6（F） H B W	ＩC－1－d	タタキ（22本／10cm）	ナデ	o i 淡褐色	
PL－33 / 78	甕	C 16.0（F） H B W	ＩC－1－b	タタキ（36本／10cm）	ナデ	o i 明褐色	
PL－33 / 79	甕	C 15.7 H B W	ＩC－1－b	タタキ（30／10cm）	ナデ	o i 淡灰褐色	
PL－33 / 80	甕	C 15.2（F） H B W	ＩC－1－a	タタキ（26／10cm）	ナデ	o i 淡褐色	

第21表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－33 / 81	甕	C 14.0（F） H B W 16.7	ⅠC－1－b	タタキ（30本／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－33 / 82	甕	C 17.0（F） H B W	ⅠC－1－b	タタキ	ハケ（5本／1cm）	o i 淡灰色	
PL－33 / 83	甕	C 12.0（F） H B W	ⅢB－4－a	タタキ（48本／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 暗褐色	
PL－33 / 84	甕	C 14.8（F） H B W 14.2（F）	ⅡB－1－d	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－33 / 85	甕	C 17.6（F） H B W	ⅠC－1－a	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－33 / 86	甕	C 13.4（F） H B W	ⅠA－5－a	タタキ（22／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL－33 / 87	甕	C 14.0（F） H B W 16.4（F）	ⅠC－1－a	タタキ（23／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－34 / 88	甕	C 18.8 H B W	ⅠC－1－d	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－34 / 89	甕	C 14.3 H B W 15.8	ⅡB－1－c	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－34 / 90	甕	C 15.4（F） H B W	ⅡB－1－a	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡赤褐色	

第22表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－34 91	甕	C H B 5.1 W 17.6（F）	B 2－A－a	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ ケズリ B	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－34 92	甕	C H B 4.0 W 16.4（F）	C 2－c	タタキ（24／10cm）	ナデ Ⅱ ナデ Ⅰ	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－34 93	甕	C H B 5.0 W 17.4（F）	B 2－c	タタキ(23／10cm)	ナデ Ⅱ ケズリ B	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－34 94	甕	C H B 5.4 W 21.0（F）	B 1－c	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	外面スス付着
PL－35 95	甕	C 14.2（F） H B 4.8 W 17.9	Ⅰ6－1－a 3－a	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 赤褐色	
PL－35 96	甕	C 15.2（F） H 19.7 B 4.6 W 17.0（F）	ⅠB－1－d 1－A	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	外面スス付着
PL－35 97	甕	C 13.6（F） H 19.0 B 4.8 W 16.7	1C－1－c 2－A	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－35 98	甕	C H B 4.0 W 16.4（F）	C 3－C	タタキ（24／10cm）	ナデ Ⅱ ケズリ B	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－35 99	甕	C 14.7 H 19.5 B 5.3 W 16.9	ⅠC－1－d 2－A	タタキ（22／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－35 100	甕	C 19.4（F） H 24.4 B 5.2 W 21.6	ⅠC－1－d 2－A	タタキ（21／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	

第23表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－36 101	甕	C 18.8（F） H B 4.2 W	ⅠC－1－a 2－A	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－36 102	甕	C 14.3（F） H 18.5 B 4.8 W 16.5	ⅠB－1－b 2－A	タタキ（18／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－36 103	甕	C 14.9 H 18.0 B 4.5 W 15.8	ⅡA－1－d 3－A	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ ケズリ B	o i 暗赤褐色	
PL－36 104	甕	C 16.0（F） H 24.0（F） B 4.4 W 20.3（F）	ⅠB－1－b 2－c	タタキ（15／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL－36 105	甕	C 19.0（F） H 28.4 B 4.6 W 23.2	ⅠB－1－b 2－c	タタキ（24／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 淡灰褐色	
PL－37 106	甕	C H B 4.2 W	A 2－c	タタキ（23本／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	外面スス付着
PL－37 107	甕	C H B W	ⅡB－1－a 2－A	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－37 108	高坏坏部	C 19.0（F） H B W		—	—	o i 淡褐色	
PL－37 109	高坏坏部	C 18.0（F） H B W		—	—	o i 淡褐色	
PL－37 210	高坏坏部	C 19.2（F） H B W		ミガキ	ミガキ	o i 淡灰褐色	

第24表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－37 111	高坏坏部	C 12.0（F） H B W	B	ミガキ	ミガキ	o 淡褐色 i	
PL－37 112	高坏坏部	C 21.8（F） H B W		—	ミガキ	o 淡灰褐色 i 淡褐色	
PL－37 113	高坏坏部	C 28.4（F） H B W	D_2	ミガキ	ミガキ	o 淡赤褐色 i	
PL－37 114	高坏坏部	C 18.4 H B W	D_2	ミガキ	ミガキ	o 灰褐色 i	
PL－37 115	高坏坏部	C 20.2（F） H B W	B	ミガキ	ミガキ	o 明褐色 i	
PL－37 116	高坏坏部	C 20.6（F） H B W	2－B－a	ミガキ	ミガキ	o 淡褐色 i	
PL－37 117	高坏	C H B W	A	ミガキ	ミガキ	o 淡褐色 i	
PL－38 118	高坏	C 12.4（F） H 8.7 B 9.4（F） W	A 4－B－a	ミガキ	ミガキ	o 暗褐色 i	三方孔有す
PL－38 119	高坏	C H B W	4－B－a	ミガキ	ミガキ	o 淡灰褐色 i	
PL－38 120	高坏	C 12.9 H 14.5 B 15.4 W	G 3－A－c	ミガキ	ミガキ	o 淡灰褐色 i	

第25表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－38 121	高坏裾	C H B W 15.0（F）		ミガキ	ナデⅠ	o i 明褐色	
PL－38 122	高坏裾	C H B W 18.0（F）		ミガキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL－38 123	高坏裾	C H B W 17.8（F）		不明	不明	o i 淡褐色	
PL－38 124	高坏	C H B W 20.4（F）	A － －c	ミガキ	ミガキ	o i 淡灰褐色	
PL－38 125	高坏	C 17.7 H 11.6 B 11.8 W	A 5－b－a	ミガキ	ミガキ ハケ（14本／2.2cm）	o i 灰褐色	
PL－38 126	高坏	C 24.4（F） H 15.6 B 14.2（F） W	B 4－A	ミガキ	ミガキ シボリ目	o i 淡褐色	四方孔か？
PL－38 127	高坏脚	C H B 10.9 W	3－A－b	ミガキ	ナデⅡ	o i 明褐色	三方孔有す
PL－38 128	高坏脚	C H B W	3－A－b	ミガキ	ミガキ ナデⅡ	o i 灰褐色	
PL－39 129	高坏脚	C H B W	－B－c	ミガキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL－39 130	高坏脚	C H B W	2－B－c	ミガキ	ナデⅡ	o i 淡褐色	

第26表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－39 / 131	高坏脚	C H B W	4－A	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－39 / 132	高坏脚	C H B W	A－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 133	高坏脚	C H B W	2－A－b	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－39 / 134	高坏脚	C H B W	4	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 135	高坏脚	C H B W	5－A－a	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 136	高坏脚	C H B W	4－A－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－39 / 137	高坏脚	C H B W	5－B－c	ミガキ	ハケ	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 138	高坏脚	C H B W	4－B－c	ミガキ	シボリ目	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 139	高坏脚	C H B W	A－c	不明	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 140	高坏脚	C H B W	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	

第27表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－39 / 141	高坏脚	CHBW	4－A－c	ミガキ	シボリ目	o i 淡褐色	
PL－39 / 142	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 143	高坏脚	CHBW	2－A	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 144	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 145	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 146	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	シボリ目	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 147	高坏脚	CHBW	4－B－c	ミガキ	シボリ目	o i 赤褐色	
PL－39 / 148	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 暗赤褐色	
PL－39 / 149	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 暗赤褐色	
PL－39 / 150	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	

第28表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－39 / 151	高坏脚	C H B W	4－A－c	ナデ Ⅱ	シボリ目	o i 淡灰褐色	
PL－39 / 152	器台	C H B W		ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 赤褐色	四方孔か？
PL－39 / 153	器台	C 18.2（F） H B W		ミガキ	ミガキ ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	柱状部に五方孔有す 裾部に五方孔か？
PL－39 / 154	鉢	C 13.2 H B W	a	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－39 / 155	鉢	C 15.0（F） H B W	a	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－40 / 156	鉢	C 11.5 H B W		ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－40 / 157	鉢	C 11.6（F） H 6.0 B 4.2 W	3－A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－40 / 158	鉢	C 12.0（F） H 7.3 B 4.1 W	1－C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－40 / 159	鉢	C 11.6（F） H 5.3 B 4.2 W	2－A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 黒灰色	
PL－40 / 160	鉢	C 12.2（F） H 6.0 B 4.3 W	2－A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	

第29表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−40 / 161	鉢	C 13.0（F） H 8.4 B 5.6（F） W	2−	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−40 / 162	鉢	C 19.4（F） H 9.6 B 5.9 W	3−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡灰褐色 i	
PL−40 / 163	鉢	C 18.4（F） H 10.4 B 5.0 W	2−C	ミガキ	ミガキ	o 淡褐色 i	
PL−40 / 164	壺底	C H B 3.7 W	1−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡赤褐色 i 灰褐色	
PL−40 / 165	壺底	C H B 5.0（F） W	3−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	
PL−40 / 166	壺底	C H B 5.2（F） W	1−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 明灰色	
PL−40 / 167	壺底	C H B 4.8 W	2−C	ミガキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−40 / 168	壺底	C H B 4.1 W	3−C	ミガキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−40 / 169	壺底	C H B 4.8 W	2−A	ナデ Ⅲ	ナデ Ⅰ	o 淡赤褐色 i	
PL−40 / 170	壺底	C H B 5.0（F） W	2−C	ミガキ	ナデ Ⅱ	o 褐色 i 黒色	

第30表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−40 / 171	壺底	CHBW 4.0	3−C	ミガキ	ナデ I	o 淡褐色 i 黒色	
PL−41 / 172	壺底	CHBW 3.0	3−A	ミガキ	ナデ II	o i 暗褐色	
PL−41 / 173	壺底	CHBW 4.8（F）	1−C	ナデ II	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−41 / 174	壺底	CHBW 4.5	2−C	ナデ II	ナデ II	o 暗褐色 i 明褐色	
PL−41 / 175	壺底	CHBW 4.6（F）	2−A	ナデ II	ナデ II	o 暗褐色 i 明褐色	
PL−41 / 176	壺底	CHBW 3.8	3−C	ナデ II	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−41 / 177	壺底	CHBW 4.0	2−B	ミガキ	ナデ II	o i 淡灰褐色	
PL−41 / 178	壺底	CHBW 4.4	2−C	ナデ II	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−41 / 179	壺底	CHBW 4.7	1−A	ナデ II	ナデ II	o i 明褐色	
PL−41 / 180	壺底	CHBW 4.8（F）	1−C	ナデ II	ケズリ B	o i 淡褐色	

第31表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 181	壺底	CHBW 4.0（F）	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−41 / 182	壺底	CHBW 4.0	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i	
PL−41 / 183	壺底	CHBW 3.6（F）	1−C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 暗褐色 i 淡褐色	
PL−41 / 184	壺底	CHBW 4.6（F）	3−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−41 / 185	壺底	CHBW 4.0	3−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 黒灰色 i	
PL−41 / 186	壺底	CHBW 4.0	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−41 / 187	壺底	CHBW 2.8	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 淡灰色	
PL−41 / 188	壺底	CHBW 4.0	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−41 / 189	壺底	CHBW 4.4	1−C	ミガキ	ケズリ B	o 淡褐色 i	
PL−41 / 190	壺底	CHBW 4.4	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	

第32表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 191	壺底	CHBW 4.4（F）	2−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i	
PL−41 / 192	壺底	CHBW 4.6（F）	3−A−a	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡灰褐色 i 黒色	
PL−41 / 193	壺底	CHBW 4.2（F）	2−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−41 / 194	壺底	CHBW 4.6（F）	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 195	壺底	CHBW 4.7	2−A	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 淡褐色 i	
PL−41 / 196	壺底	CHBW 4.0（F）	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−41 / 197	壺底	CHBW 5.5	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−41 / 198	壺底	CHBW 5.4	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−41 / 199	壺底	CHBW 4.4	2−C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 黒灰色 i 淡褐色	底部穿孔
PL−41 / 200	壺底	CHBW 4.9	2−A−a	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 赤褐色 i 黒灰色	

第33表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 201	壺底	CHBW 2.8	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−41 / 202	甕底	CHBW 4.6（F）	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 203	甕底	CHBW 5.0	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡赤褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 204	甕底	CHBW 3.8	2−A	タタキ（3.5／10cm）	ケズリ B	o 淡褐色 i	
PL−41 / 205	甕底	CHBW 4.6（F）	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−41 / 206	甕底	CHBW 4.0	1−A	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−41 / 207	甕底	CHBW 4.0	3−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 明灰色	
PL−41 / 208	甕底	CHBW 4.6	2−C	タタキ	ケズリ B	o 暗褐色 i	
PL−41 / 209	甕底	CHBW 4.6（F）	3−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−41 / 210	甕底	CHBW 4.2（F）	2−C	タタキ	ケズリ B	o 明褐色 i	

第34表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 211	甕底	CHBW 4.0	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 黒灰色 i 明褐色	
PL−41 / 212	甕底	CHBW 3.4	2−C	タタキ（30／10cm）	ケズリ B	o 赤褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 213	甕底	CHBW 4.6	2−A	タタキ（2.5／10cm）	ケズリ B	o 淡褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 214	甕底	CHBW 4.0	2−	タタキ（40／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−41 / 215	甕底	CHBW 4.2	1−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−41 / 216	甕底	CHBW 4.2	3−A−a	タタキ（30／10cm）	ケズリ B	o i 明褐色	
PL−41 / 217	甕底	CHBW 4.5	2−A	タタキ（30／10cm）	ケズリ B	o i 淡褐色	
PL−41 / 218	甕底	CHBW 4.0（F）	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−41 / 219	甕底	CHBW 4.6	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	
PL−41 / 220	甕底	CHBW 4.7	1−C	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	

第35表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 221	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 222	甕底	CHBW 4.4	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL−41 / 223	甕底	CHBW 4.1	2−A	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 淡灰褐色	
PL−41 / 224	甕底	CHBW 4.4	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 明褐色	
PL−41 / 225	甕底	CHBW 4.8（F）	2−C	タタキ（27／10cm）	ケズリ B	o i 淡褐色	
PL−41 / 226	甕底	CHBW 4.0（F）	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡赤褐色	
PL−41 / 227	甕底	CHBW 4.0	2−C	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗赤褐色 i 黒褐色	
PL−41 / 228	甕底	CHBW 3.8	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	
PL−41 / 229	甕底	CHBW 4.6（F）	2−A	タタキ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 明灰色	
PL−41 / 230	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A−a	タタキ（25／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	

第36表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−41 / 231	甕底	CHBW 4.6	1−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 黒灰色 i	
PL−41 / 232	甕底	CHBW 4.0（F）	3−C	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i	
PL−41 / 233	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡赤褐色 i 暗褐色	
PL−41 / 234	甕底	CHBW 5.2	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗灰色 i 明灰色	
PL−41 / 235	甕底	CHBW 4.8（F）	2−A−a	タタキ（28／10cm）	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−41 / 236	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A	タタキ（40／10cm）	ナデ Ⅰ	o 赤褐色 i 明褐色	
PL−41 / 237	甕底	CHBW 4.2（F）	2−A	タタキ（25／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明灰色	
PL−41 / 238	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A−a	タタキ（30／10cm）	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−41 / 239	甕底	CHBW 4.2	2−A	タタキ	ケズリ B	o 暗褐色 i	
PL−41 / 240	甕底	CHBW 5.2	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	

第37表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－42 / 241	甕底	CHBW 4.0（F）	2－A	タタキ（23／10cm）	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 暗褐色	
PL－42 / 242	甕底	CHBW 4.0	1－A	タタキ	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－42 / 243	甕底	CHBW 4.2（F）	2－C	タタキ（23／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－42 / 244	甕底	CHBW 4.8（F）	2－A－c	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 黒灰色	
PL－42 / 245	甕底	CHBW 4.0（F）	3－A－a	タタキ（35／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－42 / 246	甕底	CHBW 5.0	2－C	タタキ	ナデ Ⅰ	o 黒褐色 i 淡灰褐色	
PL－42 / 247	甕底	CHBW 5.0	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－42 / 248	甕底	CHBW 4.0	3－A	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－42 / 249	甕底	CHBW 5.2	2－A－c	タタキ（22／10cm）	ケズリ B	o 赤褐色 i 明褐色	
PL－42 / 250	甕底	CHBW 4.8（F）	3－A－c	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	

第38表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－42 / 251	甕底	CHBW 4.4	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	
PL－42 / 252	甕底	CHBW 5.0（F）	2－C	タタキ（20／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 灰褐色	
PL－42 / 253	甕底	CHBW 5.3	2－A－a	タタキ	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－42 / 254	甕底	CHBW 4.8	2－A	タタキ（20／10cm）	ケズリ B	o 淡赤褐色 i 明褐色	
PL－42 / 255	甕底	CHBW 5.2	2－C	タタキ（23／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明褐色	
PL－42 / 256	甕底	CHBW 4.0	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－42 / 257	甕底	CHBW 4.5	2－A	タタキ	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 黒灰色	
PL－42 / 258	甕底	CHBW 4.7	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o スス付着 i 明褐色	
PL－42 / 259	甕底	CHBW 5.0（F）	2－C	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o 暗赤褐色 i 黒灰色	
PL－42 / 260	甕底	CHBW 4.6	2－A	タタキ（23／10cm）	ハケ	o 淡褐色 i 黒灰色	

第39表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−42 / 261	甕底	CHBW 4.5	1−A	タタキ	ナデ I	o 淡褐色 i 黒色	
PL−42 / 262	甕底	CHBW 3.8	2−A	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o 暗褐色 i 明褐色	
PL−42 / 263	甕底	CHBW 4.2（F）	3−C	タタキ（35／10cm）	ナデ II	o 暗褐色 i 淡褐色	
PL−42 / 264	甕底	CHBW 4.4（F）	3−C	タタキ（20／10cm）	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−42 / 265	甕底	CHBW 3.5	1−C	タタキ（30／10cm）	ナデ II	o i 明褐色	
PL−42 / 266	甕底	CHBW 4.1	2−C	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o i 淡褐色	
PL−42 / 267	甕底	CHBW 5.0（F）	3−C	タタキ（23／10cm）	ナデ II	o 暗褐色 i 黒灰色	
PL−42 / 268	甕底	CHBW 4.0（F）	2−A	タタキ	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−42 / 269	甕底	CHBW 5.6	2−C	タタキ	ナデ II	o 赤褐色 i 明灰色	
PL−42 / 270	甕底	CHBW 4.2（F）	2−C	タタキ	ナデ II	o i 明褐色	

第40表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－43 271	甕底	C H B 4.4 W	1－C	タタキ（25／10cm）	ナデ Ⅰ	o i 暗褐色	
PL－43 272	鉢底	C H B 5.0 W	1－B	指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－43 273	鉢底	C H B 4.5 W	1－A	指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－43 274	鉢底	C H B 4.0 W	2－B	指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－43 275	鉢底	C H B 5.4 W	1－B	タタキ 指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－43 276	ミニチュア鉢	C 3.3 H 2.1 B W		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－43 277	ミニチュア鉢	C 6.0（F） H 5.5 B 2.0 W		ミガキ	ミガキ	o i 淡赤褐色	
PL－43 278	ミニチュア 高坏？	C 12.2（F） H B W		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 暗褐色	
PL－43 279	ミニチュア壺	C 9.6（F） H B 3.5 W 10.0（F）	2－B	ミガキ	ナデ Ⅰ	o i 淡灰褐色	
PL－43 280	ミニチュア壺	C 10.2 H 9.5 B 4.6 W 7.3	2－B－a	指圧痕	ハケ（14本／6cm） ケズリ B	o i 淡褐色	

第41表　出土土器観察表

落ち込み・SX－01・0－5E区土器集中部

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－43 / 281	手焙形土器	C H B W		ハケ（16／3.3cm） キザミ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰褐色	
PL－43 / 282	土錘	C H B W		—	—	o i 淡褐色	

SX－01

PL－43 / 1	甕底	C H B W 5.2（F）	1－C	タタキ（25／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－43 / 2	甕底	C H B W 4.1	1－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 暗灰色	

0－5E区土器集中部

PL－44 / 1	台付壺	C 8.8 H B W 8.1（F）		ハケ（8cm） ミガキ	ハケ（8cm）	o i 明褐色	
PL－44 / 2	脚台	C H B W 8.2		ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－44 / 3	甕底	C H B W 5.2（F）	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－44 / 4	甕	C H B W 4.8	C 1－C	タタキ（20／10cm）	ハケ（12cm）	o i 明灰色	

第42表　出土土器観察表

0－5E区土器集中部・SK－01　北側

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－44 / 5	タコ壺	C 3.4（F） H 10.1 B W 6.6		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 灰白色	

SK－01　北側

PL－44 / 1	鉢	C 11.0 H 7.6 B 4.3 W	1－B－c	タタキ（45／10cm）-ナデⅡ 指圧痕	ハケ（6 cm） ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－44 / 2	ミニチュア壺	C 10.2 H 7.9 B 4.3 W	2－B－c	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－44 / 3	台付壺	C H B W		ハケ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	

第43表　出土土器観察表

後期包含層

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－45 / 1	二重口縁壺	C 11.4（F） H B W	b	—	不明	o i 淡赤褐色	
PL－45 / 2	短頸壺	C 11.8 H B W	a	ミガキ	—	o i 淡赤褐色	
PL－45 / 3	広口壺	C 13.4（F） H B W	c b	不明	不明	o i 明褐色	
PL－45 / 4	広口壺	C 16.0（F） H B W	B b	—	—	o i 淡赤褐色	
PL－45 / 5	広口壺	C 18.0（F） H B W	D b	不明	不明	o i 淡褐色	
PL－45 / 6	広口壺	C 16.4（F） H B W	D d	ミガキ	ミガキ	o i 暗褐色	
PL－45 / 7	広口壺	C 11.4（F） H B W	C a	ナデⅡ	ナデⅠ	o i 淡赤褐色	
PL－45 / 8	甕	C 15.6（F） H B W	ⅠC－1－d	タタキ	指圧痕 ナデⅡ	o i 明褐色	
PL－45 / 9	甕	C 23.0（F） H B W	1－b	不明	不明	o i 明褐色	
PL－45 / 10	甕	C 13.6（F） H B W	b	—	—	o i 暗褐色	

第44表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－45 / 11	甕	C 14.2（F） H B W	c	—	—	o i 淡褐色	
PL－45 / 12	甕	C 14.0（F） H B W	1－a	タタキ（24／10cm）	ナデⅡ	o i 淡赤褐色	
PL－45 / 13	甕	C 16.4（F） H B W	b	—	—	o i 明褐色	
PL－45 / 14	甕	C 16.0（F） H B W	d	—	—	o i 暗褐色	
PL－45 / 15	甕	C 15.6（F） H B W	3－d	タタキ	ナデⅠ	o i 暗褐色	
PL－45 / 16	甕	C 16.6（F） H B W	Ⅰ－1－C	ナデⅡ	ハケ	o i 淡褐色	
PL－45 / 17	甕	C 14.6（F） H B W	Ⅰ－1－a	タタキ（30／10cm）	ハケ	o i 淡褐色	
PL－45 / 18	甕	C H B 3.4（F） W 14.4（F）	C 1－A	タタキ ナデⅡ（32／10cm）	ナデⅡ	o i 淡褐色	
PL－46 / 19	高坏脚	C H B W	4－A－a	不明	シボリ目	o i 淡褐色	
PL－46 / 20	高坏脚	C H B W	4－A	ミガキ	ナデⅡ	o i 明褐色	

第45表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－46 / 21	高坏脚	CHBW	4－B－c	不明	シボリ目	o i 明褐色	
PL－46 / 22	高坏脚	CHBW	2－B－c	ナデ Ⅱ	不明	o i 赤褐色	
PL－46 / 23	高坏脚	CHBW	4－B	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－46 / 24	高坏脚	CHBW	2－B－c	ナデ Ⅰ	ナデ Ⅱ	o i 明褐色	
PL－46 / 25	高坏脚	CHBW	4－A	ナデ Ⅱ	シボリ目	o i 暗赤褐色	
PL－46 / 26	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－46 / 27	高坏脚	CHBW	2－A	ナデ Ⅰ	シボリ目	o i 明褐色	
PL－46 / 28	高坏脚	CHBW	4－B－c	指圧痕 ナデ Ⅱ	シボリ目	o i 明褐色	
PL－46 / 29	高坏脚	CHBW 15.2（F）	5－B	ミガキ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	四方孔
PL－46 / 30	高坏脚	CHBW	2－B－c	ミガキ	シボリ目 ハケ	o i 暗赤褐色	

第46表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−46 / 31	高坏脚	C H B W	1−A	ナデ II ミガキ	ナデ II	o i 明褐色	
PL−46 / 32	高坏脚	C H B W	4−A−c	指圧痕 ハケ	シボリ目	o i 明褐色	
PL−46 / 33	高坏裾	C H B W 16.0（F）		ナデ II	ナデ II	o i 明褐色	
PL−46 / 34	高坏裾	C H B W 15.4（F）		ナデ II	ナデ II	o i 淡赤褐色	
PL−46 / 35	鉢	C 15.6（F） H B 3.1 W	2−A	ナデ II	ナデ II	o i 淡赤褐色	
PL−46 / 36	鉢	C 10.4（F） H 6.0 B 3.6 W	2−C	ナデ II	ナデ II	o i 淡褐色	
PL−46 / 37	タコ壺	C 5.2 H B W		ナデ II	ナデ II	o i 明灰色	
PL−46 / 38	壺底	C H B 5.0 W	1−C	ナデ II	ナデ II	o i 明灰色	
PL−46 / 39	壺底	C H B 4.4 W	1−C	ナデ II 指圧痕	ケズリ B	o i 淡赤褐色	
PL−46 / 40	壺底	C H B 5.0 W	2−C	ナデ II	ナデ II	o i 明褐色	

第47表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−46 / 41	壺底	CHBW 3.2	3−B	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i	
PL−46 / 42	壺底	CHBW 5.0	1−A	ナデ Ⅱ 指圧痕	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−46 / 43	壺底	CHBW 5.0	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−46 / 44	壺底	CHBW 4.6	2−A	ミガキ	ケズリ B	o 暗褐色 i 淡褐色	
PL−46 / 45	壺底	CHBW 4.5	2−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o スス付着 i 明灰色	
PL−46 / 46	壺底	CHBW 4.0	2−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−46 / 47	壺底	CHBW 4.9	2−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−46 / 48	壺底	CHBW 3.8（F）	2−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅰ	o 明灰色 i	
PL−46 / 49	壺底	CHBW 4.7	1−C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	
PL−46 / 50	壺底	CHBW 4.1	3−A	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅰ	o 明灰色 i	

第48表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－46 / 51	壺底	CHBW 4.7	2－A	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 明灰色 i	
PL－46 / 52	壺底	CHBW 3.8	3－C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 明灰色 i	
PL－46 / 53	壺底	CHBW 4.0	2－C	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 暗褐色 i	
PL－46 / 54	壺底	CHBW 4.0	2－C	ミガキ	ナデ Ⅰ	o 淡褐色 i	
PL－46 / 55	壺底	CHBW 3.8	1－C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL－46 / 56	壺底	CHBW 4.1	1－	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o 明灰色 i	底部穿孔
PL－46 / 57	壺底	CHBW 4.2	2－	ナデ Ⅱ	ケズリ B	o 明灰色 i	底部穿孔
PL－46 / 58	壺底	CHBW 4.9	2－C	ナデ Ⅱ	ナデ Ⅰ	o 淡赤褐色 i	
PL－47 / 59	甕底	CHBW 3.6	2－C	タタキ（25／10cm）	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 淡褐色	
PL－47 / 60	甕底	CHBW 3.9	2－C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	

第49表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−47 / 61	甕底	C H B W 5.1	2−A	タタキ（22／10cm）	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i	
PL−47 / 62	甕底	C H B W 3.8（F）	3−A	タタキ（36／10cm）	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 黒灰色	
PL−47 / 63	甕底	C H B W 4.5	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 淡褐色 i 明褐色	
PL−47 / 64	甕底	C H B W 2.5	2−C	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i	
PL−47 / 65	甕底	C H B W 4.8（F）	2−A	タタキ	ナデ Ⅱ	o 暗褐色 i 明灰色	
PL−47 / 66	甕底	C H B W 4.6	2−A−a	タタキ（32／10cm）	ケズリ A	o 明灰色 i	
PL−47 / 67	甕底	C H B W 4.3	2−A−a	タタキ	ケズリ B	o 暗赤褐色 i	
PL−47 / 68	甕底	C H B W 3.1	2−C−a	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o 赤褐色 i	
PL−47 / 69	甕底	C H B W 4.2	2−C	タタキ	ケズリ B	o 淡褐色 i	
PL−47 / 70	甕底	C H B W 5.0	2−A−c	タタキ（27／10cm）	ナデ Ⅱ	o 淡赤褐色 i	

第50表　出土土器観察表

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－47 / 71	甕底	C H B W 3.6	2－A	タタキ（28／10cm）	ナデ Ⅱ	o 暗赤褐色 i 淡褐色	
PL－47 / 72	甕底	C H B W 5.0	2－C	タタキ	ケズリ B	o i 暗褐色	
PL－47 / 73	甕底	C H B W 5.0	1－C	タタキ（25／10cm）	ケズリ B	o 明褐色 i 淡褐色	
PL－47 / 74	甕底	C H B W 4.2	2－A	タタキ（24／10cm）	ナデ Ⅱ	o i 赤褐色	
PL－47 / 75	鉢底	C H B W 3.8（F）	1－B	指圧痕	ナデ Ⅱ	o 淡赤褐色 i 暗灰色	
PL－47 / 76	鉢底	C H B W 6.0	1－B－c	指圧痕	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL－47 / 77	鉢底	C H B W 4.3	1－C	指圧痕	ナデ Ⅱ	o 赤褐色 i 明灰色	

第51表　出土土器観察表

土器棺・中期包含層

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL－48 1	壺体部	C H B W 68.4（F）		ミガキ	ナデ I 指圧痕	o 明褐色 i 淡灰褐色	土器棺蓋
PL－49 2	壺体部	C H B 6.6（F） W 31.6（F）		櫛描直線文 ミガキ	ハケ－ミガキ	o 暗褐色 i	〃
PL－49 3	甕底	C H B 11.5 W		ミガキ	ナデ II	o 暗褐色 i	〃

SD－02

PL－49 1	甕	C 95.4（F） H B W		廉状文	ナデ II	o 暗褐色 i	刺突文有す

中期包含層

PL－50 1	広口壺	C 15.0（F） H B W		ミガキ 櫛描直線文(7条／1.1cm)	ハケ（12本／1cm）	o 淡褐色 i	
PL－50 2	無頸壺	C 15.0（F） H B W		波状文（6条） ミガキ	ハケ（5本／1cm）	o 明褐色 i	
PL－50 3	甕底	C H B 8.5 W		ミガキ	ミガキ	o 赤褐色 i	
PL－50 4	甕底	C H B 5.4 W		タタキ 指圧痕	ナデ II	o 黒褐色 （スス付着） i 明褐色	

第52表　出土土器観察表

中期包含層

図版	器種	法量	型式	外面	内面	色調	備考
PL−50 / 5	甕底	C H B W 3.6		ケズリ	ナデ Ⅱ	o i 淡灰色	
PL−50 / 6	壺底	C H B W 6.4（F）		ナデ Ⅱ	指圧痕	o 赤褐色 i 暗褐色	
PL−50 / 7	壺底	C H B W 6.8（F）		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−50 / 8	壺底	C H B W 6.0（F）		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅱ	o i 淡褐色	
PL−50 / 9	壺底	C H B W 7.6		ナデ Ⅱ	不明	o i 暗褐色	
PL−50 / 10	甕	C 12.4（F） H B W		ケズリ	ナデ Ⅱ	o 明褐色 i 淡褐色	
PL−50 / 11	甕	C 14.0（F） H B W 15.0（F）		ナデ Ⅱ	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL−50 / 12	甕	C 10.8（F） H B W		ミガキ	ナデ Ⅰ	o i 淡褐色	
PL−50 / 13	甕	C 17.2 H 26.0 B 4.4 W 19.9		タタキ−ケズリ	ナデ Ⅰ	o 暗褐色 i 淡灰褐色	

第53表　出土土器観察表

第6章　出　土　遺　物

第1節　弥生土器の統計報告

1．器種構成（第54表）

亀井遺跡で確認し得た器種は他の弥生後期の遺跡同様、壺、高坏、甕、鉢、器台、手焙形土器である。各器種の累形方法は、底部および底部の残存しない土器でもほぼ完形となり一個体として把握可能な土器の総数で行い、高坏については脚部の残存するものに限って数量化した。

遺跡全体での内訳は、壺100個体、高坏84個体、甕352個体、鉢33個体、器台3個体、手焙形土器2個体、たこ壺2個体で、その総数は575個体である。これから見ても明らかなように甕が最も多く全体の61％を占め、ついで壺、高坏、鉢、器台の順であり、壺と甕とか全体の80％程度を占めるなど、副次的な土器の割合が非常に少ない事が特徴としてあげられよう。ここで、ほぼ同時期の他の遺跡の例をいくつか示し、亀井遺跡との比較を行いたい。

◦会下山遺跡（文献12）

弥生後期の土器760点のうち壺は243点（32％）、高坏232点（31％）、甕215点（28％）、鉢63点（8％）、器台5点（0.8％）の順となり、壺、甕などの日常的な土器が60％、に対し高坏、鉢などの副次的な土器が40％を占める。また、壺と甕との量的な逆転は行われておらず、高坏の増加が目立つ。

◦六条山遺跡（文献10）

壺304点（25.7％）、高坏247点（20.9％）、甕336点（28.4％）、鉢150点（12.7％）、有孔鉢50点（4.3％）、器台90点（7.6％）、手焙形土器5点（0.4％）である。壺、甕は全体の55％であり、甕は壺を凌駕する。高坏は、会下山遺跡ほど多くはないが、鉢、器台の占める割合は、はるかに高い。

◦平等坊岩室遺跡ＳＤ－01（文献13）

壺47点（23.0％）、高坏35点（17.2％）、甕101点（49.5％）、鉢13点（6.4％）、器台6点（2.9％）である。壺と甕が全体の72.5％を占め、また甕が壺をはるかに凌駕するなど亀井遺跡と類似した傾向を示し、高坏、鉢などの副次的な土器の少なさも亀井遺跡と同様である。

◦和爾・森本遺跡ＳＤ－129

壺59点（14.4％）、高坏74点（18.4％）、甕77点（19.4％）、鉢150点（37.5％）、有孔鉢7点（2.7％）、器台26点（6.4％）である。この遺跡は極めて特異な器種構成を示し、日常的な壺、甕が全体の34％にすぎず、副次的な土器の占める割合が非常に高い事にある。特に鉢が37.5％

で最も多い点などは注目される。

◦四分ＳＤ666上層（文献14）

壺101点（24.8%）、高坏60点（8.8%）、甕158点（38.8%）、鉢92点（22.6%）、器台16点（3.9%）である。壺と甕で全体の63%を占め、甕は壺を凌駕する。また高坏は他遺跡と比較すると少なく、鉢の多さが目立つ。

	壷	高　坏	甕	鉢	器　台	手焙形土器	その他	計
ＳＫ－01	3 （ 7　%）	5 （11.6%）	32 （ 72.1%）	4 （ 9.3%）				43 （100%）
ＳＫ－02			1 （100　%）					1 （100%）
ＳＫ－03			1 （100　%）					1 （100%）
ＳＫ－04 ＳＤ－01	18 （20.8%）	22 （25.3%）	38 （ 43.7%）	7 （ 8 %）	1 （1　%）	1 （1　%）		87 （100%）
ＳＸ－01			2 （100　%）					2 （100%）
落　込　み	42 （15.1%）	33 （11.8%）	185 （ 66.4%）	16 （ 5.8%）	2 （0.6%）	1 （0.3%）		279 （100%）
包　含　層	34 （22.0%）	24 （15.6%）	91 （58.8%）	5 （30　%）			1 （ 0.6%）	155 （100%）
そ　の　他	3 （42.8%）		2 （28.6%）	1 （14.3%）			1 （14.3%）	7 （100%）
計	100 （17.4%）	84 （17.5%）	352 （ 61.1%）	33 （ 5.6%）	3 （0.6%）	2 （0.4%）	2 （ 0.4%）	575 （100%）

第54表　器種構成

以上、亀井遺跡出土の土器とほぼ同時期の遺跡、遺構の器種構成を概観してきたが、この時期の器種構成上の特徴としては、壺と甕の量的な逆転が始まる事、副次的な土器の増加があげられよう。しかし、今回得られた資料は、壺と甕の量的逆転は見られるが副次的な土器は依然として少なく、平等坊、岩室遺跡ＳＤ－01とほぼ同様の傾向を示す。しかし、近畿道に伴う調査においては、会下山遺跡とほぼ似かよった結果が得られており、この事は今回の調査地区そのものが遺跡内においてもやや特殊な空間であったとも想定されるのである。

（１）　壺の形式構成（第55表）

壺は総数100点を数えるが、大半が形式不明である。形式の判明したものについてみると、

広口壺が23点と最も多く、ついで台付壺、短頸壺、二重口縁壺、ミニチュア壺、長頸壺の順であり、非日常的な壺の割合が多いのも特徴としてあげられよう。また、台付壺の胎土は在地製ではあるが、その形態、技法などは吉備地方のものを模倣しており、吉備地方の人間が亀井遺跡内で作成したものと思われる。さらに、壺の形式が極めて少ない事も注目され、後期中葉からはじまる壺の器種減少傾向がかなり進んでいることもうかがわれる。

	広口壷	長頸壷	短頸壷	二重口縁壷	台付壷	ミニチュア壷	不　明	計
SK−01							3	3
SK−04 SD−01	7	1	1	1			8	18
落込み	6		2	1	3	2	28	42
包含層	10	1	1	3			19	34
その他					2	1		33
計	23 (23%)	2 (2%)	4 (4%)	5 (5%)	5 (5%)	3 (3%)	58 (58%)	100

第55表　壺の形式構成

広口壺（第56表）

型式が判明したものは19点にすぎず、統計処理を行うには余りにも数が少ないがあえてここで傾向を示すと、広口壺でもやや古い形態である広口壺A、Bが5点であり、新しい形態のC、Dが13点と全体的にやや新しい傾向を示している。また、広口壺の中には装飾性に富んだものも多く見られ、日常的に用いられたと考えるよりむしろ、何らかの祭祀、儀礼に伴うものと考える事ができよう。

長頸壺

長頸壺は、SD−01、包含層よりそれぞれ1点づつ出土したのみである。いず

	SK−04 SD−01	落込み	包含層	計
広口壷A	1	1		2
広口壷B	1	1	1	3
広口壷C	5	1	2	8
広口壷D		1	2	5
広口壷E				
広口壷F				
不　明		2	5	7
計	7	6	10	23

第56表　広口壷の型式構成

れもほぼ球形の体部に直立するやや短めの口頭部を有するものと思われ、包含層出土のものは体部外面にヘラミガキを施している。

短頸壺

ＳＤ－01、落込み状遺構、包含層より計４点出土した。いずれも口縁のみの破片であるが、口縁部が直線的に外傾するものと、体部上半から緩やかなカーブで外反するものと２つのタイプがあり、後者は比較的器壁が厚い。

二重口縁壺

ＳＤ－01、落込み状遺構、包含層より計４点出土した。ＳＤ－01出土のものは（第28図－34）、胴の強く張ったやや扁平な体部に、粘土帯を擬口縁上方に追加し強く外反する口縁部を作り出したもので、体部外面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。落込み状遺構出土のものは（第29図－４）、広口壺Ｃを原形とするもので、原口縁部外側に、粘土帯を張り付けたものであり、口縁部内面にヘラミガキを施す。包含層出土の２点はそれぞれ型式が異なり、（第45図－１）は、落込み状遺構出土のものとほぼ同じ手法で作られたと思われる。まだ図化していないが、もう１点は、原口縁部外面に垂下口縁を形成するもので、装飾性にも富み、口縁部に波状文、円形浮文、竹管文等を施す。

台付壺

落込み状遺構より３点、Ｏ－5E区土器集中部より１点出土した。いずれも脚部を欠く。先にも述べた通りこれらは、吉備地方のものの模倣と思われるが、個体毎により調整上差異がみられる。Ｏ－5E区土器集中部のものは、体部外面に細めのヘラミガキを行うなど吉備地方の技法をそのまま踏襲しているのに対し、落込み状遺構出土のものには、口縁部のみにミガキを行うもの（第29図－１）、ヨコナデとナデＩにより仕上げるもの（第29図－３）なども見られる。これらは製作者の違いによるものと思われ、吉備の人間が当遺跡で製作したものと、当遺跡の人間がそれをさらに模倣したものによる差と思われる。

ミニチュア壺

落込み状遺構より２点、ＳＫ－01北側より１点出土した。（第43図－279、第49図－下２）はともに、広口壺を原形とするものと思われ、作りも丁寧で落込み状遺構出土のものは体部外面をヘラミガキで仕上げる。（第43図－280）は、長頸壺を原形としたものと思われるが、作りも雑で口縁部と肩部とのくびれを指頭部による圧痕によりかろうじて持たせるものである。

（２）高坏

高坏は総数84点出土したが、その大半が坏部のみ、もしくは脚部のみの破片である。その為ここではまず、形態の判明した６点について説明した後、坏部、脚部にわけてその概略につい

て述べてゆくことにする。

型式の判明した6点のうち、落込み出土のもの（第38図－124）を除くと、口縁部高が体部高を凌駕するものである。いずれも円筒形のやや長めの脚部を有し、外面及び坏部内面をヘラミガキにより仕上げる。（第38図－118）は、非常に浅い坏部に中実で裾部の短い脚部を有するもので、やや特異な形態を呈す。（第38図－120）は、坏部の深いもので口縁部高は体部高の2倍近い、脚部は短い柱状部に大きく広がる裾部を有するもので、吉備系の高坏の影響を受けたものと思われる。

◦坏部―（第57表）

坏部の形態の判明したものは、わずか12点にすぎない。その内訳は、A1点、B4点、D_1 1点、D_2 4点、G1点、H1点で、斜め上方にほぼまっすぐのびる体部と屈曲し外反する口縁部を有するB類と、やや丸みを帯びた体部に屈曲し外反する口縁部を有し、体部と口縁部との境が不明瞭なD_2類が多い。

	SK－01	SK－04 SD－01	落込み	包含層	計
坏部 A			1		1
坏部 B		1	3		4
坏部 C		1			1
坏 D_1	1	1	2		4
坏 D_2					
坏部 E					
坏部 F					
坏部 G			1		1
坏部 H		1			1
不明		7	19	6	32
計	1	11	26	6	44

第57表　高坏の坏部形態

◦脚部―（第58表）

脚部の形態が判明したものは全部で68点に及ぶ。まず形態的に見ると、直線的に広がりながら移行する脚部に屈曲して開いた裾部を有する4類が32点と全体の半数近くを占め、ついで円筒形の長い脚部を持つ2類が20点、ごく短い脚部に大きく開いた裾部を具備する3類7点、スムースに広がる円錐状の脚部を持つ1類5点、5類4点の順である。また脚部の造形からみると、中空のA類32点に対し、中実のB類36点と両者はほぼ同数である。さらに、脚部との接合法をみると、円板充填法を用いるa類7点、接合法を用いるb類0点、挿

入付加法を用いるｃ類42点と圧倒的に挿入付加法が多い。ここで形態と他の２つの技法との関係を見ると、１類の脚部は全て中空であり、２類の脚部には中実で挿入付加法を用いるものが多く、３類は中空で挿入付加法、４類は中空、中実ともに多いが挿入付加法を用いるものが多く、５類は中実のものが多いといった傾向がうかがわれる。高坏の脚部は従来、１，２類→３，４類、Ａ類→Ｂ類といった傾向が示されており、この点から亀井遺跡出土の高坏脚部は古い様相を呈しているものといえよう。

（３）甕（第59～62表）

甕は総数で352点出土したが、うち型式の判明したのは76点のみである。まず、口径と体部最大径により分類すると、最大径が口径を凌駕するⅠ型47点、口径と最大径がほぼ等しい２型23点、口径が最大径を凌駕する３型が６点と、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ型の順となる。寺沢氏は、Ⅰ型を大型品、Ⅱ型＝中型品、Ⅲ型＝小型品としているが亀井遺跡においては必ずしもそうとはいえない。また、器高と最大径により分類すると、最大径が体部上半にあるＡ型４点、体部中位にあるＢ型22点、ほぼ球形の体部を持つＣ型24点と、Ｃ、Ｂ、Ａ型の順となり、Ⅰ型にはＣ型の体部、Ⅱ型にはＢ型の体部を持つものが多いといった傾向もうかがわれる。さらに肩部から口縁部への移行についてみると、ややシャープに移行する１類101点、「く」の字に外折する２類６点、直立

		ＳＫ－01	ＳＫ－04 ＳＫ－01	落込み	包含層	計
Ⅰ	Ａ			1		1
	Ｂ		2	7		9
	Ｃ	5	6	10	1	22
	不明	6	1	6	2	15
Ⅱ	Ａ	1		1		2
	Ｂ	1	1	10		12
	Ｃ	1		1		2
	不明	2	2	3		7
Ⅲ	Ａ		1			1
	Ｂ			1		1
	Ｃ					
	不明	1		3		4
不明		15	25	142	152	334
計		32	38	185	155	352

第59表　甕の体部形態

			SK−01	SK−04 SK−01	落込み	包含層	計
1	A	a				1	1
		b					
		c	1	1			2
		不明		2			2
	B	a					
		b					
		c					
		不明					
2	A	a					
		b		1			1
		c		1			1
		不明			1	1	2
	B	a			1		1
		b					
		c		1	10	5	16
		不明					
3	A	a					
		b		1	1		
		c		1	2	1	4
		不明				1	1
	B	a					
		b					
		c			1	1	2
		不明					
4	A	a			2	1	1
		b			1		
		c	3	3	4	1	11
		不明		1	2	3	6
	B	a			2		2
		b					
		c		1	2	2	5
		不明		5		2	7
5	A	a		1			1
		b					
		c					
		不明					
	B	a			1		1
		b					
		c			1		1
		不明		1		1	2
計			4	17	27	20	68

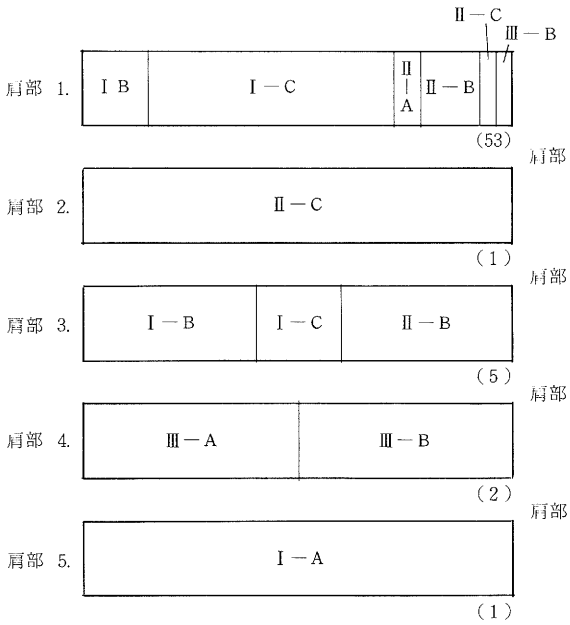
第58表

高坏の脚部形態

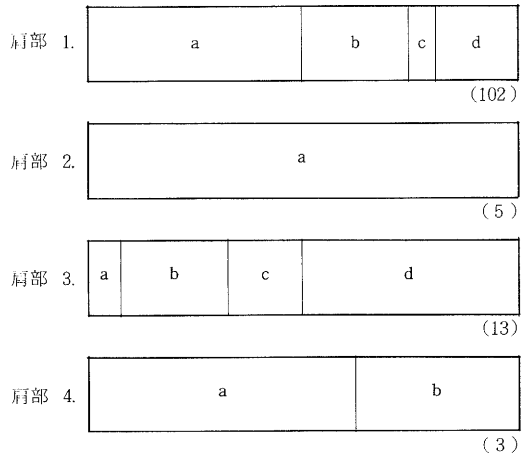
	ＳＫ－01	ＳＫ－04 ＳＤ－01	落込み	包含層	計
1	14	16	57	14	101
2	1	2	3		6
3	2	3	5	2	12
4	1	2	2		5
5			1		1
計	18	23	68	16	125

第60表　甕の肩部形態

し外反する３類12点、直角に屈曲する４類５点、接線が不明瞭な５類１点と、この時期最も一般的な１類が他を圧倒する。肩部と体部の関係を見ると、１類にはＣ型、Ｂ型が多く、３類にはＢ型が多いといった傾向もうかがわれ、３類の肩部を有する甕は、長胴のものが多いという事がいえよう。



第61表　甕肩部と体部の関係



第62表　甕肩部と口縁部の関連

（４）鉢

鉢は全部で33点出土した。ドーナツ底の底部と内彎してたちあがる口縁部と体部を有するものが一般的であるが、一部屈曲し開く短い口縁部を有するものも存在する。

（５）壺口縁部（第63表）

壺全体においては、端部を丸くおさめる口縁ａと端面を持つｂとが大半を占めているが、は

	SD−01 SK−04	落込み	包含層	その他	計
a	2	3	1	2	8
b	6	5	5		16
c			1		1
d	2	2			4
e					
f		1			1
計	10	11	7	2	30

第63表　壺の口縁形態

	SK−01	SK−04 SD−01	落込み	包含層	計
a	7	21	74	38	140
b	10	6	46	23	85
c	3	3	23	9	38
d	3	5	37	14	59
計	23	35	180	84	322

第64表　甕の口縁形態

ねあげ口縁dが4点存在する事も見のがせない。形式的にみると、広口壺においては、口縁bが最も多く、短頸壺は口縁aが多い。

（6）甕の口縁部（第64表）

口縁aが140点と最も多く、ついで口縁b85点、口縁d59点、口縁c38点の順となっている。肩部と口縁部の関係を見ると、肩部1類においては、a、b、c、dともに存在し、口縁部の比率をそのまま示しているような数値を示すが、肩部3類の場合、d、b、c、aの順となり、はねあげ口縁の占める割合が最も多く、円頭形のa類は最も少ない。

（7）壺の底部形態（第65表）

壺底部における突出度は、突出する1類24点、やや突出する2類45点、突出しない3類16点と2類が最も多い。、底部の形状についてみると、ドーナツ底のA類27点、上げ底のB類3点、

			SK−01	SK−04 SD−01	落込み	包含層	その他	計
1	A	a						
		b						
		c						
		不明		2	2	3		7
	B	a						
		b						
		c						
		不明						
	C	a						
		b						
		c		1				1
		不明	1	2	6	7		16
2	A	a			1			1
		b						
		c						
		不明		3	5	5		13
	B	a						
		b						
		c					1	1
		不明			1			1
	C	a						
		b						
		c						
		不明	1	5	17	6		29
3	A	a			1	1		2
		b						
		c						
		不明		1	2	2		5
	B	a						
		b						
		c						
		不明				1		1
	C	a						
		b						
		c						
		不明			6	2		8
計			2	14	41	27	1	85

第65表　壺の底部形態

			SK−01	SK−02	SK−04 SD−01	SX−01	落込み	包含層	その他	計
1	A	a			1					1
		b								
		c			1					1
		不明	1		1		4	1		7
	B	a								
		b								
		c								
		不明								
	C	a								
		b								
		c								
		不明			1	2	6	2	1	12
2	A	a	2		1		5	4		12
		b			1					1
		c					1			1
		不明	5		7		14	12		38
	B	a								
		b								
		c								
		不明			1					1
	C	a						1		1
		b								
		c								
		不明	2		7		33	11	1	54
3	A	a			1		2	1		4
		b								
		c					1			1
		不明	3				2	2		7
	B	a								
		b								
		c								
		不明								
	C	a								
		b								
		c								
		不明	3	1	2		7			13
計			16	1	24	2	75	34	2	154

第66図　甕の底部形態

平底のC類54点と平底のものが最も多く、2－C類、1－C類、2－A類などが目立つ。また底部の整形技法は不明なものが多いが、確認された5点のうちでは、円板充填法3点、円板すえおき法2点である。

（8）甕の底部形態（第66表）

甕底部においては、やや突出する2類が98点と目立って多く、ついで突出しない3類25点、突出する1類21点の順となる。底部形状は、ドーナツ底のA類73点、上げ底のB類1点、平底のC類80点と平底とドーナツ底のものがほぼ同率であり、2－C類、2－A類などが目立つ。また、底部の成形技法は、判明したもの22点のうち、円板充填法を用いるa類が18点と最も多い。

第2節　弥生時代中期の土器

◦弥生時代中期包含層（第50図）

〔壺〕

1．口縁部は斜上方に伸び、端部は丸味をもつ。頸部は直立気味である。頸部内面はハケ（10本／1.2cm）、外面はヘラミガキ、櫛描き文（7本／1.1cm）を施す。色調は淡褐色を呈する。

〔無頸壺〕

2．張りの強い体部に短く直立する口頸部がつく。口縁端部は外傾面をなす。体部内面はハケ（5本／1cm）、外面は波状文（6条）、簾状文（7本／1cm）、ヘラミガキを施す。色調は明褐色を呈する。

〔大型甕〕

3．大型甕と思われる底部片で、底部は内面から粘土を付加している。内面はナデⅠ、外面はヘラミガキを施す。色調は赤褐色を呈する。

〔甕〕

4．上げ底の底部から張りの弱い体部に至る。底部外面は指押え、体部外面にはタタキ調整が施され、外面全体に煤が付着している。色調は内面が明褐色を呈する。

5．平坦な底部から張りの弱い体部に至り、底面の器壁は体部に比べ薄い。内面はナデⅠ外面は縦方向にケズリAを行う。色調は淡褐色を呈する。

6～9．平坦な底部をもつ底部片である。9は円板すえおき法による。調整は6が内面を指押え、外面をナデⅠ、7～9は内外面共ナデⅠを行う。色調は、6－内面茶褐色、外面赤褐色、

7、9－暗褐色、8－淡褐色を呈する。

10. 肩の張りが弱い体部から緩やかに外反する口縁部がつく。口縁端部はやや丸味をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、肩部内面は縦方向にナデⅡ、外面はケズリAを行う。色調は内面は明褐色、外面は淡褐色を呈す。

11. 丸味を持つ体部から鋭く「く」の字形に外反する口縁部がつく。口縁部は内傾面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は指押え、ナデⅠを施し、外面全体に煤が付着する。色調は内面は淡褐色を呈する。

12. 張りの強い肩部から短く外反する口縁部がつき、口縁端部は丸味をもつ。体部内面はナデⅡ、外面は縦方向にヘラミガキを施す。色調は淡褐色を呈する。

13. 張りの強い肩部から、「く」の字形に外反する口縁部がつき、口縁部は内傾面をもつ。底部は突出する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデⅠ、外面はタタキのちケズリA（30／10㎝）を施す。色調は淡褐色を呈する。

◦土器棺（第48、49図）

〔壺〕

1．壺の体部片である。内面はナデⅠ、指押え、外面はヘラミガキを施す。色調は内面が明褐色、外面が淡褐色を呈する。

〔壺〕

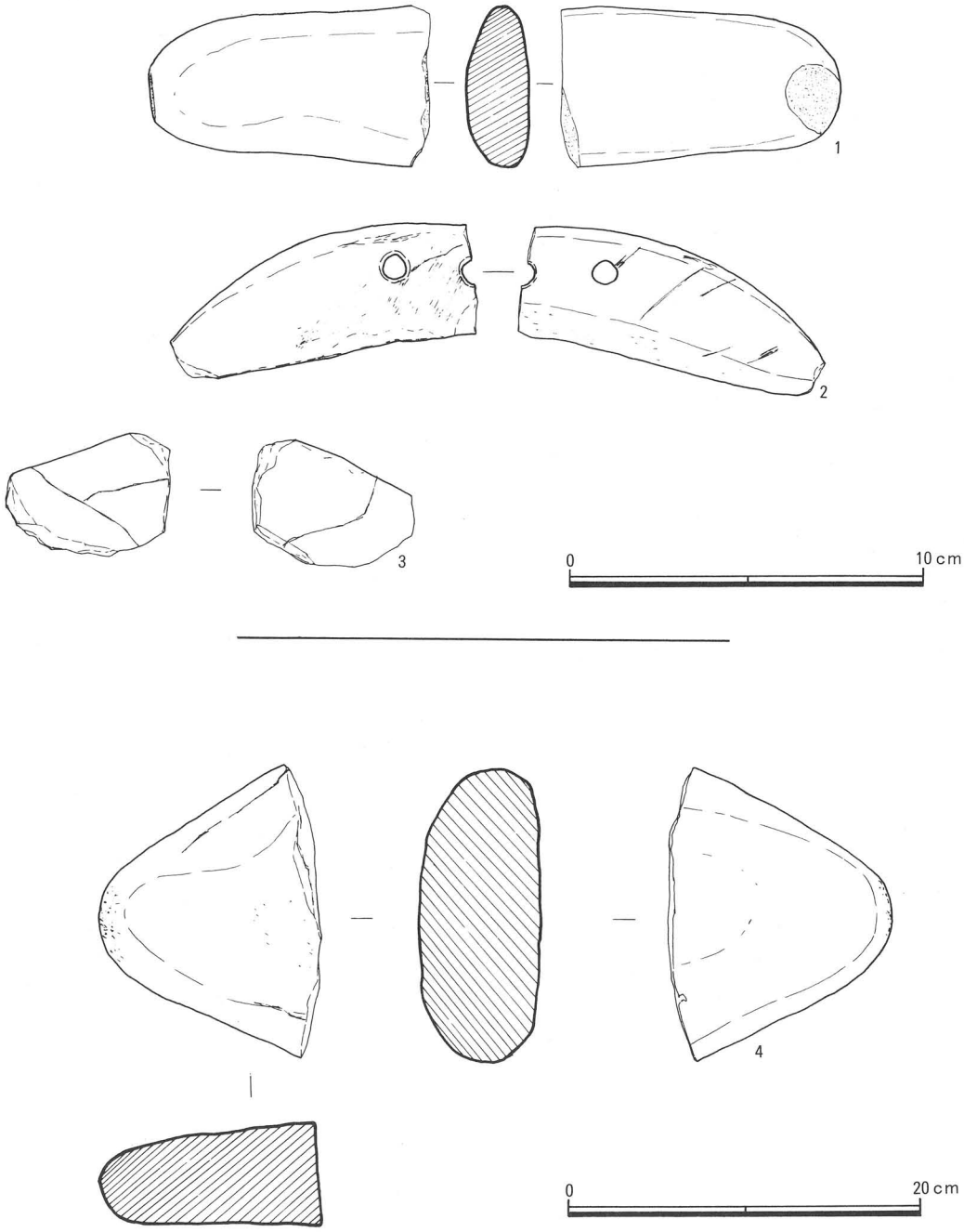
2．平坦な底部から丸味をもつ体部に至り、肩部上半から口縁部を欠いている。内面はハケ（14本／1.6㎝）のちヘラミガキ、外面は肩部にハケ（14本／1.6㎝）のち櫛描き文、体部にはヘラミガキを施す。色調は暗褐色を呈する。

3．平坦な底部をもつ大型甕の底部片である。底部は円板すえおき法による。内面はナデⅡ、外面はヘラミガキを施し、外面の一部に煤が付着する。色調は暗褐色を呈する。

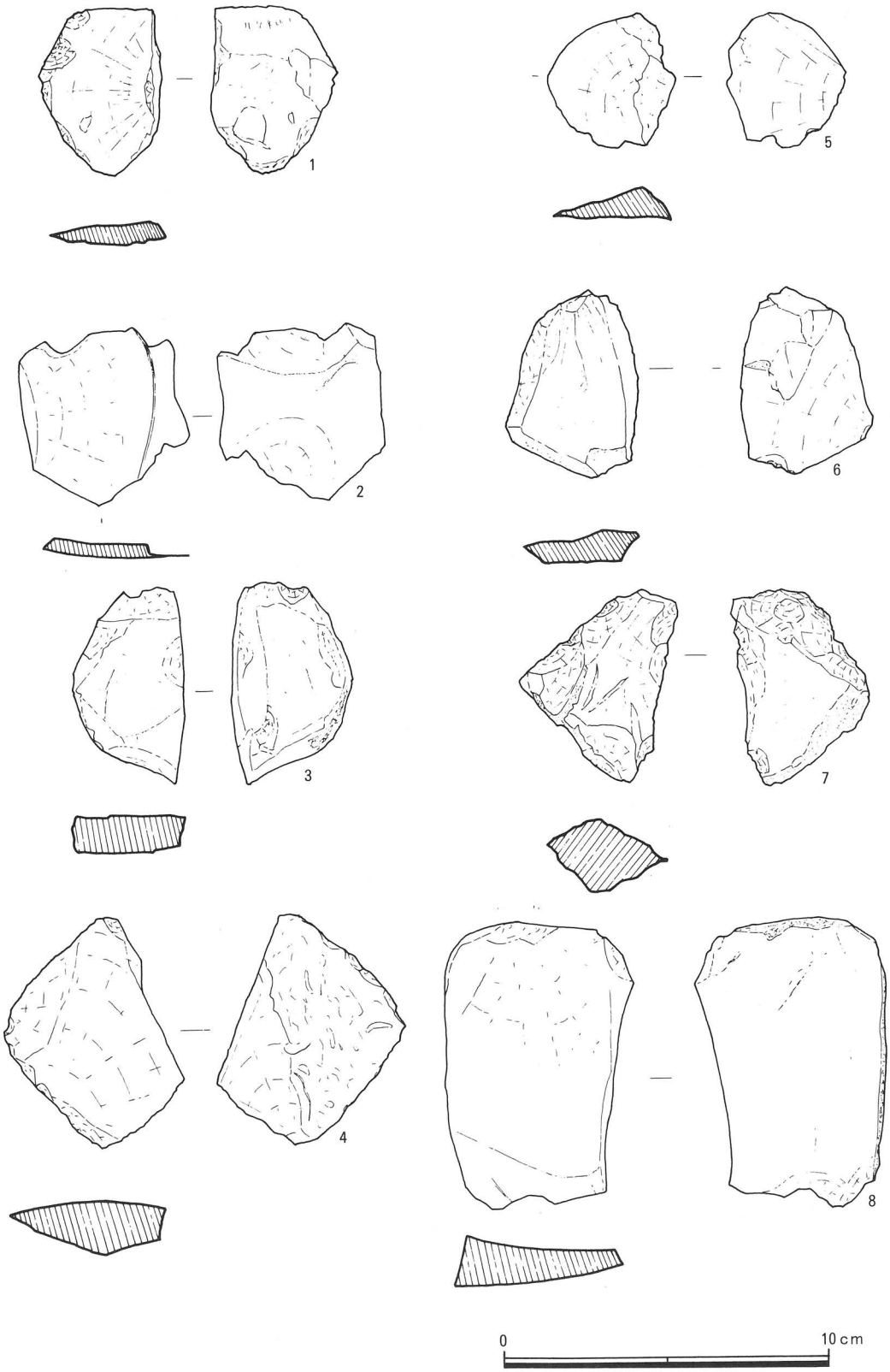
◦ＳＤ－02（第49図）

〔甕〕

1．下方に拡張する口縁部をもつ、口縁部内面はヨコナデ、外面は口縁部から体部にかけて簾状文を数帯連続して施し、口縁部に刺突文を施す。色調は淡褐色を呈する。



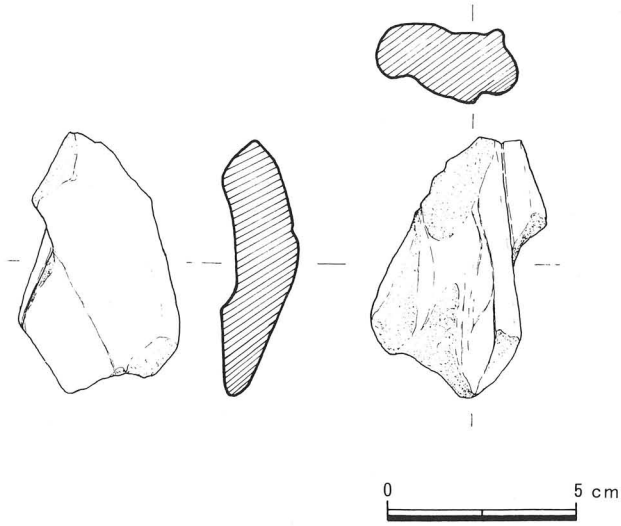
第51図　出土石器　1～3（S＝½）4（S＝¼）（SD－01，1，4，中期包含層2，3）



第52図　弥生中期包含層出土　サヌカイト剥片（S＝½）

第３節　石器

当遺跡では弥生時代中期の遺物包含層から、石庖丁２点（２，３）、砥石１点（第52図）、弥生時代後期の溝ＳＤ－01から石斧１点（１）、用途不明石製品１点（４）がそれぞれ出土している。以下これらの石器類についての形態について説明する。



第53図　弥生中期包含層出土砥石（１／２）

◦石庖丁

２．全体的に楕円形を呈し、背面は彎曲し、片刃である。片面は、穂首を摘み取る結果によるものか光沢があり、背面の肩部がすりへっている。双孔を有する。

３．全体形は不明であるが、２と形態的には変わらず、幅がやや狭くなり、背面の磨耗が著しい。

◦石斧

１．基部のみ残存しているもので、断面は長楕円形を呈する。

◦砥石

図版第50図、全体形は不明であるが、使用した痕跡としては、幅が狭く鋭い溝が４ケ所、それ以外に丸味をもつ部分が３ケ所認められる。

◦用途不明石製品

４．当初は、石皿とも砥石とも検討したが、それらを決定づける形態的特徴及び使用痕が認められず、ここでは用途不明石製品として分類した。断面は楕円形を呈し、片面に一部光沢がある。

石材について

刑部小学校教諭　　奥田　尚

石包丁、砥石に使われている石材を裸眼で観察した。石種は玄武岩質凝灰岩質片岩、砂岩、角閃石安山岩である。

玄武岩質凝灰岩質片岩：石包丁（2，3）、色は暗灰色、淡緑灰色である。弱い片理がある。構成鉱物は長石、輝石である。長石は白色針状で、粒径が0.5㎜～1㎜、量が僅かである。輝石は黒色、短柱状で、粒径が0.5㎜、量がごくごく僅かである。基質は淡緑灰色で、緻密である。

砂岩：砥石（第53図）　色は灰色である。構成砂粒は石英、長石である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3㎜、量が多い。長石は白色、粒形が角、粒径が0.3㎜、量が中である。

角閃石安山岩：（4）　色は暗灰色である。造岩鉱物は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が0.5㎜～1㎜で自形をなし、量が中である。角閃石は黒色板状、粒径が0.5㎜～1㎜の自形で、量が僅かである。石基はややガラス質である。

玄武岩質凝灰岩質片岩は、弱い片理があり、岩相的に、紀ノ川流域ら分布する無点紋帯の玄武岩質凝灰岩質片岩に酷似する。紀ノ川の川原石にも同質のものが見られることから、紀ノ川の川原が採取地と指定される。砂岩、角閃石安山岩については場所を限定するに至らない。

第４節　亀井遺跡出土弥生後期の土器の検討

前節では、出土土器を寺沢氏の分類基準に基づき分類し統計処理を行いその概略について述べてきたが、ここではさらにそれらについての詳細な検討を加え、その特徴について述べてゆくこととする。

まずここで、前節で、取り上げた土器群の特色をあらためて記すと、

1．壺、甕の占める割合が極めて高く、副次的な土器（高坏、鉢）などの出土量が少ない。

2．甕と壺との量的逆転が既に達成されておりその開きがこの時期にしては余りにも大きい。

3．壺の形式構成が極めて単純で、長頸壺もわずか２点のみしか出土していない。

4．吉備系台付壺の模倣土器が４点出土し、吉備からの人間の移動も考えられるのに、吉備系甕の出土を見ない。

5．甕、高坏などに極めて新しい形態のものが多いのに対し、高坏脚部はやや古い形態と思われる中実のものが多い。

などの点があげられよう。第１、２点については先に述べた為、重複はさけるが、それ以外の点については、これらの土器群が極めて古い要素と、新しい要素を持っている事を表すものである。３番目にあげた壺の形式構成の単純さなどは、壺そのものの量的な不足がある程度影響しているが、それ以上に、弥生後期からはじまる壺の形式の減少が著しく進んでいる為とも考えられよう。後期後半段階の遺跡で一般的に確認される壺の形式としては、広口壺、長頸壺、広口長頸壺、短頸壺、短頸直口壺、細頸壺、二重口縁壺、無頸壺などがあるが、そのうち、広口長頸壺、細頸壺、短頸直口壺、無頸壺などは量的に少なく、確認されない場合も多いが、長頸壺については、後期後半段階でも最低壺全体の10％程度は占めており、庄内期に入ってその系統を受けつぐ直口壺が著しく減少するといった傾向がうかがわれるものである。

ここで大和地方の例を示すと、六条山遺跡においては壺278点のうち長頸壺は32点、平等坊岩室遺跡においては59点中９点、さらに四分遺跡ＳＤ666上層、和爾森本遺跡ＳＤ129においては、壺の約半数かそれ以上の出土を見ることができる。以上の４つの遺跡の例を見ると大和盆地においては、北部、中部においては長頸壺の占める比率が少なく、東部、南部においてはその比率が大きい事がうかがわれよう。さらに、詳細なデーターは得られていないが河内平野の遺跡においても、この時期、亀井遺跡の例ほど極端ではないが長頸壺の減少傾向がうかがわれる事から、河内→大和中北部→大和東、南部の順で長頸壺の減少が進んでいったものと思われ、今回報告した亀井遺跡については、それが極端な形で表れたものと思われる。また壺全体の傾向として特徴づけられるものとしては、出土した壺が極めて装飾性に富んでいる事にある。これは、土器の装飾がほとんど行われなくなるこの時期の傾向としては、極めて特異なものであ

り当遺跡の土器については、この時期より壺そのものの機能が日常的な貯蔵土器といったものから、祭祀、儀礼に伴う供献土器といった用途に変化する過程を示すものと思われ、壺の出土量そのものの減少も、用途の変化に伴うものと考えられる。

次に甕についての検討を行うこととする。甕について特記すべき事項として、この段階に既に内面にヘラケズリを施す甕が出現している事があげられよう。(第32図－65) 甕の内面ヘラケズリは、庄内期前半に表れる技法として把えられているが、この時期のもので確認されたのは今回が初めての例である。ケズリを行う甕は、破片も包めて2点のみであったが、遺構面を覆う包含層の中からも時期的に新しい土器は認められず、混入品とは考え難く、既に、内面ヘラケズリを行う土器がこの時期に存在していた事を認めざるを得ない。また、甕の形態についてみると、大別して、体部が球形で底部の突出度の極めて小さいもの、体部がやや長胴気味で底部もやや突出するもの、口縁が直立した後外反し、体部は長胴気味でやや突出する底部を有するものの3つが存在している。体部が球形のものはこの時期に出現し、のちの庄内甕へと変化するものと思われ、長胴のものはV様式系甕としてその形態を留めるものと思われ、前者が量的にも極めて多く、また、口唇部をつまみ上げるd手法の甕も多く見られる事からこの時期を庄内甕出現の前段階として把える事ができよう。また、直立し外反する口縁を有する甕は、体部外面にススの付着がほとんど見られない事から壺の代用として貯蔵用の土器として用いられた可能性も強い。さらに、これら亀井遺跡出土の甕と大和地方出土の甕を比較すると、北大和地方においては、量的には亀井遺跡のものより少ないが、体部球形の甕が多く見られるのに対し、盆地東部の和爾森本遺跡においては、体部が球形化したものも見られるが量的に少なく、またそれらの大半が近江系受口状口縁を持つ甕である事などその様相を異にする。これらの点からも、壺の場合と同様、土器形式の変遷のルートとして、河内→北中大和→東南大和といった方向が考えられるのである。

次に、高坏について見ると、高坏の中には極めて特異なものが数点見られるが、形態的には大和地方に見られる高坏とほとんど差異はない。それどころか逆に脚部に至っては、中実のものが半数を占めるなど、古い技法、形態の維持といったものがうかがわれるのである。さらに脚部について大和の例を見ると、この時期では逆に、先進的な土器形態を取り入れていた筈の北大和六条山遺跡に中実のものが多く、やや後進的な地域であった東大和（和爾森本遺跡）はそのほとんどが中空である。このことから逆に、東大和→北大和→河内といった土器形式の流れも考えられるのであり、河内の土器文化が一方的に大和の土器文化に影響を与えたものではないこともうかがわれよう。

以上、整理すると、今回出土した土器群は時期的には、弥生後期後半から庄内への過渡期にあたるものであり、古い土器型式と新しい土器型式が混在しているものといえよう。即ち、新

しい要素としては、

◦壺の形式の単純化及び壺そのものの儀器化

◦甕の体部球形化、内面ヘラケズリ技法の出現及び甕の機能の分化

古い要素としては

◦高坏の量的不足

◦中実の高坏脚部の多量出土

があげられよう。

また、大和と河内の土器を比較した場合、壺、甕など多くの場合、河内の土器様式、型式が大和の土器へ強く作用していたものと思われるが、逆に大和の土器様式、型式が河内へ影響を及す場合もあり、さらに、吉備、山陰、東海等の土器様式、型式の影響を受けながら、複雑かつ多様な古墳時代初頭の土器様式を生み出すに至ったものと思われる。

注　南側側溝内の遺物についてはＳＤ－01に伴うものと考えられる為、統計処理もＳＤ－01の中に含めて行った。

文献１　亀井　㈶大阪文化財センター（1982）

文献２　亀井（その２）　㈶大阪文化財センター（1986）

文献３　亀井遺跡　㈶大阪文化財センター（1982）

文献４　亀井遺跡Ⅱ　㈶大阪文化財センター（1984）

文献５　亀井・城山　㈶大阪文化財センター（1977）

文献６　亀井北（その１）　㈶大阪文化財センター（1986）

文献７　亀井北（その２）　㈶大阪文化財センター（1986）

文献８　亀井北（その３）　㈶大阪文化財センター（1986）

文献９　亀井（その３）　㈶大阪文化財センター（1987）

文献10　六条山遺跡　奈良県立橿原考古学研究所（1980）

文献11　矢部遺跡　奈良県立橿原考古学研究所（1987）

文献12　増補会下山遺跡　芦屋市教育委員会　（1985）

文献13　岩室池遺跡・平等坊・岩室遺跡　天理市教育委員会（1985）

文献14　飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅲ　奈良国立文化財研究所（1980）

※　なお和爾森本遺跡の資料については、近々報告書刊行の予定であり、詳細については同書をごらんいただきたい。

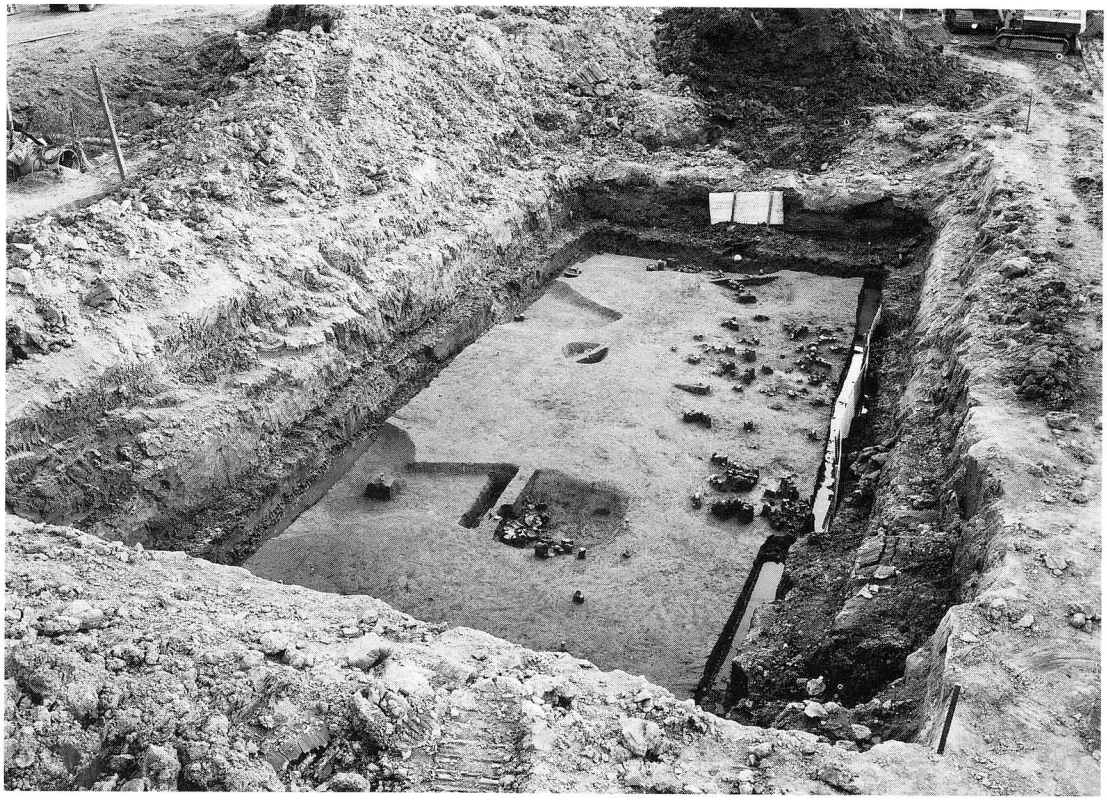
あ と が き

亀井遺跡の調査を開始してからまだ4ケ月といった異例の早さで今日を向かえる事ができた事を我ながら驚くばかりです。思えば現地調査では、のべ17日間という短い期間ではあったが日曜、祝日を返上し調査に協力して下さった作業員の皆さん、補助員諸君には心から感謝する次第であります。また、内業整理に関しても、仕事の枠を越えて深夜まで筆者につきあってくれた岡田清一さん、さらに随時内業を行う事ができなかった筆者にかわって仕事を進めて下さった横山妙子さん、徳谷尚子さんはじめ多くの方々が筆者の至らない点を補なって下さったおかげで本日ようやくあとがきを書くに至ったのであります。

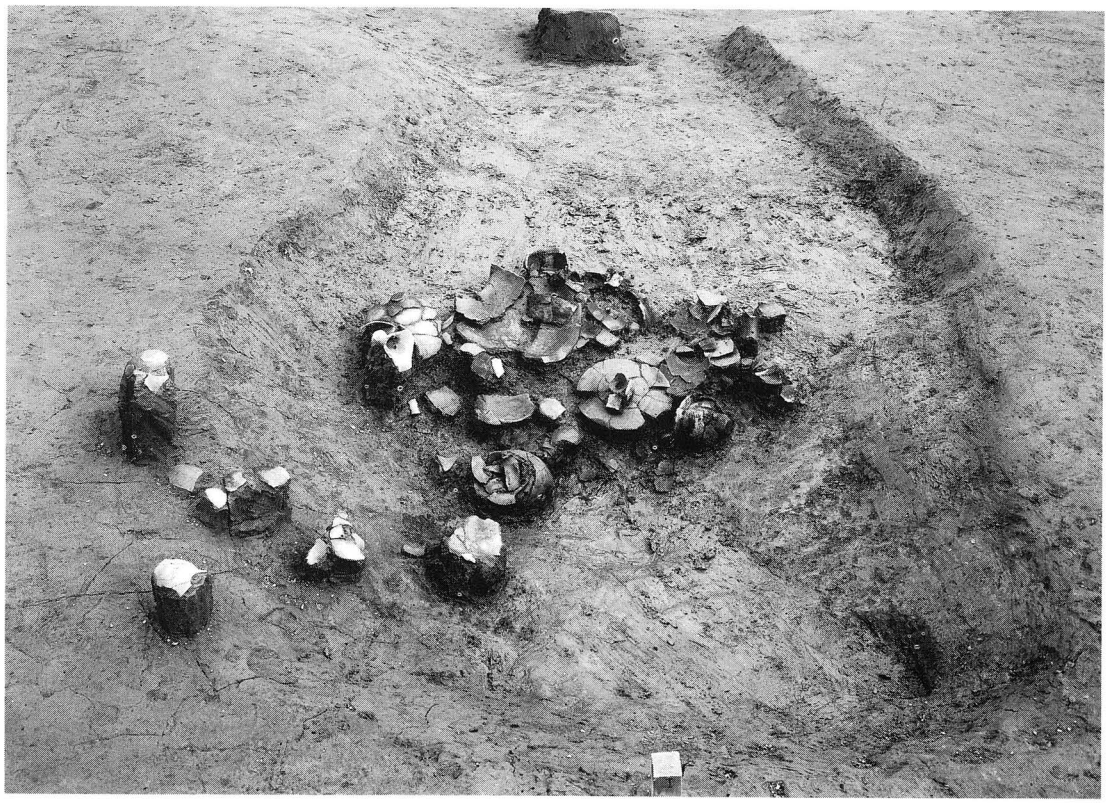
内容的には、筆者浅学の上、さらに時間的な制約も手伝って不十分な点や不備な点が多々あり、活字になるのが恥かしい気もいたしますが、できるだけ多くの方々の目に触れ、御教示、御批判をいただけることをただただ願って止みません。最後に、今後より一層の精進を御約束してあとがきにかえさせていただきます。

1989. 3. 23

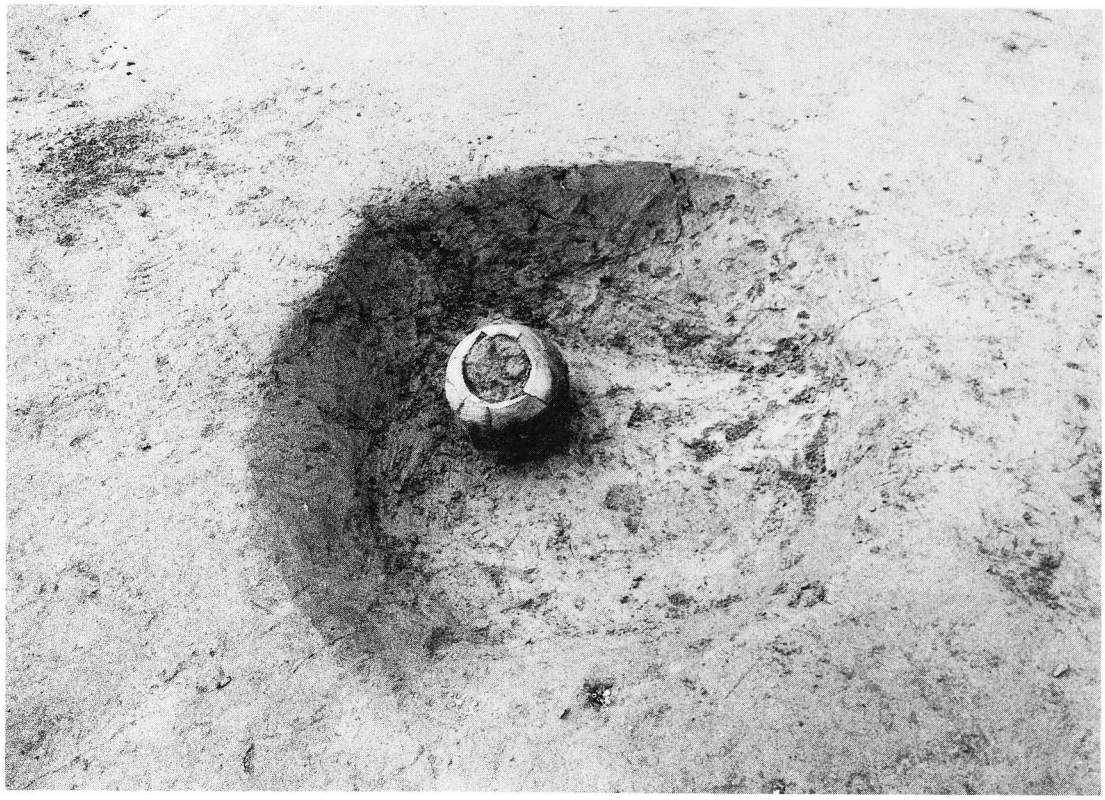
近江　記す



調査区全景（北から）

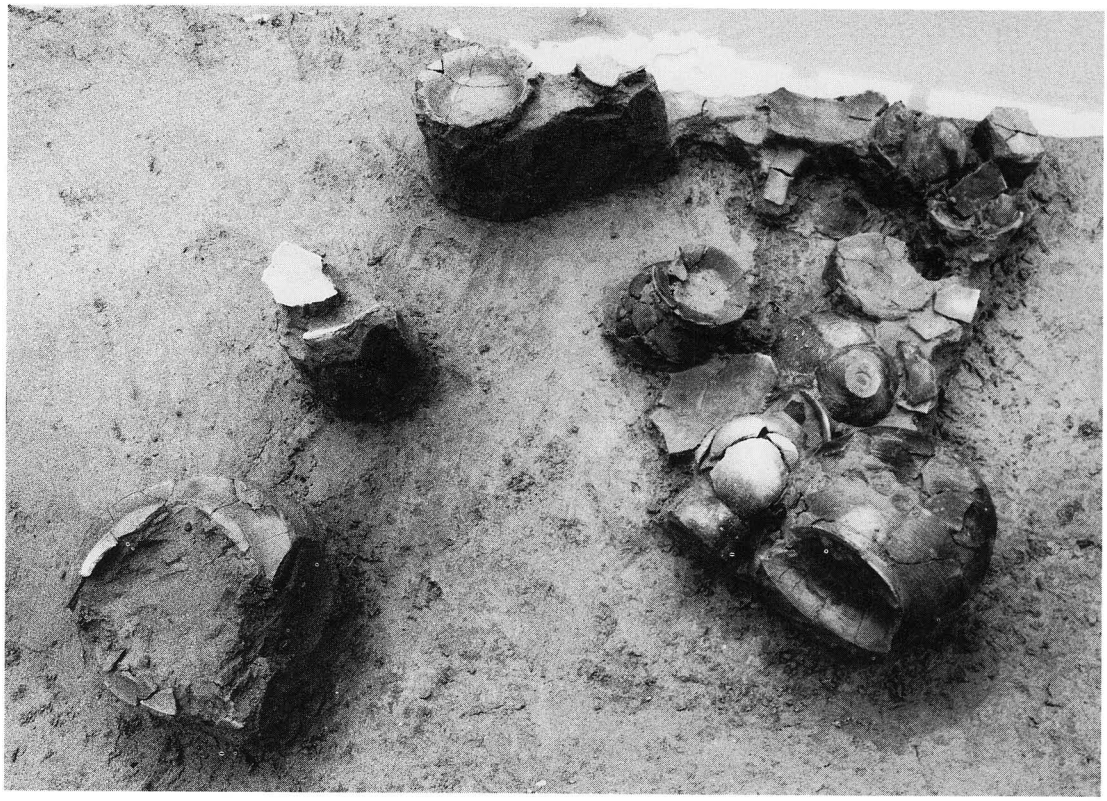


ＳＫ―01遺物出土状況（東から）



ＳＫ―02

ＳＫ―01遺物出土状況（東から）



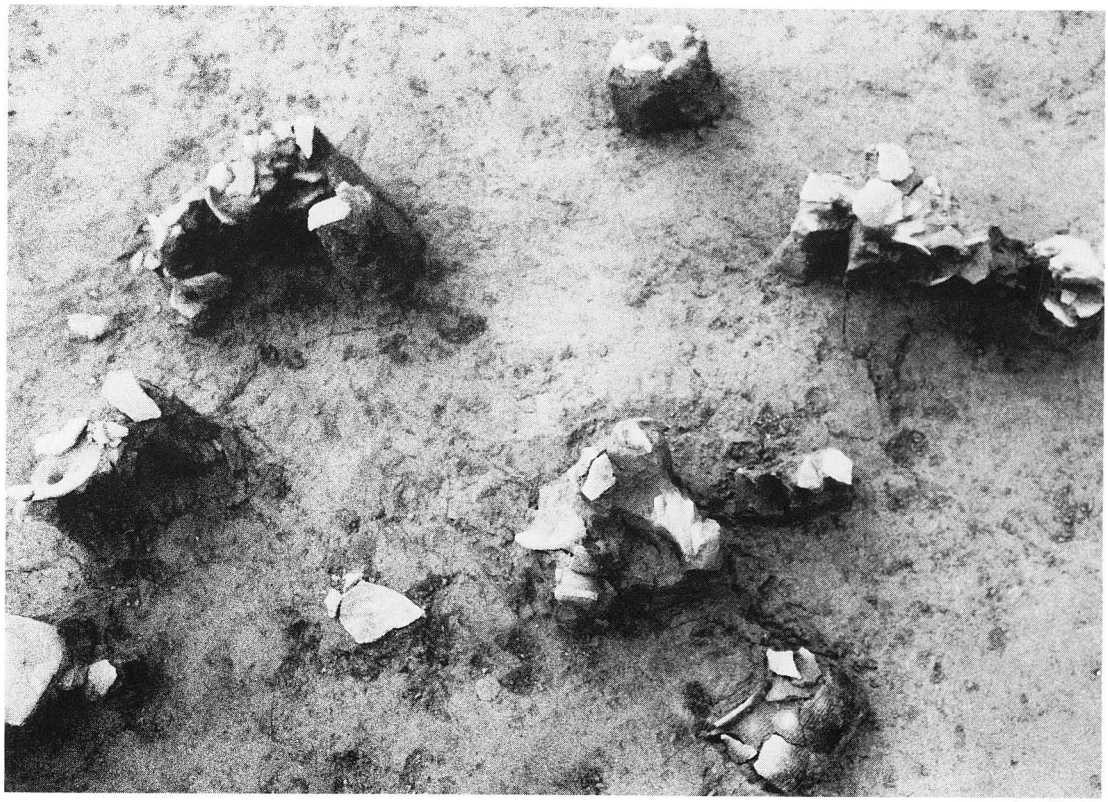
ＳＤ―01遺物出土状況（東から）

落込み状遺構（西から）

落込み状遺構（南から）

落込み状遺構遺物出土状況

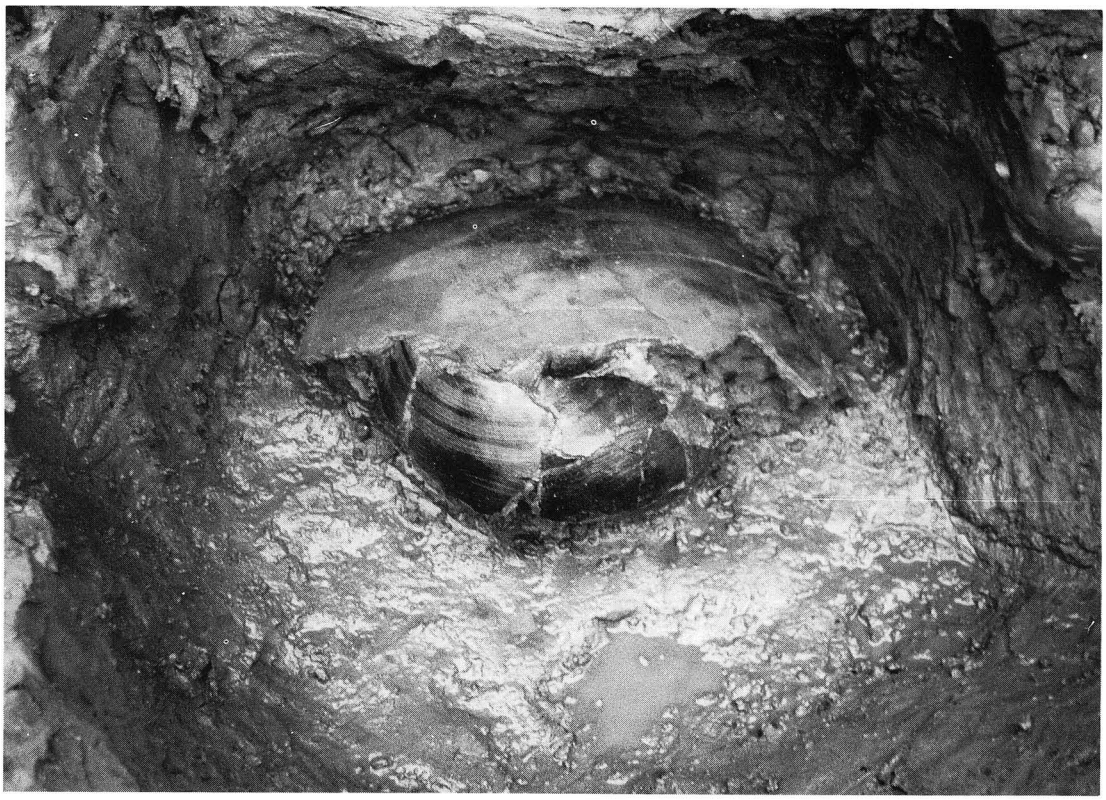
落込み状遺構遺物出土状況



落込み状遺構遺物出土状況

ＳＤ―02検出状況（北から）

土器棺検出状況（南から）



土器棺出土状況（南から）

土器棺出土状況（南から）

下層確認グリット

図版9 SK—01・SD—01出土土器

22－17

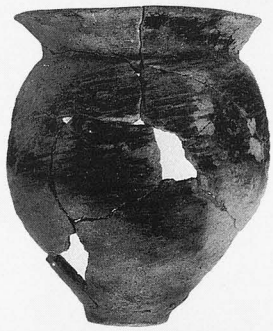
22－20

22－21

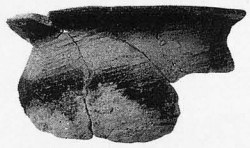
23－30

22－22

24－6

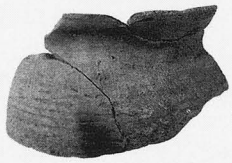


24－11



24－7

24－5

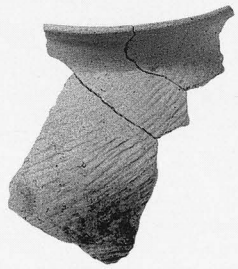


24－9

24－10

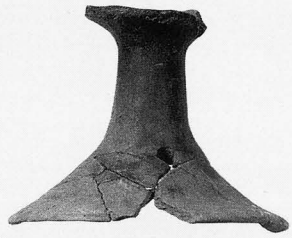
25－18

25－14



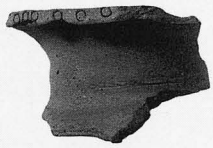
25－19

26 — 28



26 — 30

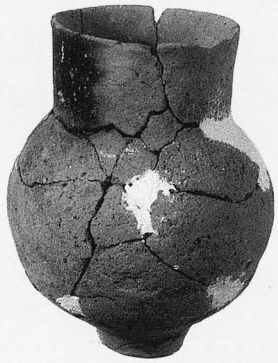
26 — 31



26 — 36

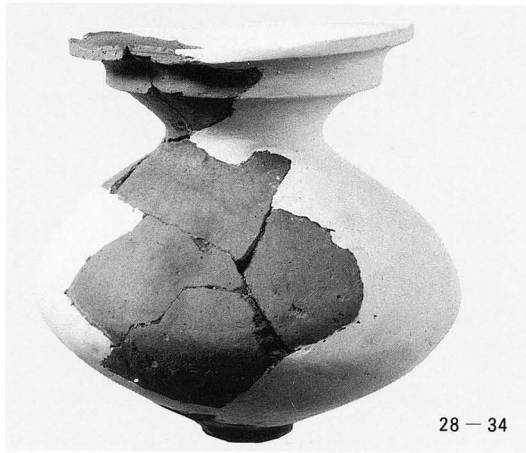
26 — 34

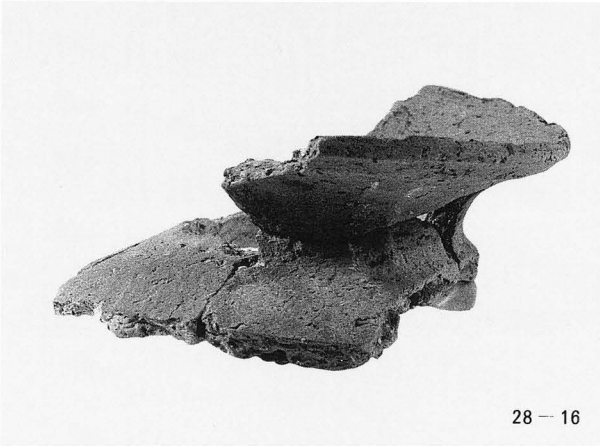
26 — 35

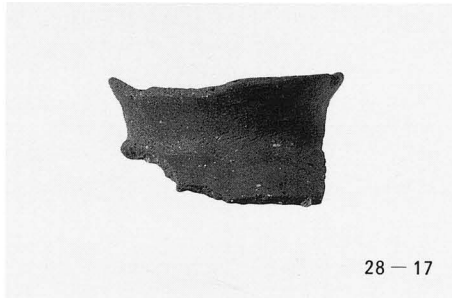


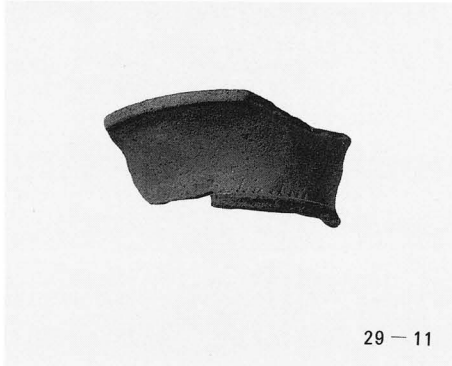
27 — 42

27－41

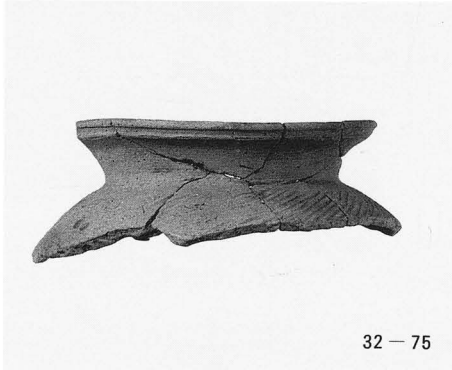

28－34

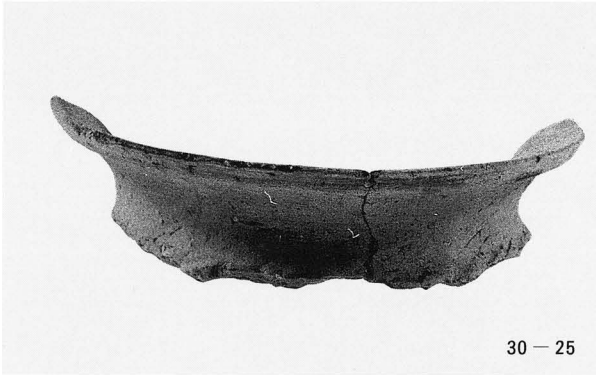

28－16

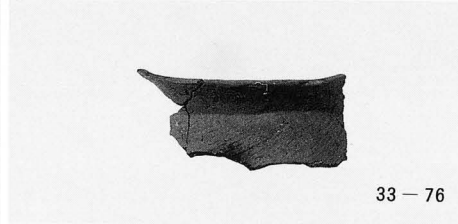

28－17

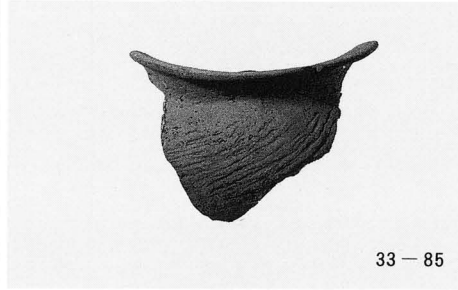

29－11

29－13


32－75


30 — 25

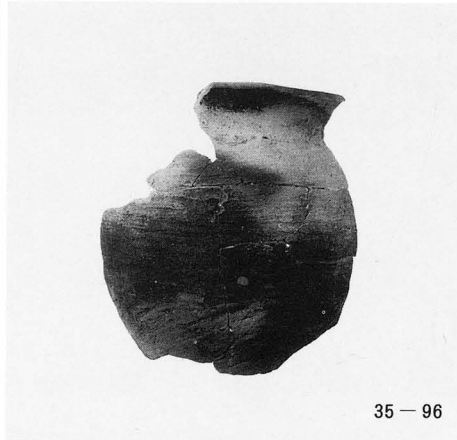

33 — 76


33 — 85

34 — 90

33 — 86

35 — 100


35 — 96

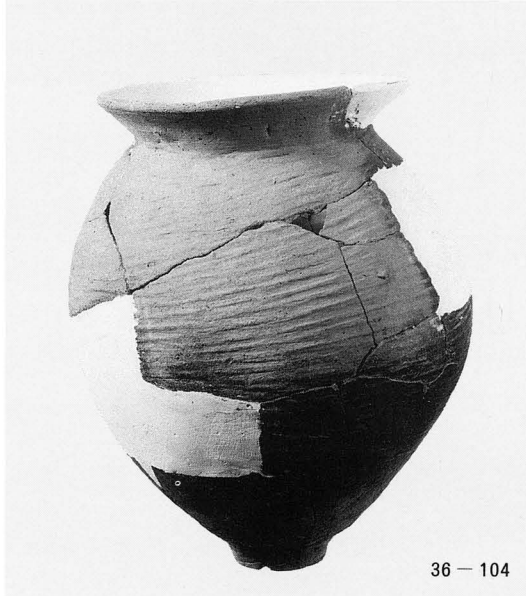
35 － 95

35 － 97

35 － 99

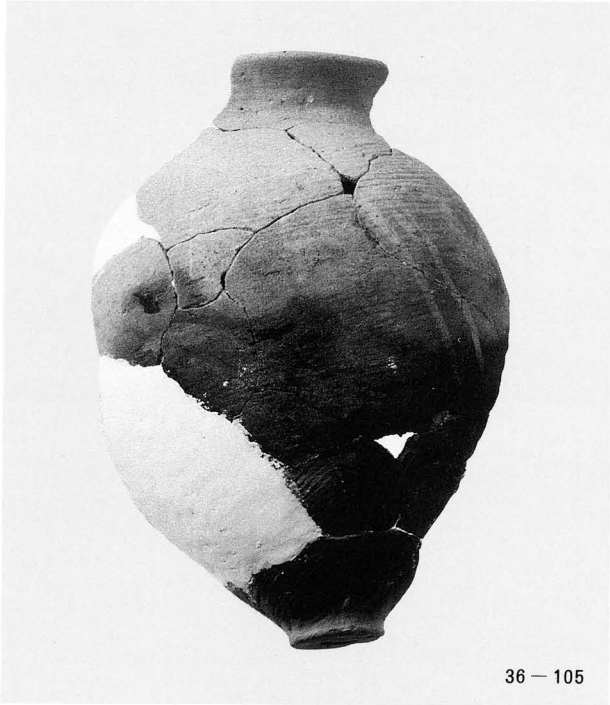
36 － 102

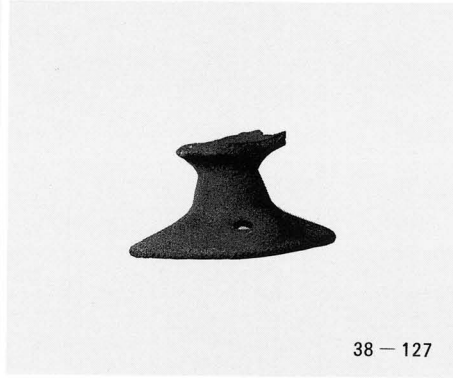
37 － 107

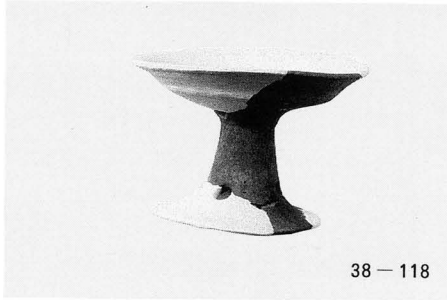


36 － 104

図版15　落込み状遺構出土土器


36－105


38－127


38－118

38－126

38－125

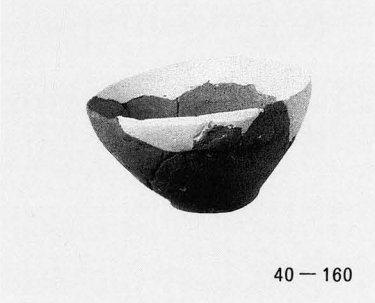
38－124

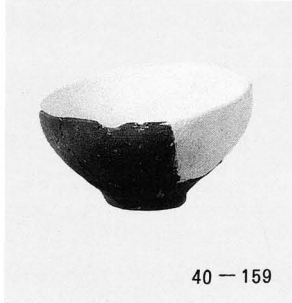
38－120

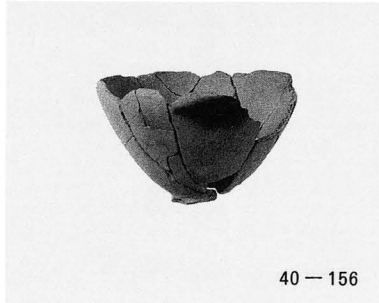
図版16　落込み状遺構O—5E区出土土器

38—119

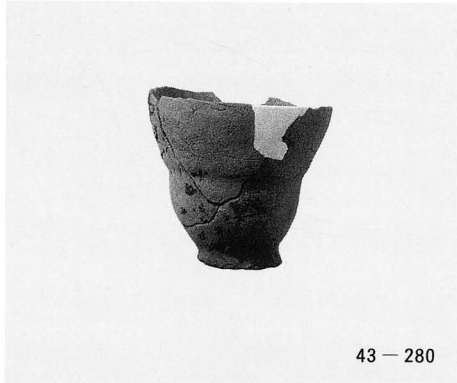
39—153


40—160

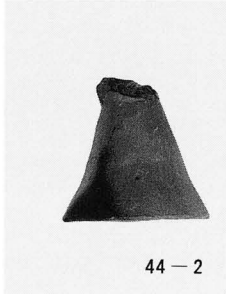

40—159

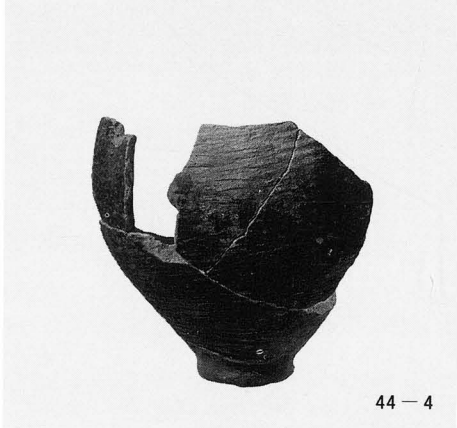

40—156

40—163


43—280

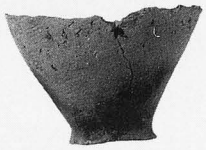
44—1


44—2

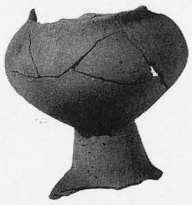

44—4

図版17

SK—01北側・弥生中期包含層出土土器



44－1

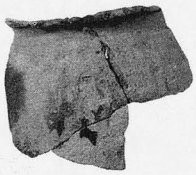


44－3

50－13

50－3

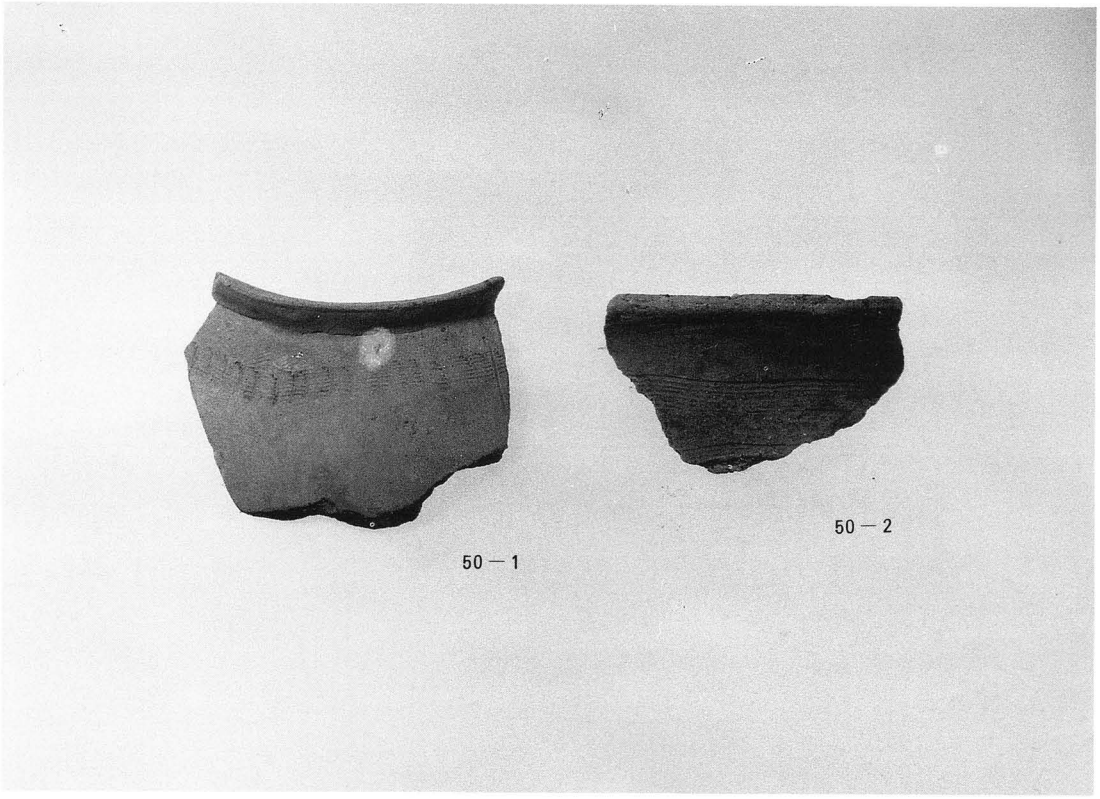
50－12



50－10

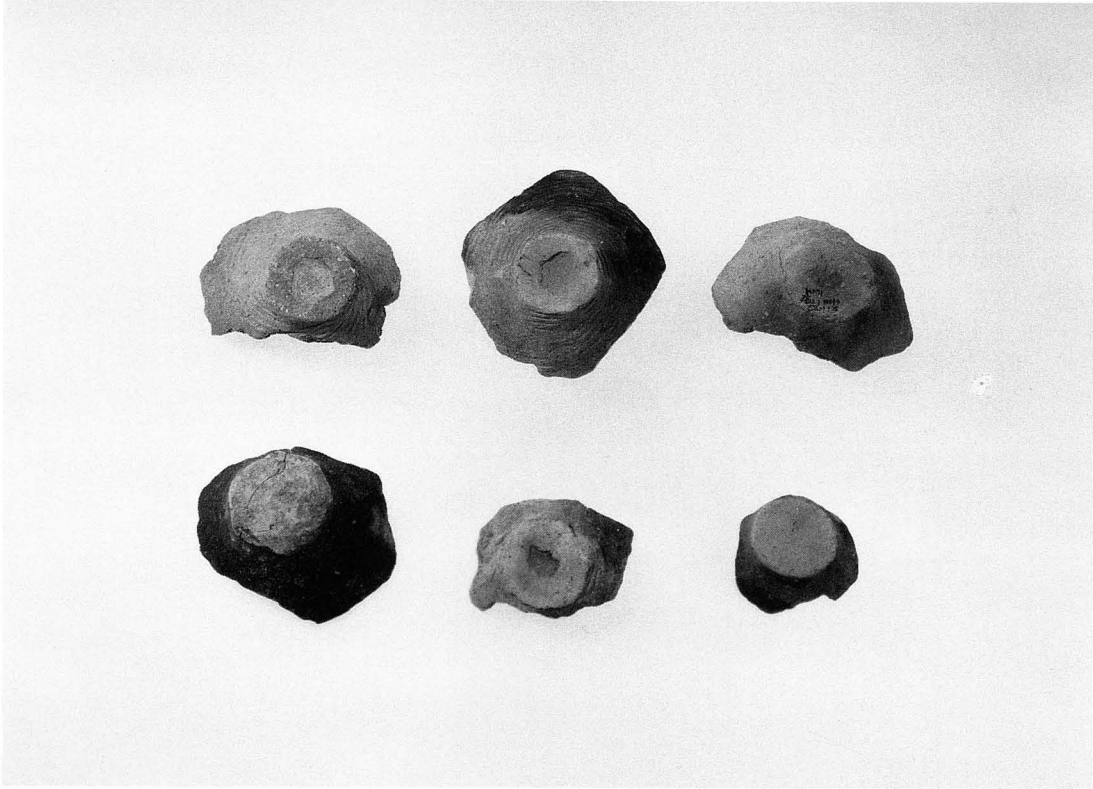
50－11

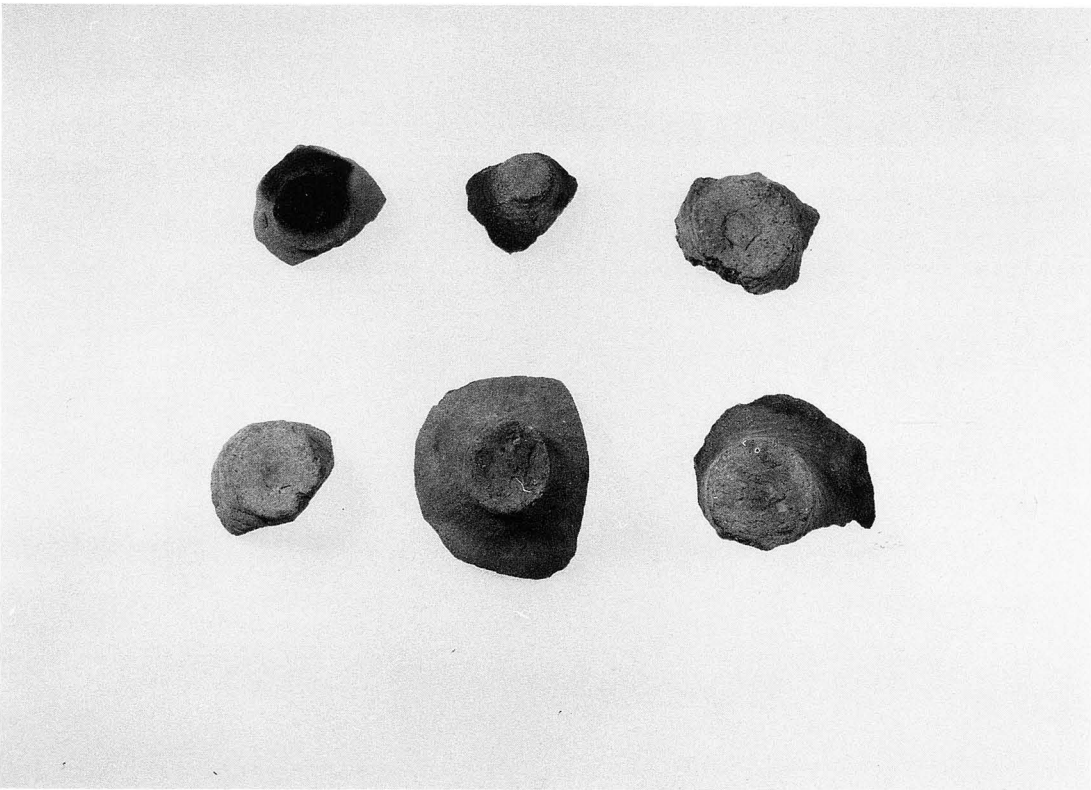
図版18　弥生中期包含層落込み状遺構出土土器



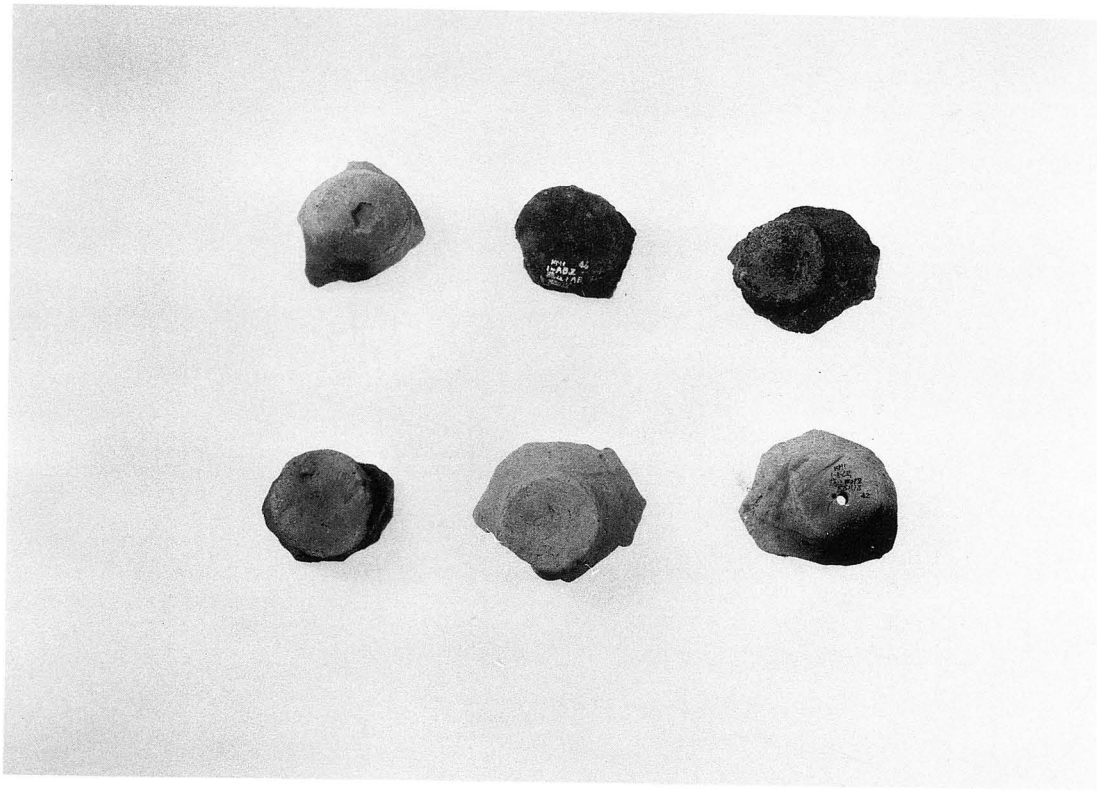
図版19　落込み状遺構出土土器

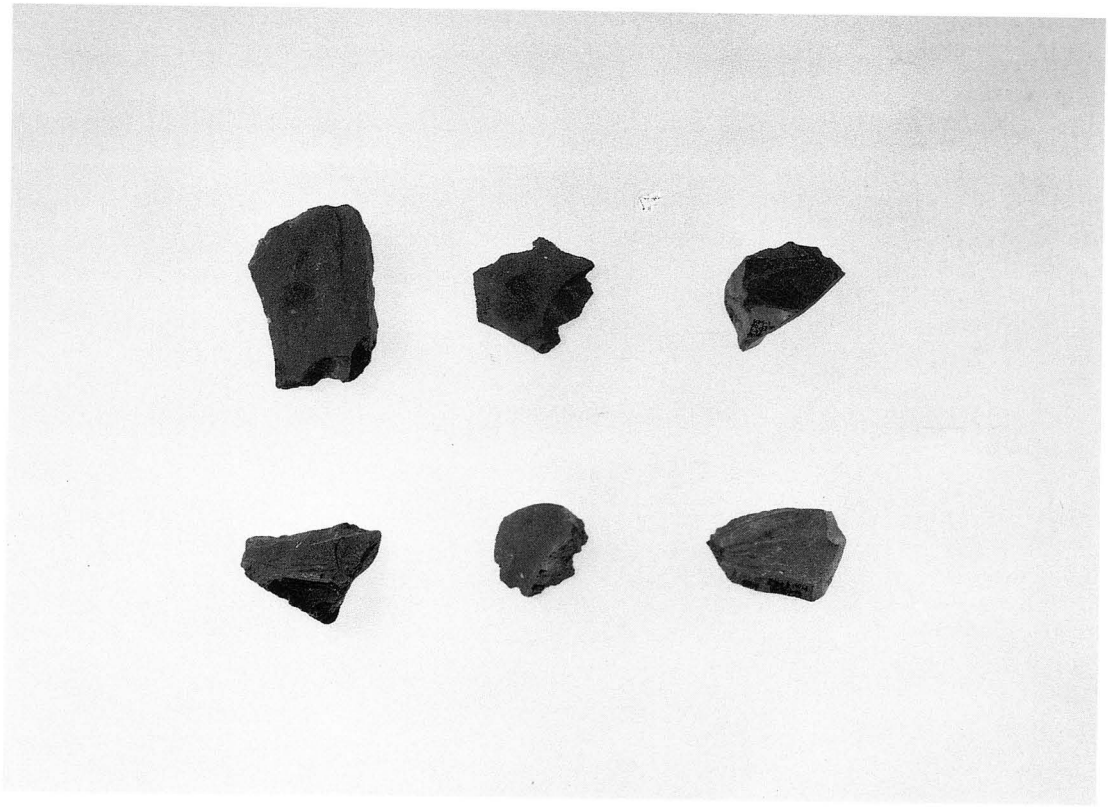
図版20　落込み状遺構出土土器





図版21　落込み状遺構・中期包含層出土遺物





（財）八尾市文化財調査研究会報告19

亀　井　遺　跡

―南亀井町４丁目41－１の調査―

発　行　平成元年４月

編　集　（財）八尾市文化財調査研究会
〒581 八尾市清水町１丁目２番１号
ＴＥＬ（0729）94－４７００

印　刷　明新印刷株式会社

表紙　レザック66＜260kg＞
本文　書籍用紙＜70kg＞
図版　マットアート紙＜135kg＞